

物に因りて道を離れず、物は道より見れば粗であつて本と爲すに足りないけれども、人間生活からいへば爲さなければならぬ。天の妙體を察するに明かでないければ、従つて其徳は純一でない。徳に純ならず、道に通じなければ事物は凡て暗味であつて、事に觸れ物に就いて一も可なるところはない。人にしてこの道を明かにしなければ草木と同じく徒に腐ち果てるのみである。何と悲しむべきことではないか。

然らば、所詮道とは何んなものかといふに、道には天道もあり、人道もある。無爲にして尊いものは天道、有爲にして果はしいものは人道である。謂はゞ天道は本體にして主人公であり、人道は作用にして家來のやうなもので、天道さへ立てば人道はおのづから之に附隨して出て來るもので、人道は天道によつて始めて意義あるものとなる。つまり兩者は主従のやうな關係ではあるが、而も其の間嚴然として相去ること甚だ遠く、決して同日に談すべきものでない。但し吾々が人間として生きてゆく以上、人道も全然廢すべきものではない。要は唯々先づ天道の尊を知り、人道を以て天道に反しなければ可い。この本末始終の別を審かにして第一に天道即ち自然の道體を領得しなければならぬ。

外篇十二 天地

この篇は前の天道人道の旨を承けて、天下に君たる者はたゞ天徳の自然に順ふべく、聖を絶ち知を棄て、作爲する所のないやうにして始めて道に達し得るので、かの墨子や惠子の輩は外物を逐うて徒に困苦するに過ぎぬといふことを論じてゐる。

天地は廣大なものであるが其化は平等であり、萬物は數限りもないが其治は一様である。即ち共に一貫したる造化自然の法則に依つて支配されてゐる。之と同じく人類は衆多であるが其主たるものは君であつて、その君たるものは造化の徳に本いて治を爲し、自然の道に従つて之を成すもので、その神妙な力をば玄と稱する。古の天下に君となつた人は何れも唯無爲を以て治めた。無爲であれば自然の玄道に合ふ。これが即ち天徳といふものである。

天人を通じて其根本をなす道の上から言を觀れば人君の名は正しく、分を觀れば君臣の序があつて事へると使ふとの義が明かになり、能を觀れば大小職を異にして天下の官は治まり、更

に汎く觀れば萬物各其宜しきを得て應ずるとして其道に非るはない。性命正しくして天地に通ずるものは徳であり、當然の理にして萬物に行はれるものは道であり、上に在つて萬人を治めるのは事であり、人の能を成す所以のものは技である。技は末ではあるけれども、人道に於いては廢すべからざるもので、此に於いて工夫修養すれば技から事に、事から義に、義から徳に、徳から道に進み、遂に自然に入るのである。斯くして人道から天道に進むことが出來、すでに天道に入れば人道はおのづから治まる譯であらう。それ故に古の治者は天に則り、己れ無欲にして天下おのづから足り、己れ無爲にして萬物おのづから化し、己れ淵靜玄默にして百姓おのづから安定自重してゐた。されば古書にも「無爲の道に通すれば萬事宜しきに適つて遂ぐべく、得るに心なくして無欲なれば、特に人や物ばかりでなく、幽冥の鬼神までが感じて、禍を爲すことはないやうになる」というてある。

吾が先生の言に「道は萬物を覆ひ、萬物を載せ、洋々として大なるものである。道を求める者は、心を洗ひ修養を積んで之を體得しなければならぬ」とあるが全くその通りである。更に少しく之を敷衍していへば、無爲にして爲さざるなきは、自然と均しきが故に之を天といふべく、無爲にして言ふは、天言はずして四時行はれ百物生ずるが故に之を徳といふべく、人を愛し物を利するは、やはり無爲から發するもので、之を仁といふべく、萬物各々不同なるも、無爲を以て凡てを玄同するは大といふべく、行の際立つて他に異なる所なく、且つ跡を示さないのは、衆を容れるが故に寛といふべく、萬有の不同を盡く我が有とするは富といふべく、人にしてよく天徳を守れば萬物を綱紀すべきが故に之を紀といふべく、天徳が成れば卓爾として立つ所あるが故に之を立といふべく、徳立ち道に従へば萬善圓滿となるが故に之を備といふべく、衆善己に備はり、外物の爲に志を挫かざるが故に之を完といふべきである。求道者もし此の十個のものを十分明かにすれば其徳はすべてを包容して宇宙に充塞し、其恩はすべてに洽あまぬく沛然として大雨のそゞぐが如くであるから、萬物は皆之に歸嚮するのである。修養の極こゝに至れば、天地はすべて我が心量の中に在るのであるから、黄金は山に藏め、美珠は淵に藏めて愛惜することなく、財寶を貪らず、富貴を求めず、長壽を樂まず、天死を哀まず、榮華を譽とせず、零落を愧と思はず、すべて一世の利欲に執着して私有のものとする考もなく、天下に王たるの身を以てして、己れ貴顯の地位に在りとも思はない。要するに、能く上の十徳を明かにす

く、無爲にして言ふは、天言はずして四時行はれ百物生ずるが故に之を徳といふべく、人を愛し物を利するは、やはり無爲から發するもので、之を仁といふべく、萬物各々不同なるも、無爲を以て凡てを玄同するは大といふべく、行の際立つて他に異なる所なく、且つ跡を示さないのは、衆を容れるが故に寛といふべく、萬有の不同を盡く我が有とするは富といふべく、人にしてよく天徳を守れば萬物を綱紀すべきが故に之を紀といふべく、天徳が成れば卓爾として立つ所あるが故に之を立といふべく、徳立ち道に従へば萬善圓滿となるが故に之を備といふべく、衆善己に備はり、外物の爲に志を挫かざるが故に之を完といふべきである。求道者もし此の十個のものを十分明かにすれば其徳はすべてを包容して宇宙に充塞し、其恩はすべてに洽あまぬく沛然として大雨のそゞぐが如くであるから、萬物は皆之に歸嚮するのである。修養の極こゝに至れば、天地はすべて我が心量の中に在るのであるから、黄金は山に藏め、美珠は淵に藏めて愛惜することなく、財寶を貪らず、富貴を求めず、長壽を樂まず、天死を哀まず、榮華を譽とせず、零落を愧と思はず、すべて一世の利欲に執着して私有のものとする考もなく、天下に王たるの身を以てして、己れ貴顯の地位に在りとも思はない。要するに、能く上の十徳を明かにす

れば萬物皆一齊にして物我の對を絶し、死生同狀にして己れに取つて何の變りもないといふ道理を覺るのである。

又吾が先生の言に「道は淵のやうに靜かにして定まれるもの、溼しむのやうに清くして汚れのないものである。金石も擊たなければ鳴らないやうに、道も物至り感じて後に應ずるものであつて、感ぜずして先づ應ずるものではない。斯く道は感應常なく唯々物の去來に任す。従つて何物もよく其の方圓を定めることは出来ない。是れ即ち道の道たる所以である」とある。思ふに前の十個の王徳を備へた人は素朴にして天下の事よく流通しないものはないが、而も自ら以て善とせず、たゞ本原を立て、事至ればよく制し、物來ればよく應じ、その知は神明にひとしい。従つて其徳は廣大である。時としてその心が働き出て物に接するのは、外物から誘ふが爲に止むなく應ずるに過ぎぬ。故に形は道に非ざれば生ぜず、生は徳に非ざれば明かでない。言ひ換ふれば道は生の原もと、而して之を養ひ成すものは徳である。故に形生を保存し、その天然を完うするには其根本たる道徳に向つて工夫を用ひねばならぬ。すでに能く徳を立て道を明かにし得る者は王徳の人と謂ふことが出来る。

靜にして冥々たる中に視、寂として聲なき中に聽き、而して其の冥々の中に獨見の世界があり、無聲の中に獨聞の境地がある。故に深々不測なるも、其原を窮めて能く物象を認め、神明無比なるも、其妙を盡して能く精華を明かにするのである。故に其の萬物と相接する場合に、至無の如くにして而もよく萬物の求めに應じ、時に隨つて自由に動き、而して其歸宿を要するに、大小長短遠近一に宜しきに適ひ、吾心を以て豫測することはない。

黄帝が赤水の北に遊び、崑崙の丘に登つて南方を望み、やがて歸らうとした時、適々自ら持つて居た大切な玄珠を無くした。そこで黄帝は知に命じて之を索さがさせたがわからず、離朱に命じて索させてもわからず、喫詬に命じて索させてもやつぱりわからず、最後に罔象に命ずると、彼は直に見つけた。黄帝は歎じて「罔象にして之を見つけ得たとは、誠に不思議なことだ」と言つた。

(譯者註——此一節は全然譬喩で、つまり才敏捷なる者は、動もすれば高遠に過ぎ知慮に馳せて、却つて肝腎な幽玄の徳を失ひ易いものである。而して斯徳は思慮や視聽や言説を以て求め得られるものではない。これら凡てを超越したる無心に依つて自然に體得する外はないといふ意を偶したものであ

堯の師を許由といひ、許由の師を齧缺といひ、齧缺の師を王倪といひ、王倪の師を被衣といふ。或る時堯が許由に向つて次の話をした。

堯「貴方の先生の齧缺は天に配して天子となすべき人物ですか。もし然うであるならば私は彼の先生の王倪に頼んで、彼を迎へて國を譲りませう。」

許「齧缺を迎へて國を譲らば天下は危あぶくなるであらう。齧缺は予の先生ではあるが、其の性格は聰明叡知、事に應ずるに敏給であつて、凡人の及ぶ所でない。而して又彼は人爲の知を用ひて自然の天に復らうとして居る。換言すれば人道を本として天道を之に結び附けようとして居る者だ。彼は知を用ひて、過を禁ずる法はよく知つてゐるであらうが、其過の由つて生ずる原因を知らぬ。若し彼に天下を與へて天子としたならば、有爲の跡を以て天下に臨み、人をして其天性を失はしめ、己を本とし萬物を別物にして物我相對の見地を脱することが出来ず、知を尊び、之を以て外物を逐うて馳せ、末事に使役せられ、外物に束縛せられ、己より命じて外物を應ぜしめ、己の知を以て衆物の適宜に應じ、外物に隨つて散亂して内に自得

するところなく、萬境の間に／＼移り化して、本然の我に覺めることは出来ないであらう。斯様な人物が、いかで天に配するに足るものであらう。されども今、一族の者が寄り集れば、一番上には宗ぶべき祖があり、其下に衆父どもが居るのであるが、齧缺は恰も衆父即ち衆人の父たる地位を占むべき者であつて、衆父の父となる資格はない。つまり彼は一方の諸侯位にはなれるが萬乗の天位に登るべき人物ではない。元來有爲の治は天下を亂す主本であつて、臣下の禍となり天位の賊となるものである。」

堯が華の地に巡遊した時、華の境界地の番人が堯を見て一場の會話をした。

番「聖人よ、私は聖人の將來を祝福します。第一、聖人の長命を祈ります。」

堯「そは吾が望む所でないからお断りする。」

番「それでは聖人の富まれんことを祈ります。」

堯「それもお断りする。」

番「それでは今度は聖人に男子多からんことを祈ります。」

堯「折角ながらそれもお断りする。」

番「壽と富と男子多きとは皆人の欲する所であるのに、貴方に限つて之を御望みなさらないのは何うした譯ですか。」

堯「男子多ければ其中には不肖者も出来、子故に迷ふ親心で、心を悩ますことが多く、富裕になると事が繁くなつて煩はしく、餘り長く生きると其のうちには色々の失態を演じて辱を貽すことが多い。此の三者は、所詮徳を養ふ所以でないから、敢て辭するのである。」

番人は言葉の調子をかへて、さも慨歎したやうに言つた。

番「何だ。そんな考であるのか。今迄聖人だと思つて居たが、今の言葉を聞いて見ると、たか知られた君子位の間人だ。抑々天は萬民を生じて、夫々相應な職分を授けるものである。だから男子が多くとも、銘々職を授ければ各々其位地を得て所志に向つて進むから、別に憂懼することはない。又富んでも一人の擅有とせずして人に分けてやれば、左程面倒な事もない。一體、聖人は其居を擇ばざること鶉の常處なきが如く、食に心なきこと鷄が母の哺を仰ぐが如く、寓する所に隨つて戀著せざること鳥が飛んで跡なきが如くである。天下道あれば萬物と共に各々安んじて其生を得、天下道なければ徳を修めて隠退し、千歳の後、現世を厭へば

やがて天に上り、かの白雲に乗じて上帝の在す處に往くならば、病老死などの災患もなくして常に幸福である。されば長壽なりとも何で辱の多いことがあらう。」

やがて番人は立ち去つた。堯は其非を悟り、番人の跡を追ひかけて願つた。

堯「一寸待つて下さい。御尋ねしたいことがあります。」

番「もう言ふだけのことは言つた。汝退いて息へ。」

番人は後振向きもせず去つて了つた。

堯が天下を治めた時、伯成子高は諸侯となり、堯は舜に天下を授け、舜は又禹に授けた。禹の時になつて伯成子高は諸侯を辭し、退いて農耕に従事した。禹が試に往つて見ると、やはり野に耕してゐた。禹は下手に立つて恭しく問うた。

禹「昔、堯が天下を始めた時、貴公は立つて諸侯となり、其後堯が舜に授け、舜が私に授くるに至つて、諸侯を辭して百姓をされるのは一體何ういふ譯か。」

子高「昔堯は無爲の治を施いたから、賞を加へずして民おのづから善に勤み、罰せずして民おのづから惡をしなかつた。然るに今君は盛に賞罰を行ふが、何の効果もなく、民は不仁であ

る。至徳はこれより衰へ、刑罰はこれより起り、天下後世の亂はこれより始まるであらう。君は到底理想的の人君ではない。疾く去れ。仕事を妨げられては迷惑だ。」
斯う言つて首を低れて耕し、顧みもしなかつた。

天地創造の初めに當つては、唯々無のみで、有もなく、名もない。これ渾然たる一元氣の起る所である。此一氣は未だ何等の形を具へず、無聲無臭、至靜至寂にして、而も萬有は皆此氣を恃んで無より發生するのである。萬有を生成せしめるといふ點より名けて之を徳をいふ。而して一氣未形の中に陰陽二氣に分るべき勢があつて、而も猶ほ分れるまでに至らないから此には間隙がない。萬有はひとしく此一氣を受け、陰陽の抱合相和に依つて生ずるので、之を命といふ。陰陽流動して物生じ、物成りて内に生理を含むものを形といふ。形體が内に神を保ち形神各々天則あつて其用を爲すを性といふ。性を修めて本然の徳に反れば、形神共に妙域に入る。かくて其徳極まれば神即ち無に同じく自然と一致して虚大となり、包まざるなく、容れざるなく、而して何等の障りもない。其胸中無心にして天地と合し、縉々として表面愚なるが如く昏きが如く見える。之を玄徳と謂つて、自然に順ふところの所謂大順に玄同する。人性の由つて

來る本源を窮めて、修養すれば其極天人契合の聖域に到達し得るのである。

孔子は或る時老聃に對つて問うた。

孔「今、此に人があつて、其の治を爲す道は聖人の成法に倣つて世と共に推移するも、必ずしも衆に雷同せず、衆の不可とする所を可とし、衆の不然とする所を然とし、宛も今の辯者が堅白同異の義を明晰に分別論斷するが如くであるならば、そは聖人といふことが出来ませうか。」

老「そりや誠につまらぬものだ。かの獄役や藝人など、同じく、形を勞し心を苦しめて自適することの出来ぬもので、丁度狸を執る狗が繋がれて愁ひ、木に飛ぶ猿が人に捕へられて山林から出て來たやうなものである。丘よ。予は今汝に汝が聞く能はざる所と、言ふ能はざる所とを教へてやらう。凡そ、首もあり趾もあつて人の五體を具備しながら、知も耳もない者は随分多いが、肉體を完備した人にして且つ無形無狀なる眞正の道を保存して居る者は全く皆無である。人の起居、死生、窮達は皆自然の運命であるが、人は大抵その譯を知らぬ。聖人の治はすべて自然に任せて物を忘れ、天を忘れ、且つ己さへも忘れて了ふ。すでに己を忘れ

て我執を脱するならば、こゝに渾然として天と契合するのである。汝の考へなどは之に比すれば元より言ふに足らぬ。」

將闞勉と季徹との問答。

將「魯の君が自分に治國の法を教へて呉れよ言つたので、一應辭退したが許されなかつたから、止むなく自分の考を述べたが、それは果して正しいか何うか、こゝで試に御話して見よう。自分は彼に向つて、必ず恭儉を服膺し、公正忠節の人を拔擢して偏黨することがなければ、人民は必ず輯ぎ安んずるに違ひないと、斯う申し上げた。」

季徹はからりと打笑つて答へた。

季「君の言ふことは、螻蟻が臂を怒らして車轍に衝き當ると同じで、力弱く事大にして到底任に勝へぬことである。若しそんな事をすれば、譬へば物觀臺を高うし、眺めを佳うして人に示すやうなもので、人は皆悦んでやつて来るが、やがて輿が盡きれば去るまで、何にもならない。君主が徳を掲げて人に誇示すれば、始めは人の歸往するものも多いであらうが、有爲の故に眞の帝王たることはむつかしい。」

將「自分には君の言葉がとんと解らぬ。何うか大略の説明を願ひたい。」

季「大聖が天下を治めるには、よく民心を察し、その搖ぐに従つて之を搖がしめ、民をして其性を自得して教を成し、自然に風俗を易へ、知巧を好む賊心を滅し、その獨覺の志を進め、大聖の治を忘れて、おのづからこゝに到達したと思ふやうになり、其の然る所以を考ない様にするのが第一である。斯ういふ風にすれば、堯舜の民を教化したことを崇び、己の自然に大同せる治を以て自ら謙退するには及ばない。たゞ聖人は民と共に自然の徳に大同して、心常に此に安住することを祈念するのみである。」

孔子の門人子貢が南の方楚に遊び、やがて晋に歸らうとして、漢水の南岸を通る時、一老人に出遇つた。老人は畠を作つてゐる所で、其所に掘つてある井戸に下りて、甕に水を汲み、それを畠に灌いで居たが、骨折る割に一向抄らないので、子貢は之を見かねて話しかけた。

子「こゝに一つの機械がある。之を使ふと一日に百畦に灌ぐことが出来て、骨折る割に抄るが貴方は要らぬか。」

老人は子貢を仰ぎ見ていつた。

老「それは何んな機械だ？」

子「それは木を鑿つて装置をなし、後を重くし前を軽くし、水を汲み出すことは物を引き出すやうに易く、その上下往來は湯の沸き立つやうに疾い。即ち樺はねといふのが是である。」

老人は何うしたのか、忿然として顔色を變じ、さも嘲弄するやうに笑つていつた。

老「予が先生から聞く所によれば、凡そ機械があれば、従つて運用の機事があり、運用の機事があれば、従つて機に應じ變に處する機心が生じて來る。すでに機心胸中に生ずれば方寸が亂れて純一虚明であることは出來ぬ。念慮紛起し、精神の安定を失つて、道に住することはとても覺束ないのである。」

子貢は之を聞いて大に慙ぢ入り、頭を低れて對へることが出來なかつた。暫くすると老人は問を出した。

老「汝は一體何を業として居るんだ？」

子「私は孔子の弟子である。」

老「汝の師は博學を銜うて聖人ぶり、誇りかに偽り飾つて社會の民衆を壓倒し、獨り善い氣に

なつて絃歌悲憤し、道德仁義を振りかざして名聲を天下に賣らうとするものではないか。汝もし思慮を去り禮容を棄て、無心無我に歸するならば、どうやら道に近づくであらう。今、汝は自分の身の始末さへ出來ないのに、何うして天下を治める暇があらう。予が仕事の邪魔をして居ないで疾く去れ！」

子貢は愈々愧ぢ懼れて顔を青ざめ、茫然自失の體で、悄々として三十里も行つた頃、やうやく恢復した。時に彼の弟子は彼に向つて問うた。

弟「さきに遇つたあの老人は何者ですか。先生は何故彼を見て容を變じ色を失つて終日恢復されなかつたのですか。」

子「これまで自分は孔子の様な人は天下唯一人だと思つて居たので、今復たあの老人が有らうとは思ひも寄らなかつた。自分が嘗て孔子から聞いて居る通り、事は時宜に適するを以て可とし、功は能く遂ぐるを以て成とし、勞力少くして功果の多いのが、聖人の天下を治める道であると思つて居たが、今老人の話を知ると、どうも然うでない。抑々道を守る所の人は徳全く、徳全ければ形體全く、形體全ければ精神全く、精神全きは聖人の道である。斯かる修

養をした人は、生を人間に託して、行ふ所は人と同じけれども、又之と異なる境地があつて、浮遊獨行、求むる所を知らず、往く所を知らず、その道は茫乎として純一渾全なるものである。故に功利機巧などいふことは其心中には全然忘れて居る。あの老人の如きは、其志に非ざれば往かず、其心に非ざれば爲さず、萬人之を譽めて其の爲す所を助成するも、自重して顧みず、萬人之を誹つて其爲す所を妨害するも、無心にして頓着せず、社會の毀譽褒貶も彼に取つては何等損益する所がない。斯かる人を全徳の人と謂ふのであらう。我々の如きは波の風に随つてゆらぐが如く、心定まらず徳一ならざるもので、所謂風波の民である。」

子貢は魯に歸つて孔子に其話をすると、孔子は斯う語つた。

孔「かの老人は假に混沌氏の術を修める者で、未だ其眞を得ることが出來ず、一術に固執して、應變融通の理に達せず、たゞ内のみを治めて外を修めてゐない。だから純一虚明を求めて、機械が其心を擾すことを愧ぢるのである。思ふに、心智明白にして自然の道に會入し、無爲恬淡にして淳朴に復歸し、天性を全うし精神を守つて世俗の間に遊ぶ者は、却つて世俗と共に行動して物に凝滞せず、時勢と共によく推し移るもので、汝はかゝる人に遇へば決して驚

かされることはないであらう。且つ渾沌氏の術は道の眞を得たものでないから、予と汝と之を識るにも及ぶまい。所詮かの老人は無爲の名に拘つて、なほ圭角を存し、無爲即有爲といふ境地まで進んで居ないものである。」

諄「君は東の方大海に遊ぼうとして、偶々苑風と東海の濱で出遇つた。二人は會話を始めた。

苑「君は何處へ行かうとする？」

諄「大壑へ往くのだ。」

苑「大壑へ往つて何を爲る？」

諄「抑々大壑といふ物は、宏大深遠にして測り難く、注げども満たさず、酌めども竭きることがない。だから予は此處に遊んで自由に楽しまうとするのだ。」

苑「それでは君は最早人間を治める志はないか。若し然うなら今聖知の法を聞いておきたい。」
諄「聖治の法？ それは外でもない。百官を立て、職事を施して各其任に當り、推舉拔擢して其才能を失はず、朝野上下、盡く事の實情を察して其爲すべき所を行ひ、言行ともに慎んで修身を先にして天下を後にすれば天下おのづから化し、手を舉げて指麾すれば天下の民應ぜ

ざるはないといふやうになる。是れ即ち聖治の法である。」

苑「然らば徳人とは何か。」

諄「徳人は一切自然に順つて、止るも思なく、動くも意なく、物我ともに忘れて、是非善惡の差別を設けず、四海の内、共に利して悦び、共に給して安んじ、さながら嬰兒の母を失へるが如く無知無心にして依る所なく、路に迷うて茫然たるが如くその歸する所を知らず、財用飲食足りて餘あれども、凡てその自りて來る所を知らない。これが即ち徳人の状態である。」

苑「然らば神人は如何。」

諄「神人はその神上つて天地の外に出で、高く日月の光に乗じ、萬有を照して而も聰明を用ひざるが故に心形ともに亡びるので、これを照曠といふ。天命を極め性情を盡し、天地また其化育を樂み、萬事其跡を滅し、萬有は其性を遂げて本然の眞に復り、是に至つて總ては一體となるので、これを混冥と名ける。」

門無鬼、赤張滿稽の二人は武王の軍を見て相語つた。

赤「武王はかの舜に及ばないだらう。だからこんな兵を動かすやうな患にかゝるのだ。」

門「天下均しく治まつて後に舜は之を治めたか。それとも亂れて居たのを治めたか。」

赤「天下均しく治まれば其願はずでに足るので、何も舜の徳を計つて、之を仰いで君とする要もない。舜は譬へば手を下して瘍を治療したやうなもので、元より無爲にして治めたものではない。又禿頭になつて鬚を施し、病氣になつて醫者を呼び、孝子が藥を慈父に進めて顔色憔悴してゐるやうに、既に亂れて後に治めたもので、聖人の羞ぢる所である。至徳の世に於いては、賢者を尙ばず、才能を使はず、君は梢枝のやうに高きに居て下を凌ぐの意なく、民は野鹿のやうに無知にして自適し、身はおのづから端正にしてその義たるを知らず、人はおのづから相愛してその仁たるを知らず、又おのづから誠實にしてその忠たるを知らず、おのづから理に中つてその信たるを知らず、蠢めき働いて互に使役し合ひながら、別に恩ともしない。従つて如何なる美事善行も其跡が残らないので、後世に傳つたものはない。眞の孝子は其親に諛はず、眞の忠臣は其君に諂はぬ。これ臣子たる者の盛事である。もし君親の言ふ所は何事も然りとし、行ふ所は何事も善しとするだけであれば、世俗は之を不肖者と

いふであらう。しかしそれが絶対に理にかなふかどうかはわからぬ。今世俗の然りとし善しとする所を然りとし善しとして同意すれば、世俗は喜んで決して諂諛の人とは謂ばない。されば世俗は特に君親よりも尊嚴なものであるかどうかといへば、それは疑問である。世間で舜を尊ぶのも格別の根拠があるのではなく、之を然りとし、之を善しとする世俗一般の見に従ふに過ぎぬ。所が人は誰も他人から諂諛の人と言はれると怫然として終りの色を現はすが、その實爲す所を見れば終身諂諛の人たるを免れぬ。比類を合せ、言辭を飾り、衆意に雷同して、いつの間にか終始本末の矛盾するを顧みず、衣裳を垂れ、彩色を設け、容貌を動かす、自ら高く標榜して當時の人に媚びながら自らは諂諛と謂はないのは、かの舜を尊ぶ輩と同類に過ぎぬ。衆に随つて同じく是とし同じく非として、自らは衆人の仲間と謂はないで済まして居るのは愚の骨頂である。自ら其愚を反省する者は大愚ではない。自ら其愚を自覺する者は大惑ではない。大惑は終身解脱する能はず、大愚は終身靈城に入る能はざるものである。譬へば三人で道を行く場合に、其中の一人が道に迷つても、猶ほ目的地に到達することが出来るであらう。そは迷ふ者が少いからである。しかし其中の二人が惑うた場合には、

如何に苦心しても行けない。こは言ふ迄もなく惑ふ者の多いが爲である。今や天下を擧げて悉く惑うてゐる。予一人で道を求めて之に向はうとするも到底叶はぬであらう。誠に悲しいことだ。

咸池とか大韶とかいふやうな古雅な音楽は俗人の耳に入つてもわからぬが、折楊、皇華などいふ俗曲ならば俗人一般にわかるから、聲を同じうして大に悦び笑ふ。之とひとしく高言が俗人の心に止まらず、至言が世に顯はれないのは、俚俗の言が勝つてゐる爲である。今、二缶の俗音を以て一鐘の正音を惑亂せば、到底音律に適ふことは出来ない。現代の状態は正に之と同じである。滿天下盡く惑うて居るのに、予一人如何に道を求めて之に向はんとするも何とも致し方がない。それを知りつゝ強ひて何とかしようとするのは、又一の惑である。故に之を打ち釋てゝ求めないのが一番だ。求めなければお互に憂に近づくことはなからう。」

癩病患者が夜中に子供を産むや、あわてゝ燈火を取つて之を熟視し、汲々として只管其子が己に似て居りはせぬかと心配するのは、即ち好惡の本心に因るのであつて、人は皆先天的に自知の明があるから、之を擴充すれば、やがて大惑をも解くことが出来る筈である。

今、百年経つた木を破り刻んで犧樽を爲り、之に青黄の飾りを加へ、その斷片は溝中に棄て
ゝ了ふ場合に、その犧樽を溝中の斷片に比すれば、其美惡には非常な隔りがある。然し乍ら兩
者とも切られて其性を失つた上から言へば、全く甲乙のないものである。之と同様に、盜跖と
曾參、史鰌とは其行義の善惡大に異なるけれども其性を失ふことは全く均しい。性を失ふ原因
には凡そ五つある。一に、五色は目を亂して、明を失はしめ、二に、五聲は耳を亂して、聰を
失はしめ、三に、五臭は鼻を薰べ、之を刺戟して腦中に入り、四に、五味は口を汚して、味覺
の當を失はしめ、五に、是非好惡の取舍は心を亂し、人性をして馳散せしめる。此の五者は皆
生を害するの甚しいものである。而るにかの楊朱、墨翟の徒は、之が爲に苦しみながら得意然
として居る。此の如きは予の所謂自得ではない。若しこれを以て自得といひ得るならば鳩や鴝
が捕へられて籠の中にあるものも、やはり自得と謂へる筈である。又取舍の心と聲色の欲とを
以て其胸中を塞ぎ、美しい冠や長い帯で以て其外面を拘束し、内は寨柵で取圍まれ、外は繩で
巻き附けられたやうに、身心ともに束縛の中に在つて自ら得たりとなす者が天得であるなら
ば、罪人が臂を繩でくゝられ、虎豹が檻の中に鎖されてゐるもの皆自得と謂ふべきであらう。

しかし世の中にそんな道理はあるまい。

外篇十三 天道

この篇は前の聖治の旨を承けて、再び天道人道無爲君臣の別を言ひ、帝王の道は天地を以て宗とし、道徳を以て主とし、自然を以て用とすることを示す。而して歸する所は虚静恬憺寂寞無爲に在りとしてゐる。

天道は常に運行して滞ることがない。これによつて萬物が生成する。帝王聖人の道も亦運行して止まることがない。故に天下は之に歸し之に服する。されば天道に明かに、聖道に通じ、帝王の徳に六通四達する者は、その自ら爲す有様は昧然として跡をけし、光をつゝみ、而して一舉一動靜ならざるはない。これ即ち明の極である。抑々聖人の靜といふは、靜といふことを善美のものとして殊更に靜にするのではない。外界の事物皆聖人の心を撓むるに足らずして、萬境皆空であるから、知らず識らず靜なることを得るのである。かの水は靜なるときは、その明は人の鬚眉をもはつきり燭し、又水の正しく平なるときは大工は之を標準として物の水平を

測るのである。水の靜ですら明猶ほ此の如きである。況して靈妙なる聖人が心の靜は言ふ迄もなく天地の鑑、萬物の鏡として、精微を映し深遠を照すことが出来る。

思ふに、虚静恬淡、寂寞無爲、一言すれば靜といふことは天地の中道であり、道徳の極致である。故に帝王聖人は此徳に休止して遷らない。休止すれば虚無となる。虚無なれば無中に有を生じて實となる。實すでに生ずれば、そこには整然たる條理がある。虚無なれば恬靜である恬靜であればよく感に随つて動く。かくして動けば其宜しきを得ないことはない。又恬靜なれば無爲である。無爲なれば事に任ずる者各々其責を盡す。これ即ち無爲にして爲さざることなきものである。而して無爲なれば愉樂する。愉樂する所に憂患はない。既に憂患がなければ長壽を得るは必定である。さて此の虚静恬淡寂寞無爲なるものは萬物の根本である。此理を明かにし、南面して天下に君たりしは即ち堯であり、北面して臣たりしは即ち舜である。此を以て上君主の位に處るは帝王天子の徳となり、此を以て下に居て事へるのは、玄德ある聖人、及び聖人の徳あつて位なき素王の道となり、此を以て退居閑遊して隱者となれば、江海山林の隱士悉く服従し、此を以て進んで仕へ、一世を安撫すれば、功業大に、名望顯はれ、而して天下大

同して一に歸するのである。

静なるべきときに靜にして聖人となり、動くべきときに動いて王となる。凡そ天下の道は無爲より尊きはなく、素樸にして文彩はないが天下の美これに勝るものはない。明かに天地の徳を覺つて居る者を大本大宗といふ。是れ即ち天と和合して一體となつたものである。かゝる人は亦天下を均調して人と和合するものである。人和を得る者を人樂といひ、天和を得る者を天樂といふ。莊子の言に、「吾が師大道は萬物を粉碎するも暴とせず、恩澤を萬世に及ぼすも仁とせず、上古より長存するも壽とせず、天地を覆載し、萬象を創造するも巧としない」とあるがこれ即ち道の極致にして所謂天樂なるものである。されば古語にも「道の極致に到達して天樂を知る者は、生を保つ間は天の運行するが如くに行ひ、又死ぬるときは自然の物化に順つて去り、靜なるときは陰と徳を同じうして止まるべきに止まり、動くときは陽と流を同じうして行くべきに行く」と言うてある。天樂を知る者は天と合するが故に天の怨みなく、人と和するが故に人の非りなく、且つ物の累ひもなく、鬼神の責めもない。更に又古語に「動くことは天の如く、靜なることは地の如く、一心定まつて能く天下に王たるべく、鬼神は深く藏れて顯

れず、精神は活潑にして疲れず、一心定まつて萬物服す」とあるが、これ即ち虚靜の徳を以て天地の間に推行し、萬物の情に通達し、自然に隨つて變轉して自適せざるなきをいつたもので、これ亦所謂天樂である。而して天樂は聖人の心懷に於いて天下を畜ひ容るゝ所以のものに外ならぬ。

要するに、帝王の徳は天地を宗とし、道徳を主とし、無爲を以て常となすものである。然し君臣上下の間には自ら差別があつて、無爲なれば、己れ天下を用ひて猶ほ餘裕綽々たるべく、有爲なれば、己れ天下に用ひられて汲々として猶ほ足らない。故に古の人は無爲を貴んだのであるが、上無爲にして下亦無爲なれば、下は上と徳を同じうし、臣として君の徳を僭する譯になる。又下有爲にして上亦有爲なれば、上は下と徳を同じうし、君として臣の道を濫することになる。さうなると上下相混じ、君臣相犯して必ず禍が起る。されば君臣の分立ち、君は必ず無爲にして天下を用ひ、臣は必ず有爲にして天下に用ひられるといふのが、萬古不易の常道である。

かくの如く、君臣上下の分あるが故に、古の天下に王たる者は、その明智は天地を籠絡する

も、凡て臣に任せて自ら慮らず、その辯舌は萬物を彫飾するも、凡て臣に委して自ら説かず、その才能は海内を窮盡するも、凡て臣に託して自ら爲すことはない。斯くして天地長養することなくして萬物自ら化育し、帝王無爲にして天下の功を致すのである。故に古語にも「天より神變なるはなく、地より富饒なるはなく、帝王より廣大なるはない」と言つてある。されば帝王の徳は天地に配合して、天地と一體になるといふ。これ帝王が天地に乗じて、萬物を役し、萬民を用ふるの道に外ならない。

本たる無爲は上のする所、末たる有爲は下のする所、又事の統括は主君のする所、繁多な事務は臣下のする所である。故に三軍五兵の如き威武を動かすは文徳の末であり、賞罰利害五刑の法などは教化の末であり、更に禮法度數刑名比詳は治の末であり、鐘鼓の音、羽毛の容は樂の末であり、哭泣衰經隆殺さいてつなどいふ喪禮喪服の制度は哀の末である。この五末は精神心術が自然の發動をなして、その後に従つて起つて來るものである。五末の學は古人にもあるけれども、そは止むを得ずして學んだのであつて固より此を先にした譯ではない。

君は先となりて臣は之に従ひ、父は先となりて子は之に従ひ、兄は先となりて弟は之に従ひ、

更に少は長に従ひ、女子は男子に従ひ、婦は夫に従ふのが人倫の次第である。その本は天地に尊卑先後の次第があるから、聖人が之に象り則つて、斯く人倫を定めたものである。天は尊く地は卑しいのは神明の位であり、春夏は先にして秋冬は後に従ふのは四季の序であり、萬物化生して、夫々種別があり、各々形状を具へ、先づ盛なれば後に衰へるといふやうな次第があるのは、即ち生滅變化の流行する所以である。斯く天地は神變不可思議のものであるが猶ほ尊卑先後の次第がある。況して人倫の道に於いては言ふ迄もない。今、宗廟に於いては最も親近なる者を尙び、朝廷に於いては最も官爵の高き者を尙び、郷村に於いては年長の者を尙び、行事に於いては賢能なる者を尙ぶといふのは大道自然の序である。されば道を論議して其序を知らぬ者は終に道ではなく、道を語つて道でない者は眞に道を覺悟することは出來ないであらう。

かるが故に古の大道を明知した聖哲は先づ天道を明かにして其次に道德を窮め、道德の次には仁義、仁義の次には人各々其分を守りて相侵さないこと即ち分守、分守の次には言論と實績とを比較考査すること即ち形名、形名の次には各人本具の素質材能に因つて事に任ずること即

ち因任、因任の次には其議論に基いて其實效を察すること即ち原省、原省の次には正邪善惡を判断すること即ち是非、是非の次には賞罰、賞罰既に明かなれば、知愚貴賤各々適當の地位に處り、仁賢者不肖者各々情實に因つて心を盡し、必ず能を分つて敢て自ら力を惜まず、必ず其名に因つて敢て其實を盡さないことはない。此九法に従つて、臣としては上に事へ、君としては下を養ひ、外は以て物を治め、内は以て身を修め、自己の知慮を用ひないで事物の自然に歸するのである。これを太平と謂つて、治の至極である。古書にも「已に形あれば亦必ず名がある」と言つてあるので、この形名といふものは古人も用ひたが、それは止むを得ずして用ひたのであつて、固より之を先にした譯ではない。

古の大道を語る者は天道を明知することから五變して始めて形名を擧げ、又天道を明知することから九變して賞罰を擧げ得るのである。この先後次序を知らないで驟に形名賞罰を語るのは、本末終始を辨へぬ者である。道を顛倒し、道に迂つて言説する者は人に治められる者であつて、人を治めることは到底出来ぬ。驟に形名賞罰を語るのは、これ治法の道具のみを心得て治法の大道を心得ぬ者である。そんな者は天下に用ひられる人間であつて、天下を用ふるに足

らぬ。斯ういふ人は辯士と謂つて、一曲偏執の人である。かの禮法度數形名比詳の如きは古人も既に用ひたけれども、こは畢竟下たる者が上に事へる法であつて、上たる者が下を畜ひ治める道ではない。

かつて舜は堯に對つて次のやうな問答をした。

舜「天下に王たる者は如何なる心掛で居ればよいと御考へですか。」

堯「下賤に處して、頼る所のない無告の民を侮らず、窮民を見捨てず、死者を哀み、幼年を愛し、婦人を憫むといふのが吾が心掛である。」

舜「成程それは美しい結構なことではありますが、然しまだ偉大ではありません。」

堯「それでは如何したらよいか。」

舜「天と合體した徳があれば、跡が顯れても寧靜を失はない。譬へば日月天に輝いて、四季順次に行はれ、晝夜常に廻り、雲起つて雨降るが如く、爲す意なくして自然に行はれてゆくもので、これこそ帝王の大道と申すものであります。」

堯「然らば吾は事物に凝滞して心を惑亂する者であらうか。思ふに、御前の無爲の盛徳は遠く

天に合ひ、吾が心を用ふるのは近く人事に合ふもので、なか／＼及びもつかぬことである。斯く天地の徳は古から偉大とする所で、黄帝堯舜も共に美として居る。畢竟古の天下に王たる者の爲す所は何ぞといへば、唯々無爲自然にして天地の徳に合ふのみである。

孔子はかつて西の方周に往つて、己が著書を周の書庫に藏めて、後世に傳へようとした。その時弟子の子路はこれが爲に謀つて、「私は周の圖書寮の役人に老聃といふ者があるが、この頃官を辭して家に居ると聞いて居りますが、先生が今書を藏めようといふ思召ならば、先づ試に之を訪問して手續を問ひ、紹介を得た方が便利でありませう」と言つたので、孔子はそれは尤もなことだと言つて、やがて老聃を訪問して右の件を頼んだが、老聃は承知しなかつた。そこで孔子は十二經の旨を繰返して述べ立てると、老聃は之を中斷して、對話を始めた。

老「汝の説は甚だばつとして要領がわからぬ。何うかその要點を言つて貰ひたい。」

孔「要は仁義に在ります。」

老「然らば仁義といふものは人間の天性に本づいたものであるか。」

孔「如何にもさうです。君子にして若し仁ならざれば名行は成就せず、義ならざれば生道は成

立しないのですから、仁義は眞に人間の天性であつて、何の疑ふところもありません。」

老「それでは仁義とは何んなものか。」

孔「中心からして物の安樂を希念し、自他平等に慈愛して、毫も私心を挟まないのが仁義の内容であります。」

老「まあ、汝の言ふ所は恐らく浮偽に近くして、道の眞を得て居ないであらう。平等兼愛などいふことは随分迂遠な考ではないか。私心を挟まぬといふのは、既に無私といふ考に執はれて居るのであつて、結局私心があるのである。汝若し天下の人民をして其養を失ふことなく、その性を全うせしめんと欲するならば、宇宙の間、自然の理法があつて、天地覆載し、日月照臨し、星辰羅列し、禽獸群居し、樹木生立し、各々其天分に順つて居るやうに、汝も亦自然の徳に依り、自然の道に順つて行けば、それで十分至つたものである。何も力を勞し心を困しめて仁義を掲げ出し、太鼓を叩いて迷子を探すやうにやかましくして、世間を騒がせるに及ぶまい。さても汝は人の天性を掻き亂す者である。」

士成綺といふ者が或る時老子に會つて質疑した。

士「私は豫て先生は聖人であると聞いて居りますので、遠路をも厭はず、御目にかゝらうと思つて足を痛め、艱苦を忍び、息もつかずに遙々とやつて来た次第であります。今先生をつくく視ますのに、聖人とは思はれません。何となれば、先生の家の鼠の巢には蔬菜が餘つて居るほどであるのに、自分の妹をすてゝ養ひもしないのは不仁といはねばなりません。粟帛や飲食物は前に絶えることのないほど豊であるのに、猶ほ財を積み物を收めて崖なく、實に足ることを知らぬ御方です。」

老子は之を聞いても一向頓着せず、一言の應へもしなかつた。士成綺はその翌日再び老子に會つて言うた。

士「昨日私は先生の前で先生を刺りましたが、今日は大に前非を悔いて、昨日のやうな心は全く無くなつて胸中空しくなりました。一體何ういふ譯でせうか。」

老「今、自分は巧知神聖といふものを脱却して、其の上に出て無心となつて居る。故に昨日君が自分を牛馬と呼んだならば自分も亦自ら牛馬と謂つたであらう。苟も其實あつて人がこれに然るべき名を與へるのは當然のことであるが、若しそれを受けなければ、重ねて禍を受け

る者であらう。自分が人に服従するは恒のことである。然し殊更に服する意があつて服するのではなく、何時も無心であり、自然である。」

士成綺は老子の言を聞いて恐れ入り、身を側て、老子の影を履むことを避け、其後に従つて一步一步踏みつゝ静に行き徐に進んで問うた。

士「然らば身を修めるには何うしたらよいでせうか。」

老「汝の容貌はきは立ち、目はきろくしてゐる。額は擴大にして誇りかであり、口は張り開いて常に物を言はんとし、狀貌は峨然として自ら高く構へ、凡ての容子を見ると繋がれた奔馬のやうに、身は止まるも心は何處へか馳せ去つてゐる。心一たび動いては事毎に拘泥し、事に觸れては敏捷に發し、所謂是非の分別に務め、己の知巧を用ひ、見聞多くして心の純朴を失ひ、爲す所凡て不自然であり、不信實である。かの他國の僻地を侵す者を竊(賊)と呼ぶが、不信の人も此類たるを免れぬ。」

更に老子の言葉に斯ういふがある。

「道は大に於いても終極なく、小に於いても遺す所なく、細大を網羅して萬物その中に備は

るのである。されば道は廣大にして包容せざるなく、深遠にして思議することが出来ぬ。形徳仁義などは抑々神妙なる道の末である。然し至聖真人でなければ、その本を執り末を定めることが出来ないであらう。至人が世を有つことは亦なんと大なることではないか。天下を撫育する地位に在つても、外物は至人の煩累となるに足らず、天下に威權を奮ふ地位に處つても、心之と伴ふことなく、眞君に任せて利の爲に遷らず、事物の眞實を極めて、能く其根本を守る。それ故に天地を外にし萬物を忘れて、精神寂として困しむ所なく、おのづから道に通じ、徳に合ひ、仁義禮樂を擯けて用ひない。是れ即ち至人は本を知り、心靜にして定まる所があるからである。」

現代の人は道は書中に備はつて居るといふので書物を貴ぶが、書物は元來言葉を戴せたものに過ぎない。言葉にも貴ぶべき點はあるが、それは言葉の意味に外ならぬ。けれども意味は夫々指し示さんとする微妙な方面があつて、それは到底言葉では遺憾なく傳へることはむづかしい。然るに世人は言葉を貴ぶが爲に書物を傳へるのであるが、これに依つて道が傳はつて居る譯でない。されば世人が之を貴ぶとも、眞に貴ぶに足るものではない。抑々目に視て見るべきもの

は形と色、耳に聽いて聞くべきものは名と聲とである。今、世人は斯かる外的な形色名聲によつて、眞實を悟るに十分であると考へて居るのは誠に悲しむべきである。形色名聲は果して眞實を盡し得るものでないから、眞に道を知る者は言に依つて十分傳へることが不可能であることを知るが故に言はない。それに、道知らぬ輩が言を以て眞實を傳へようとした所で、言へば言ふ程眞に遠かるのみである。何うして之に依つて道を識ることが出来よう。

齊の桓公が或る時堂上で讀書して居ると、車師の扁といふ者が堂下で車輪をけづつてゐたが、やがて椎と鑿とを棄て、堂に上り、桓公に對つて突然問を出した。

扁「今君の讀んでおいでになる書物は何ういふ言の記してあるものですか。」

桓「聖人の言である。」

扁「聖人は現に存在して居ますか。」

桓「そりや最う疾くに死んで了つて唯その言のみが残つてゐるのだ。」

扁「然らば、君がお讀みになる所は古人の糟粕に過ぎません。」

桓「寡人が書を読むのに、貴様が車師の分際で、彼此批評すべきことではない。不届千萬な奴

だ。若し何等か尤もな意見があれば可いが、然うでなければ其儘には捨て置かぬぞ。」
 扁「私が私の職業の上から考へて見ますと、輪をけづつて箒ほうを入れるのに、徐ゆるすぎるときは、容易に箒はらが堅固でなく、又疾かたすぎるときは、澁しぶつて箒はらにくいのです。徐ゆるからず、疾かたからず、丁度程善き手加減といふものが呼吸で、唯々手と心との感應契合に依つて出来ることで、口では到底現はされないのであります。しかし、自然とその間に一種の定まつた心術が働くので、決して偶然ではありません。されば私は之を私の子供に教へることも出来ず、亦子供も亦私から傳受することが出来ませんので、私は七十の老軀を以て今猶ほ車輪をけづつて居るのであります。古の眞人と、其の傳へることの出来ぬ心術とは、共に疾くの昔に滅してゐる筈ですから、今君がお讀みの書物も、要するに極妙の精を取つた古人の糟粕のみでありませう。」

外篇十四 天 運

この篇は上の天地天道二篇の意を承けて一層詳しく論じたもので、天地帝王の道は無爲を貴び有爲を賤しみ、眞の道德を重んじ、世俗の仁義を輕んずることを説いてゐる。

天は運行し、地は停處し、日月其所に争ひ馳せて居るが、そは一體誰が主宰となり、誰が統括し、又誰が無事に居て能く之を推し行ふのであるか。そは何處かに機關の備へがあつて、止むなき必然の勢に依るものであらうか。又、一旦運轉し始めた以上は中途で自ら止まる譯に行かぬのであらうか。雲が雨となつて降り、雨がまた蒸發して雲となり、一上一下、循環して止まないが、こは誰の所爲であらうか。誰が無事に居つゝ面白半分に仕でかすのであらうか。又あの風は北方陰氣の處に起つて、或は西或は東に吹き廻り、或は下から吹き上つて彷徨さまよふのであるが、こは誰が呼吸し、誰が無事に居つゝ煽動するのであらうか。此の如き宇宙現象の起る理由は如何。

之に就いて巫咸福は斯う言つて居る。

「いざ、吾れ汝に語らう。天には春夏秋冬且暮の六氣があり、又、水火木金土の五行があつて、その交渉の結果、種々の變化をするのが自然の理法である。而して帝王たる者はこの理法に順つて行へば治まり、之に逆へば凶である。之を圖象に示したのがかの九洛であつて、王道は此に成り、天徳は此に備つて居るから、之を以て下土を監照すれば無事に居て天下おのづから之を推戴するのである。これを上皇と稱する。」

宋の宰相の蕩といふ人が莊子に仁を問うた時、莊子は之に答へていつた。

莊「虎狼は即ち仁である。」

蕩「そは何ういふ譯で？」

莊「虎狼は猛獸ではあるが、父子相親しむの情ある以上、之を不仁とはいへまじう。」

蕩「然らば最上至極の仁は如何。」

莊「至仁は相親しむことのないものである。」

蕩「親しむことがなければ従つて愛せず、愛がなければ亦孝もないと聞いてゐるが、既に親愛

なき以上、至仁即不孝と謂へはしまいか。」

莊「否、然うではない。至仁は遙に尙いものである。孝以上のものであつて孝を以て之を盡すことは出来ない。今貴方の言はれるのは、孝を超えた高尚な言ではなくて、未だ孝にも及ばないものである。抑々南方に旅行する者が、楚の郢まで往つてから北面して北方に聳え立つ冥山を望んだ所でそれは見えない。その譯は言ふ迄もなく相去ることが遠いからである。

至仁と孝との距離も亦之に異ならない。且つ孝にも幾つかの段階があるので、古語にも「敬を以て孝をするのは易いが、愛を以てするのは難い。又愛を以てするのは易いが、親を忘れておのづから孝なることは難い。親を忘れることは易いが、親をして我を忘れしめ、兩者無心にして、渾然跡なきに至るといふことは難い。更に進んで、親をして我を忘れしめることは易いが、天下までもともに忘れるのは難い。天下を忘れるのは易いが、天下をして亦我を忘れしめることは難い。眞の徳は、堯舜などいふことを忘れて了つて、利澤萬世に及びながら、天下之を覺知しない位になれば此上もないことである。何もたゞ仁や孝を讚美誇稱するにも及ぶまい。かの孝悌仁義忠信貞廉などいふものは、皆自ら強ひて其徳性を役使するもの

で、一向多とするに足らぬ。故に古語にも「至貴己が身に具はれば、爵位の如きはおのづから其中に兼ね具はるものであり、至富の國財に於ける場合、至願即ち徳の名譽に於ける場合も亦然りである。至仁我に具はれば孝悌以下の八行はおのづから其中に并存するものである。是を以て道は萬古渝^{かほ}らず、すべてを兼ねて、それより以上に超越してゐる」と言つてある。されば至仁といへば道の極致を得たものであるのに、之を以て不孝と同一視して可いかなど、疑つては宜敷ないであらう。」

北門成が或る時黄帝に對つて質した話がある。

北「帝が咸池の樂を洞庭の野に奏せられた際、私は始めて聞いた時は何だか驚懼しましたが、次には倦怠を感じ、終には惑うて何が何やら解らぬやうになり、精神定まらず、口言ふ能はず、茫然として自失しました。」

黄「成る程、然うであらう。予は之を奏するに人を以てして其事を備へ、天に徴して音律の調和を合せ、禮を以て之を節し、義を以て之を正し、聲氣の元たる太清を以て主となし、清濁高下、皆これから節を取つたのである。抑々最上の樂は必ず先づ之に應ずるに人事を以てし、

之に順ふに天理を以てし、之を行ふに五徳を以てし、之に應ずるに自然を以てして、而る後音律整然として亂れず、よく春秋四時を調理して萬物を太和するので、これ即ち天子が中和の極を立て、樂を作る本である。天人相應すれば調理の中に四時迭^{たがひ}に起り、太和の中に萬物並び生じて、循環極りなく、一は盛に一は衰へ、文武生殺の次序があり、一清一濁、音節不^{おま}同の中に於いておのづから陰陽の律呂調和し、樂聲流暢光明にするのである。陽聲始めて作^{おま}る際に之を聞く者は、土中に蟄居する蟲が始めて起たんとするとき、雷霆轟然として之を驚かすやうに、樂の變化に惑はされて、その何れより始まり、何れにて終るかを知ることが出來ず、死生起倒窮りなく、常あるかと思へば忽ち變化し、而して其歸一を求むるも期待しがたい。だから汝は最初驚懼したのである。

予は又之を奏するに、陰陽の和、日月の光を以てし、其聲を夫々に吹きわけて、或は短く、或は長く、或は柔かに、或は剛く、變化齊一にして各々順序を守り、不易故常を主とせず、愈々出で愈々妙に入る。谷に在りては谷に満ち、阮^{わん}に在りては阮に満ち、人に在りては耳目を塞ぎ、精神を守り、物に在つては大小に隨つて各々足り、盈滿の中に在つて、其聲は悠揚

にして寛裕、其名は高大にして光明である。故に鬼神は其の處を得て幽界を守り、日月星辰は自然に運行して度を失はない。止まるが如くにして動き、動くが如くにして止まる。之を慮らんと欲すれども知ること能はず、之を望めども見ること能はず。之を逐へども及ぶ能はず、すべて物有るに似て物無く、得て捕捉しがたい。故に自ら其身を忘れて太虚の中に立ち、机に倚つて吟詠し、目に見んと欲するも、將た力を竭して逐はんと欲するも、何れも不可能であるから予は已めて了つた。思ふに、形、空虚に充滿するときは自ら身を忘れて、茫然として放弛するやうになるものである。汝が二度目に樂を聞いて怠つたといふのは正に此状態になつたのである。

更に予は之を奏するに無怠の聲を以てし、之を調ふるに自然の理を以てしたから、其聲は水の混然として一樣になり、草の叢り生ずるが如く、衆音一時に響いて、而も其由つて生ずる所を辨ぜず、聲振ひ揚つて、而も之を曳く者なく、幽昏寂然として聲聞を超越してゐる。されば其變動するや一定の方なく、其止處するや窈冥に於いてし、有無を混同して窺ひ知ることが出来ない。生に非ず、死に非ず、實に非ず、華に非ず、變化行止定まらず、愈々出

で、愈々奇、世の常の聲でない。故に世人は之を疑つて聖人に質すのである。聖人は自然から情、命を享けたる儘に保ち、五官備つて、その作用をなす所以の機をば張らず、言ひ換ふれば、見聞動作一に自然に出で、而も自ら知らない。これ所謂天樂であつて、言を待たずして心おのづから悦ぶものである。故に、炎帝が樂の頌を作つて、「聴けども聲なく、視れども形なし」というてゐる通り、天地に充滿し、宇宙を包んで、而も視聽を超越した謂はゆる無樂の樂であるから、汝は之を聽かうとしても感觸することが出来ないで、唯々惑うたのみである。畢竟樂は之を聞くと、懼に始まる。懼れるが故に、次には尊崇の念が生ずる。其次には怠を以てするが故に、心力竭きて之を逃れようとする。最後には惑を以てするからして愚となる。愚になり、知識を超越した所に於いて道と合致する。道に入れば従つて此樂と一體になることが出来る。」

孔子が西の方衛に遊んだ時、顔淵は師金に對つて問答を始めた。

顔「私の先生は衛へ往かれたが、成行きは何うでせう。」

師「惜しいことには、汝の師は恐らく窮境に陥るであらう。」

顔「そは又何故です?。」

師「かの祭祀に用ふる草製の狗が未だ神前に陳ね用ひられない間は、立派な筐の中に入れ、錦繡で覆うて、巫や祝が身を清め、齋戒した上で鄭重に取扱ふのであるが、用が済んで路傍に捨てられると通行人は首や背の區別なく踏みにしり、遂に草刈りが取つて焚いて了ふのである。所が一旦捨てたものを再び拾ひあげて立派な筐に入れ、錦繡で覆ひ、鄭重にして、其下に遊居したり、寝起きしたりすると、其の祟りを受けて、夢の爲に安眠を得ず、必ず時々魔はれるやうなことがあるであらう。今、汝の師も先王が已に陳列した狗に喩ふべき仁義を拾ひ上げて、弟子を集めて其下に遊居したり、寝起きしたりする者である。故に其祟りを受けて、宋では樹下で講義をしてゐる際に其樹を伐られ、衛では追ひ拂はれて跡を削られ、殷や東周に往つても窮死したのは、即ち悪夢に比すべきであり、陳、蔡の間に圍まれ、一週間も煮た物を食ふことが出来ず、まさに死に迫つたのは、即ち魔はれると同様ではないか。抑々水を行くには舟、陸を行くには車を使ふに越したことはない。若し水に行るべき舟を以て、陸に推さうとしたならば、一生涯かゝつても一二間も行けまい。古と今との相違は、水と陸との

その如く、周の道と魯の道との間には即ち舟と車との異ひがあるではないか。然るに今、周の道を魯に行はうとするのは宛も舟を陸に推すと同じで、勞して功なく、却つて身に災禍を蒙るであらう。汝の師は一定の方なくして無限に物に應じて變化する道を知らぬ者である。且つ汝はかの桔槔といふものを見ないか。之を引けば俯して、放てば仰ぎ、人に引かれるがまゝにして、決して自ら人を引くものではない。故に俯仰して罪を人に得ることはない。かの三皇五帝の禮儀法度は、其道同じきを以て矜とはせず、時に應じて適宜の治を爲すを矜とするのである。譬へば粗梨橘柚の如く、其味は互に相反して而も夫々口に適ふと同様である要するに禮儀法度は時に隨つて變通するの妙を具ふべきである。今、猿を捕へて周公の服を着せたならば、必ず嚙み切り、引き裂いて棄て、了つた後、始めてほつとするであらう。古今の差異を観るに、丁度猿と周公とのやうである。あの西施といふ美人が曾て癩を起して、其郷里で眉を擧めて歩いたれば、反つて一層の美を増したので、其村の醜女が之を真似て胸をかゝへ、眉を擧めて歩いたところが、其村の富人は其醜を嫌ひ、堅く門を閉ぢて外出せず、貧人は妻子を引連れて其村を去つたといふことがある。醜女はたゞ眉を擧めることの美

を知つて、其理由を悟つて居ないのだ。汝の師も徒に古先聖王の眞似をして居るのは、やはり此醜女と異なる所がない。氣の毒だがまた散々な目に遇ふであらう。」

孔子は年五十一にして未だ至道を聞かなかつたから、南方沛に往き老子に會つて、道を聞かうとして相語つた。

老「これは珍客だ。よく來たな。君は北方の賢者だと聞いて居るが、やはり至道を悟つてゐるかい。」

孔「未だ悟れません。」

老「それでは君は如何なる所に至道を求めたか。」

孔「私は禮樂の間に之を求めましたが、五年の久しきを経ても未だ得る所がありません。」

老「それがら更に何處に求めたか。」

孔「私は宇宙の理法に就いて考へましたが十二年の長年月を経ても未だ得る所がありません。」

老「そりやその筈だ。若し道といふものが他物の如く献上し得るものならば、臣たる者は其君に献上しない者はなからう。又進上し得るものならば、子たる者は其親に進上しない者はな

からう。更に又、道が人に告げたり與へたりすることの出来るものならば、必ず兄弟や子孫に告げもし與へもするであらう。しかし然うは行かぬのは別儀ではない。即ち、中心に道を受けると本質がなければ道を聞いても止まらず、又外に就いて質正する功がなければ道を聞いても實行するまでに至らないのだ。それで聖人が自ら悟つた道を説いて教を立てようとしても、外に受け入れる者がなければ聖人は教を出さぬ。又學んで道を知らうとする者が内面にその本質を具へなければ、聖人は之をして道を懷藏せしめる譯に行かない。思ふに、名は天下公共の器であるから、獨占してはならぬ。仁義は先王の遺慮かりのやどであるから、たゞ一宿する位はよいが、永く滞在して居ると社會から咎められて宜敷くない。故に古の至人は一寸道を仁に假り、宿を義に託するのみで、それからすつと逍遙自在の墟に遊び、苟且簡明の田から食を取り、他に施與することのない不貸の圃に立つて安んずるのである。而して逍遙なれば無爲を得べく、苟簡なれば不足を感じずして養足り易く、人に貸すことがなければ、己れ物を出して損することはない。斯ういふのが古の謂はゆる采眞の遊といふものである。今、富を以て結構だと考へる者は、人に祿利を讓ふことは出來ず、榮を以て結構だと考へる者は、人

に名譽を譲ることは出来ず、威權に戀々たる者は、人に權柄を與へ渡すことは出来ぬ。祿名權の如きものを自ら操るときは常に失はんことを恐れ、之を捨てると悲しむのである。斯くて一も鑒みる所なく、迷うて返ることを忘れてゐる者は、自然の制裁を受けた所謂天の戮民である。怨敵を殺し、恩德に報じ、取るべきは取り、與ふべきは與へ、君臣の間は諫め、師友の間は教へ、生かすべきは生かし、殺すべきは殺す。此の八つの者は道を受けて行ふ所の正しい道具である。但々道具であるから之を用ふる人によつて利とも害ともなるので、能く自然に順つて凝滞しない人にして始めて用ふることが出来る。正の正たる所以はこゝに存する然るに、其心にこれを否定して、自然に順ふことの出来ない者は、道の門が開けないで、到底悟入することは出来ない。」

孔子が老子に會つて仁義を語つたとき、老子は次のやうに言つた。

老「今^{ゆか}黠^{くさく}を鑿^{くさく}つて、芥が目に這入ると、一寸したことだが、目が昏んで方角が分らぬやうになる。又蚊や虻^{あぶ}が膚をさして、一晚中寝られないことがある。仁義も之と同様、毒を流して此上もなく心を搔き亂すものである。君、天下をして淳朴の質を失はしめないやうにし給へ。

君も亦無爲の風に依つて動き、徳を體して立つがよい。何も自ら高ぶつて、太鼓を打ち鳴らして迷ひ兒を索すやうに、醜^{みにく}齷^{くさ}するに及ばないぢやないか。鵠は毎日入浴するのでないが眞白であり、烏は毎日^{くろ}黔^{くろ}める譯ではないが眞黒である。黑白の天質は固より優劣を以て辨別するに足らぬもので、各々自然の性である。されば名譽の觀も廣大とするには足らない。魚が水^が涸れに遭つて陸に出て、口から沫を吹いて互に相濕し、辛うじて涸死を免れるといふやうな哀れな状態よりは、漫々たる江湖に遊び、各々自得して何も考へぬ方が遙にまさつてゐる。區々たる仁義是非の境に迷ふのは、至道に遊んで上下相忘れて夫々自得するに及ばない。」

孔子は老子の此話を聞いて、家に歸つてから三日の間は何の話もしなかつた。そこで門人は怪んで問を發した。

門「先生は老子にお會ひなさつたが、何事を御戒めなさつたのですか。」

孔「老子は龍に比すべき人であると思つた。一體、龍といふものは氣合して體を成し、氣散じて章を成し、雲霧に乗じて陰陽に養はれるものである。予は老子に會ふと開いた口が塞がれぬ程啞然として了つた。彼を戒めるなどは思ひも寄らぬことだ。」

門人の子貢は聞いて言つた。

子「さうすると、人には元來戸の如く動かすして、而も龍の如く見はれ、雷の如き聲あつて、而も靜に黙し、一旦發動するときには天地の如き偉大な働きをなす者があるのですか。私も老子の許に行つて其龍徳の様子が觀たいものです。」

斯う言つて彼は遂に孔子の門人と稱して老子に面會した。時に老子は堂に腰掛けようとする所であつて、微かな聲で應じて言つた。

老「予は最う老いぼれて了つた。汝は何事を以て予を戒めようとするのか。」

子「思ふに、三王五帝の天下を治めた方法は各々不同であつても、その令聞名譽を得た點は同じであります。然るに先生に限つて彼等は聖人でないと仰つしやるのは何故ですか。」

老「小子よ。少しく進み出よ。汝は何故に彼等が天下を治めた方法は不同であるといふのか。」
子「堯は天下を舜に授け、舜は禹に授け、禹は力を用ひて洪水を治め、更に湯は兵を用ひて桀を亡ぼし、周の文王は一代の間殷の紂王に順つて敢て逆らはず、其子武王は遂に紂王を亡ぼして肯て順はなかつたのであります。斯様に夫々異つて居りますから不同といふのです。」

老「小子よ。今少し前に出よ。これから汝に三王五帝の治世に就いて話さう。黃帝の治は天下の民心をして一に歸せしめたから、親族が死んで哭しないことがあつても非る者がなかつた堯の治は民心をして相親ませたので、其の親族の比較的疏い人の爲に喪服を降し殺いでも非る者がなかつた。舜の治に至つては、民心をして競争せしめたが爲に、孕婦は十月で子を産み、赤ん坊は五月で物を言ひ、二三才にもならない中に誰れ彼れの見分けをするやうになり、皆餘りに早熟して自然に反した結果、この時分から始めて早衰して夭死をするものが出來た。次に禹に至つては、民心を變ぜしめた故、人々は私心を懷いて兵刃の用が起り、而して盜を殺しても、普通の人を殺したとは異つて罪にはならぬといふことになつた。かくて人は互に親疎部落の種別を形成して天下大騒ぎとなり、儒墨の徒並び起り、是非善惡紛淆して歸趣する所を知らぬといふ始末である。彼等の言ふ所も始めは人倫の要に適つた所もあつたが、此頃に至つては全然婦女が容悅を求めると同じで、たゞ人に悦ばれようと競うて居るに過ぎぬ。情けない有様ではないか。汝よく聞けよ。三王五帝の治は名は治めると言つて大層らしいが、實は騒亂此上もないので、彼等の智は徒に巧詐に流れて、上は日月の明に恃つて

種々の天變を生じ、下は山川の精に背いて種々の地異を起し、中間に在つては四時の和を毀つて氣候の不順を來すなど、その毒は蠱毒の尾よりも激しく、暴れ狂うて手にをへぬ猛獸すら、自然のままに安んずることを得ずして其性命を傷つた。斯ういふ具合であるのに、自ら聖人だなどと考へて居るのは恥づべき限りではないか。」

子貢は此言を聞いて、驚懼の餘り立つにも立たれず、不安の様子であつた。

孔子と老子とはまた或る時次の様な會話をした。

孔「私は詩、書、禮、樂、易、春秋の六つの經典を治むること既に久しく、自らその典故を熟知してゐると考へ、七十二君にも遊説し、先王の道を論じて、周公召公等の事跡を明かにしましたが、一君として私の説を採用する者がなかつたのです。人に説くことの難く、道を明かにすることの容易ならんことは實に甚しいものですわい。」

老「君が治世の明君に遇はなかつたのは寧ろ幸だ。抑々六經は先王の殘した陳腐な跡形であつて、決して之を殘す所以の大道其ものではない。今、君の言ふ所もやはり跡に過ぎない。跡は履から出来るものであるが跡は履ではない。あの白鴉は互に視合ふときは眸子の動く暇な

くして神感によつて子を産み、蟲は雄が風上に鳴き、雌が之に應じて風下に鳴けば其氣相感じて子を産み、類といふ獸は一身兩性であつて、獨りで子を産むものである。萬物生々の道は種々あつて性命はともに變易することが出来ない。時は去つて止めることは出來ず、道は通を貴びて塞ぐことは不可能である。苟も道を體得したる以上は、在る所として不可なることなく、道を失つたからには在る所として可といふことはない。」

此の後、孔子は三個月外出を止めて思索に耽り、それから再び老子に會つて言つた。

孔「私はとうとう道を悟り得ました。烏鵲は交尾して子を産み、魚は互に沫を附けて交接し、蜂類は桑蟲を取つて類をかへて己が子となし、人は一子を産んだ後復た孕むと乳が出ないので、先に産れた幼兒は啼くのであります。此四者は生化各々異なれども皆物性の自然であつて、夫々大道から稟け得た所と思ひます。たゞ能く自然に順ふ者は凝滯する所なく、造化と友になつて天地の間に逍遙しますが、私は之を悟らないで、久しく造化と友たることは出來なかつたのです。思へば造化と友たらずして、能く他人を化し得べき道理はありません。」

老「それだけ気が付けば可い。もうそれで君は得道の人となつたのだ。」

外篇十五 刻 意

この篇は五等の士を列挙して重きを純素の真人に歸し、往々前篇の語を引いて反覆して説いてゐる。たゞ原文が割合に平淡であるので、僞作の疑が挟まれるが、その内容は有益な實踐上の言で養神の道を盡したものである。

心志を鋭峻にし、行爲を高尙にし、世俗を超越して高論を恣にし、只管現代を呪うて、獨り偉さうにばかりするのは山谷の隱士、時世を誹毀する人、若しくは淡薄に甘んじ、自ら水に投じて身を潔くする人などの好む所である。仁義忠信を談じて、恭儉推讓するのは、己を修めることに努めるのみであつて、世の平治を論ずる士、一世の師範として人に教へる人、若しくは遊居せる學者などの好む所である。大功を語り、大名を立て、君臣を禮し、上下を正すのは、天下の政治を云爲するのみであつて、朝廷に時めく士、君主を尊び、國家の富強を謀る人、若しくは功を遂げ、敵國を兼併する者の好む所である。山藪川澤に就き、閑散の地位に處し、魚釣りをして暢氣に暮すのは皮相な無爲に過ぎないので、江海に處する士、世を避けた人、閑暇

無事なる者の好む所である。呼吸法を行つて、體の新陳代謝をはかり、熊の木に登つてぶらさがり、鳥の翼足を伸ばして鳴くが如き容子をして強健法を行ふのは、長壽を求めると過ぎずして、按摩導引の士、形體を養ふ人や、彭祖のやうな長命を保つ者の好む所である。若しも心志を鋭峻にせずして、おのづから高く、仁義の名に依らずして、おのづから修まり、功名を立てずして、天下おのづから治まり、江海に避けることなくして、おのづから閑寂に、導引せずして、おのづから長壽を得、その身に有するも忘れざるなく、その身を忘れて有せざるなく、澹然底止する所なくして、萬善おのづから備はるならば、これこそ天地の道にして、聖人の徳である。そこで古語に「恬淡、寂寞、虚無、無爲はこれ天地の平衡にして道德の本質である」といひ、又「聖人は此四徳に安住する」と言つてある。此に安住すれば心平易であり、平易なれば恬淡である。已に平易恬淡なれば、憂患も其處に侵入することを得ないし、邪氣も來り襲ふことが出來ぬ。それ故に其徳さへ完備すれば、精神は従つて虧損することがない。されば古語にも斯う言つてある。「聖人は生きる間は自然に任せて行ひ、死ぬるときは物象の變化に任せて蟬脱の如く何の苦も無い。靜にしては陰と徳を同じうし、動にしては陽と波を同じうし、動靜

すべて無心なるが故に禍福に累はされず、福の先とならず、禍の始とならず、物來り感じて後に始めて應じ、物寄り迫つて後に始めて動き、事止むを得ざるに至つて後に始めて起つて之を爲す。要するに心知と技巧とを去つて一々天の理法に循ふのである。従つて天の災もなく、物の累もなく、人の誹もなく、鬼神の責もない。生きては流れの間に／＼浮ぶが如く、死しては休息するが如く、毫も生死に執着する所はない。すべて天理に附して思慮せず、豫謀せず、光あれども葆ほんで輝かさず、信あれども敢て期せず、寢入るときは精神凝寂して夢を見ず、覺めたる時は物の累を脱して自適するが故に憂ふることなく、心神純粹にして間雜せず、靈魂用に應じて罷おれることがない。これ即ち虚無恬淡であつて、天徳に合致するものである。」又「悲樂は徳の邪魔であり、喜怒好悪は道德の過失缺點である」と。されば心に憂樂のないのは至徳、一にして變ずることのないのは至靜である。更に又、物と忤ぶひ、物と交はり、物と逆つて吾が心を亂すことなく、吾が心の外に馳せ散ずることのないのは、虚、淡、粹の至極である。

更に又古語に「身體を過分に勞して休息しなければ困弊し、精神を過用して已まなければ疲

勞し、終には精氣が枯れ竭きて了ふ。譬へば水の性質は他物の雜らない時は清く澄み、動かない時は平坦であるが、四方を塞がれて流れる途がないと、腐り濁つて澄まないやうになる。これ天徳自然の象に合つたものである」といひ、尙ほ「純粹にして雜ならず、靜一にして變ぜず、恬淡にして無爲、動けば自然の理を行つてゆく。これ即ち心神を養ふの術である」と言つてある。今、干將とか莫邪とかいふやうな名劍を所有する者は、必ず匣の中へ大切に秘藏して滅多に用ひないのは、これ寶として珍重するの至りである。劍でさへ此の様であれば況して精神は言ふ迄もないことである。思ふに、精神はあらゆる方面に流れ達して極りのないもので、上は高く天際に至り、下は深く地中に蟠まり、萬物を化育して活潑自在なること名狀すべからざるさまは天帝に同じきが故に、之を天帝と名けるのである。純精素朴の道は唯々神を守るに在るので、之を守つて失ふことなく、功を積むこと久しければ終に神と一體になる。既に神と合體して精通するやうになると、又天理と合體して一となる。諺にも「凡人は利欲を重んじ廉潔の士は名節を重んじ、賢者は志を尙び、聖人は精を貴ぶ」と謂はれてゐる。精は神と同じである。そこで素とは不雜にして純白なるをいひ、純とは其神を虧損せずして、圓滿に保たれた

るをいふ。能くこの純素の道を體得すれば、適く所として眞の道に非ざるはない。此境界に住する者は取りも直さず眞人である。

外篇十六 繕 性

この篇は眞と俗との背馳を説き、その差別を辨別して、人をして末を捨て、本を務めしめんとしたのである。當時の學者が互に論争を事とし、世人をして適從する所を失はしむるを慨して、蒙を啓き惑を解くの一端としたものである。

性は學に依らなければ明かにすることは出来ぬが、かの儒墨の様な俗學を修めて其本初自然の性に復歸しようと求めた所で何にもならぬ。又明は思索に須つべきものであるが、利欲の心を以て世俗に没頭して居ては、却つて益々錯亂するのみである。斯様な人をば蔽蒙の民と謂つて最も愚かなるものである。古の治道の士は恬を以て知を養つた。これ即ち生れながらの本然に任せて殊更に努めて知を働かせないことである。知を事としないからして、知つても其本然の恬といふものを傷ふことはない。それでこれをば知を以て恬を養ふといふのである。斯様に知は恬を養ひ、恬は知を養つて、互に相助けてゆけば、自然にその中から和理といふものが生じて来る。和は即ち徳、理は即ち道のことである。さてその徳が凡てを愛して包容せざるなきは

即ち仁であり、あらゆる場合に向つて其宜しきを得ざるなきは即ち義であり、義明かにして己が誠を盡し、おのづから物と親しむのは即ち忠であり、中心純實にして其天真に反るは即ち樂であり、容體の行ふまゝに信せて、自然に節度體裁に適ふのは即ち禮である。然るに今、外面の形式のみに偏して禮樂を行ふならば、それは天下の亂れる本である。凡そ天下の亂れるのは、徒に他を正さんとして、反つて自ら其徳を蒙かぶまし、己が徳は天下を蓋ふに足らないのに、之を以て天下を蓋ひ、禮樂を講じて強ひて他を矯めんとして遂に民性を傷つて了ふからである。

かの古代人は混沌として未だ上下の別もなき中に在つて生活した。さうして一世の人と共に恬淡寂漠の道を得て居た。此時に於いては陰陽二氣は和靜であつて山川鬼神も擾さわれず、四季節序を得て萬物傷れず、群生天死せずして能く生々叢展した。人はたとひ知を有して居てもそれを用ふる餘地がないので、知は全く無用の長物であつた。斯ういふ状態を至一と謂ふ。至一の世は人何等の作爲を弄せずして常に無爲自然である。

所が、至一の世が漸く退化し、徳が衰へて、燧人氏、伏羲氏の時代になると、始めて天下を

治めるといふことになつた。そこで人々は理に順なるも、而も至一は最早失はれた。更に徳が衰へて神農氏、黄帝に及んでは力を用ひて天下を統治した。この時天下は平安ではあつたが、理に順でないやうになつた。又徳が一層衰へて堯舜の時代になると、愈々わざとらしくなり、天下に君臨して治理教化の流弊を興し、無爲自然の道に背いて淳朴の風を散じ、虚通の道を離れて不實の善をなし、徳を殊更にして仁義の行を立てた。斯くして後、天性を去つて有爲の心に従ひ、人は互に有心を以て相應じ、自他相競うて讒察するやうになつた。斯うなると徒に知の闘ひとなつて天下を歸一するに足らない。その上、文華と博雜とを以て之に附益した爲に、文は質朴を滅し、博は心神を擾した。かくて後、民は惑ひ、本然太初の性情に立ち反ることが出来ないやうになつた。

此に由つて觀れば、世は道を喪ひ、道は世を喪ひ、道と世と互に相喪つて了ふ。有道の士も世を興すに由なく、世俗の人も亦道を知る由がない。世俗の人すでに道知らざる以上は、聖人が山林に隠れずして世に在つても、その徳は人の目につかぬ。そは聖人が自ら隠すのではなくして世俗の人が之を認め得ないのである。されば隠れることを求めなくておのづから隠れること

となるのである。

古の所謂隱士といふ者は其身を山林に隠して世に現はれないのではない。又單に口を緘して物言はぬのでもなく、知を藏して少しも働かせないのでない。唯々時運の非なるが爲である苟も時運に當つて、大に天下に行ふことを得たならば、必ずや天下を混沌淳朴の至一に反して有爲の痕迹を止めないであらう。苟も時運に合はずして大に天下に窮したならば、性命の根を深くし、至極の道に安んじて時運の到來を待つの外はない。是れ即ち古の隱士がなした存身の道である。

古の身を存する者は、辯を以て知を飾つたり、知を以て天下の事物を追窮したり、自然の徳性を失つたりするやうなことをせず、高く獨立して、自らの境地に安住して、本然の性に立ち復るのみで、一點作爲の心を挟まないものである。無爲の大道を體して、有爲の小行を爲さず、不識の大徳を得て、小識を弄しない。小識は却つて徳を傷り、小行は反つて道を害ふものである。要は古語に言うてあるやうに「たゞ己を正しくするのみ」に歸する。己を正しくすれば物おのづから正しく、適くとして可ならざるなく、其悦樂常に充全なるが故に之を得志といふのであ

る。

古の所謂得志とは高位顯官の榮譽を擔ふといふ様な意味ではなくて、其の悅樂内面に充足して、外から別段之を増益することのないのを謂ふ。所が現代の所謂得志とは官位人爵を勝ち得るの謂である。思ふに、官位人爵が吾身に具はるとも、それは本然の性命ではなくて、外物が偶々自分の處へ來て寄留するに過ぎない。斯かる寄留物は、自分の身にやつて來ても圍ぐこと（まき）もならねば、又去つても引き止めることもならず、去來凡て彼れのまゝである。従つて榮譽の爲に得意になつて其志を肆にすることもなく、零落しても、志を屈し行を枉げて俗に趨るといふこともなく、中心の悅樂に於いては浮沈何れに處しても同じである。だから苦悶といふものがない。今若し外物の寄留を以て悅樂と感ずるならば、其が寄留する間はよいけれども、一たび去つたならば忽ち怏々として悶えるやうになる。されば樂しむと雖も、心は常に荒亂してゐる。故に古語にも「外物の爲に自己を滅却し、世俗の爲に本然の性を亡失して、本末輕重を知らない者をば名けて倒置の民といふ」とある。

外篇十七 秋 水

この篇は大小精粗の際涯なきを説き、知の知る所、即ち可知の範圍は大抵窮りがあるので、決して恃むに足らぬことを論じたものである。原文の筆致は極めて簡潔、理致も高遠で、内篇以外に於ける有数の文字である。

秋になつて降雨がとどく爲に水が出て、百川悉く黄河に注ぎ、濁流滔々として兩岸廣濶、洲渚遙かにして、水を隔て、遠く望めば牛馬も辨じ難い程である。時に、黄河の神たる河伯は欣然として喜び、天下の美を擧げて己が一身に在りと考へ、流れに順つて東行し、渤海の濱に至つて、東面して熟々視渡すと、流石に海は廣大なもので、際涯がわからない。是に於いて彼は始めて四方を見廻し、北海の神たる若を仰ぎ視つゝ、歎じて話しかけた。

河「諺にあるやうに、道は窮りないものであるのに、之を聞くこと僅に百位で最早自分程偉い者はないと思つて居るのは、正に吾輩のことである。尙ほ吾輩は曾て孔子の博聞を少しとし、伯夷の高義を輕しとした者の言を聞いて、始めは大法螺だと思つて信じもしなかつたが、今

や海を見て、君の博宏にして窮め難きを知り、上には上があるものだといふことが解つた。若し吾輩が君の所に來なかつたならば、相變らず愚物で、永く大道の人に笑はれたであらう。」

若し井中の蛙に大海の話が出来ないといふのは、その狭い居所に拘はつて居るからであり、夏の蟲に氷の話が出来ないといふのは、唯々一時を信することの篤いが爲であると同一譯で、曲見の士に大道を語ることに出来ないのは、各々其教條に束縛されて居るからである。今汝は河岸を出で、大海の渺茫たるを觀て、自ら愧づることを知つたから、やつと大道を語り聞かすに足るものとなつた。抑々天下の水は海より大なるものはない。萬川之に注いで何時止むといふことを知らないけれども、水が一杯に盈つこともなく、尾閭（海水を泄らす處）から絶えず泄れて何時止むといふこともないけれども、海は決して虚しくならず、春は雨少く、秋は雨多けれども、水量に變化なく、洪水にも旱魃にも一向頓着はない。莫大なることは到底江河の比でなく、殆んど數量を以て現はすことは出来ぬ。けれども予は未だこれで満足しないのは、自ら考へる所があるからである。即ち予は形を天地に比して其間に列し、

氣を陰陽に受けて生存して居るのであるが、予の天地の間に在ることは、天地の大に較ぶれば小石小木が大山に在ると同じで、誠に微々たるものに過ぎぬ。故に予は常に己が小にのみ目を著けて反省して居るのである。それに何うして自ら多とすることが出来よう。

四海が天地の間に在るさまを計つて見ると、丁度蟻の穴が大澤に在ると似て居り、又中國が世間の中に在るさまを計つて見ると、宛も一粒の稗が大倉に在るに似て居るではないか。今、物の總數を假りに萬と名ける。而して人間も勿論萬物中の一物である。九州全土に於いて、民衆の聚まる所、穀食の生ずる所、舟車の通ずる所、各人は其間に在つて一體たるに過ぎぬ。人を以て萬物に比すれば、一筋の毛が馬の體に在ると同じではないか。かの五帝が相連承し、三王が軍を起して相争ひ、志士仁人が社稷を憂へ、國事を以て任ずるの士が職務に勞役するも畢竟馬體の毫末に過ぎぬ。而も伯夷は諸侯たることを辭して名を成し、孔子は六經を談じて博識と爲すも、其の自ら多とするさまは、先刻汝が河水の漫々たるを以て自ら多としたと同じではないか。」

河「然らば、大小を分別して、天地を大とし、毫末を小とせば可いであらうか。」

若「それは不可ん。元來、物の量は千態萬様窮りなく、時は無始以來止むことなく、得喪の分は始めより定まることなく、物の終始は絶えず繰り返し、常に新にして故いといふことはない。大知の人は遠きを視近きを察するが故に、毫末の微も寡しとせず、天地の大も多しとしない。それは物量の窮りないことを知つて居るからである。又古今を考明して一と爲すが故に壽命が長くても生を苦とし悶えず、短くても長命を羨み企てず、唯々變に隨ひ化に任すのみである。これは時の止むことなきを知つてゐるからである。又次に盈虚得失の變を察するが故に得れども喜ばず、失へども憂ふことはない。これは得喪の分に常なきを知つて居るからである。又更に、死生一如の坦々たる大道を明かにせるが故に、生きるも喜ばず、死ぬるも禍としない。これは終始は一定したものでなく、常に循環相因つて窮り無いことを知つて居るからである。凡そ人間の知を以て不知に比較すれば不知の方が遙かに多く、知は限りあれども天地は廣大無邊、到底人知のよく盡す所でない。人生僅に百年、これを以て未生の時間に比較すればほんの一瞬時に過ぎぬ。然るに其至小有限の知を以て至大無窮の境域を盡さうなどと思ふからして、終身迷惑して自得することが出来ないのだ。是に由つて觀れば、毫末も至

細の極と定めることは出來ず、又天地も至大の極と斷ずることは出來ず、大小共に無限に進み得る筈であらう。」

河「世間の議論家は皆至精なるものは形質なく、至大なるものは圍繞することが出來ぬと言つて居るが、眞實だらうか。」

若「かの細小な處から廣大な處を視る者は、その宏遠を視盡すことが出來ぬから、圍み得ないと思ひ、又廣大な處から細小な處を視る者は、判然と分明せぬ爲に、形なしと思ふのである。夫れ精は小の微、細の細なるもの、埒即ち外域は大の殷、大の大なるものである。此の如く大小各々事情を殊にして居るので、それは自然の勢として本來物に具はつて居る屬性である。一體、精といひ、粗といふは、形あるものに制限されて居るのであるが、已に形のないものに就いては數理を以て分析することは出來ぬ。又圍むべからざるものに對しては數理を以て推し窮めることは不可能である。言語に依つて論斷し得るものは事物の粗なる所、意思に依つて察究し得るものは事物の精なる所である。けれども、言語の論ずること能はず、意思の究むること能はざる者は即ち妙理であつて、たゞ精粗といふ範圍内に制限すべきものでなく、遙

に之を超越したものである。されば大人は人を害するやうな行動に出ないことは言ふ迄もないが、仁恩を施しても自ら誇ることもしない。又利益の爲に働くやうなことはないが、門番奴僕の如き利に趨る者をも賤しまない。分に安んじ、足ることを知つて、貨財を争はないが徒に辭讓する人をも多としない。人の力に頼つて事業を營むことはないが、自力で生活することも多とせず、且つ貪汚の行ある者をも賤しまない。其行は世俗に異なれども、一風變つた所を自ら誇るやうなことはなく、又すべて公衆の爲す所に従ふといふ考で居るが、一方にお上手する人を賤しむこともしない。此の如き人に對しては、世俗の爵祿などで事を爲すべく勤めることも出來ず、黷恥などで辱める譯にもゆかない。此等は大人の心を累はすに足らぬ何となれば、大人は世俗の是非も細大もすべて相對的の名目に過ぎずして、本當に分別決定し得るものでないといふことを悟つて居るからである。古語に「得道の士は名聞を世に求めないから、従つて評判が立たぬ。至徳の人は固より失ふ所がないから、更に得ることもない。大人は彼我の相對を超越して無我の境に立つが故に、己れといふものはない」とあるが、是れ即ち自己分内に止まりて自ら大にせず、不聞、不得、無己にして能く至極の域に立つものである。

ある。」

河「物の外形若しくは内容の何れの點に標準を置いて、貴賤大小を分別すべきであるか。」
若「絶對の道に立脚して觀れば、物に貴賤の別はないが、相對的の物を本位として考ふれば、おのづから差別があつて、唯々自己のみを貴しとしてお互に他を賤しむことになる。世俗の立場から觀れば、相對的に貴賤を別つが故に、貴賤は定まつて己が固有するものではない。差等的の見解よりすれば、自ら足れる點に於いては、毫末も丘山も等しく大であつて萬物皆大ならざるなく、餘りなき點に於いては、天地も稗米も等しく小であつて、萬物皆小ならざるはない。功用の上から觀れば、其功ある點に基いていへば萬物すべて功あらざるなく、其功なき點に基いていへば萬物すべて功あるものでない。東と西とは相反した方角であるが、雙方相須つて何れも無ければならぬことを知れば、功用の分限は定まるのである。趣向志操より論ずれば、其是とする所に因つて是とせば萬物悉く是ならざるなく、其非とする所に因つて非とせば萬物悉く非ならざるはない。例へば堯と桀とが全く正反對の趣操を持して各々自ら是として、互に他を非とする所を觀れば、人々獨自の心の向け方がわかるのである。

昔、堯は讓り舜は受けて帝となり、燕王の之噲は宰相の子之に讓つて國祚斷絶し、殷の湯王、周の武王は、桀、紂と争つて遂に王となり、楚の白公勝は反旗を翻し、葉公と争つて滅ぼされた。斯ういふ事實に由つて觀れば、讓るといふは美しいものであるが、堯舜に於いては貴く、之噲に於いては賤しい。争ふといふは見苦しいことであるが、白公に在つては賤しく、湯武に在つては貴い。貴賤美惡も時と場合で、元より常なきものである。かの梁麗といふ兵車は城を衝き壞すことは出来るが、鼠の穴を窺ぐことは出来ないのは、器具の用途が夫々異ふからである。騏驎驪驪などいふ駿馬は一日に千里を走るけれども、鼠を執る能力は猫や馳いたちにはかなはぬといふのは、各々技能を殊にするからである。鴟鵂くわくわくは夜蚤のみを撮み取り、毫末をも能く見わけることが出来るが、晝外に出ては、いくら目を見張つても丘山さへも見えないのは自然の性質に殊別があるからである。古語に「是を師法とすれば非なく、治を師法とすれば亂もなからう」と言つてあるが、これは未だ天地の眞理、萬物の本質を明かにしない愚言であつて、宛も天を師法とすれば地なく、陰を師法とすれば陽なしといふと同じく、偏見であるから、其の實際に行ふべからざることには明白である。然るに猶ほ此の如きことを語つて止めな

いのは愚物であるか、然らずんば人を誣いつふるものである。抑々五帝三皇の禪讓及び夏殷周三代の繼承は、夫々其事情を殊にして、一定の方法に依つて行はれた譯でない。而して其時勢風俗に逆行した者は篡夫と呼んで賤しみ、順應した者は義の徒と稱して貴ぶだけのことで、本來確固不易の標準がある筈のものでなく、たゞ運に過ぎない。されば河伯よ、汝黙々として言はぬがよからう。貴賤の由つて出づる所、小大の存する所を窺つて其別を明かにすることは汝の能くするところではあるまい。そんなことは寧ろ無用の穿鑿だ。」

河「然らば所詮何を爲し、何を爲さずに居たらよいか。取捨進退等凡ての作法に於いて如何致すべきものか。」

若「絶對の大道より觀れば、貴もなく、賤もなければ、従つて何れを貴び、何れを賤しむべくもない。所謂平等一如に歸するものである。汝、貴賤の別を以て心を拘束することなかれ。若し然らずんば大道に戻るであらう。又、大道より觀れば、何れを少とし、何れを多とすることが出来る。故に大道に立つて恩施を謝絶するときは多もなく少もないので、これを謝施と謂ふのである。汝、行狀の上に於いて一偏に固執することなかれ。若し然らずんば大道と

相背馳するであらう。道を以て主となせば、嚴然として、一國に君主あるが如く、私徳を施すことなく、神々しくして、祭祀に社神あるが如く、私福を與ふることなく、廣々として、四方の無窮なるが如く、限極する所がない。かく萬物を兼ね容れて、その孰れか一を承受し、翼賛するといふやうな私愛を施さぬ。これを何等の制限も加へられざる無方の徳といふ。無方なれば萬物は従つて一齊であつて、其間に長短のあるべき筈がない。道は元來終始のないものであるが、物には死生といふことがある。成あれば一方に虧あるが故に、其成を恃んで常とするとは出来ぬ。一虚一滿、其形體を以て己が定位とせず、化に隨つて推し移つて行くのである。凡そ年時は絶えず流れ去つて、自由に引留めることの出来ぬものであつて、消息盈虚、終れば復た始まり、循環して止まぬ。これ即ち大道の方を語り、萬有生滅の理を論ずる所以である。抑々萬有は天地の間に在つて、馳するが如く、動くとして變ぜざるはなく、時として移らざるはない。汝斯かる流轉大化の中に在つて果して何を爲し、何を爲さずといふことが出来ようぞ。固より其自然の化に任すの外はあるまじ。』

河「己に自然の化に順へば、特に道を貴ぶには及ばないと思ふが如何。」

若「道を知る者は必ず事物の理に通達する。物理に達する者は臨機應變の宜しきに處すること即ち權道に明かである。權道に明かなる者は外的事物の爲に其身を傷ふことはない。されば至徳の人は、火も熱すこと能はず、水も溺らすこと能はず、寒暑も害すること能はず、禽獸も賊ふこと能はず、何ものも犯すことは出来ない。そは至徳の人がわざと水火などに薄うすり近づいて、而も物の害を受けないといふのではなくて、事の未然に先つて十分に其安危を察し禍福已に至れば能く其分に寧んじ、去就を謹みて其宜しきを得るが故に、何ものにも害せられないといふのである。古語に「自然は内的に發現し、人爲は外的に存在し、徳は自然から得るものである」と言つてある。自然と人爲との行を明知し、能く根本を自然に採つて、自ら享くる所に寧んじ進退屈伸各々道の至要に反りて理の至極を語り、以て大道に安立するのである。」

河「それでは、その自然といひ、人爲といふは何んなことか。」

若「牛馬は夫々四本の足がある。天性のまゝ、これを自然と謂ひ、馬の首を絡かひ、牛の鼻を穿つやうなことを人爲と謂ふのだ。古語に「人爲によつて、自然を滅ぼすことなかれ。故智を以て

自然の命を滅ぼすことなかれ。名譽のために自然の徳を犠牲にすることなかれ」とある。汝よく謹んで此義を守つて失はないやうにせよ。これ謂はゆる其天眞に反ることである。」

夔といふ一足獸は蛇の多足を羨み、蛇は蛇の無足を羨み、蛇は自由に飛ぶ風を羨み、風は動かないで遠方を見る目を羨み、目は形なくして神妙な作用をなす心を羨んで居た。或る時彼等は互に語り合ふのであつた。

先づ夔と蛇との話。

夔「蛇よ。自分は一足で跛をひいて行くがとても君に及ばない。一體君は何うして澤山の足を自由に使ひこなすか。」

蛇「いや、自分は自分の考で自由に使ひこなすのではない。君はあの唾を吐くものを見たらうが、その時大なるものは珠の如く、小なるものは霧の如く、雜つて下るものは無數である。これは企て、出来ることなくしてひとりでに色々の形を現はすのであるが、今自分が足を使ふのも、自然の機能を無意識的に運轉するのであつて、何も理窟はないよ。」

蛇は斯う答へて、次に蛇に向つて問うた。

蛇「自分は澤山の足を動かして行くが、君の無足に及ばない。何故だらう。」

蛇「一體、自然の機能には、夫々固有の運動法があつて、其點は勝手に變へることが出来ない以上、自分は何うして足を用ひ得よう。唯々自然のまゝに動くだけのことだ。」

次に蛇は風に向つていつた。

蛇「自分は足がないので肋骨を動かして歩行するがやはり形はある。所が君は唯々蓬々然と聲を立て、北海から南海の方へ吹いて行くけれども一向形が見えないやうだが何ういふ譯か。」

風「然うだ、君の言ふ通りだ。然し吹いてゆく際に何かゞ手で自分を指しても、自分が負け、足で自分を踏んでも自分が負けるので、平素自分は他物の手も足も折ることは出来ぬ。けれどもまさかの場合に大木を折り、大屋を吹飛ばすやうなことは自分の力でなければ出来ま

501

斯様に風といふものは多くの小事には勝たないが、それで以て非常の際には却つて大勝を制し得るものである。さて、人に在つて大に勝つことを爲すのは、唯々眞の聖人だけが能くし得る所である。

孔子が衛から陳にゆく途中、匡といふ地を過ぎたとき、宋人が兵を以て幾重にも之を取り圍んで迫害を加へようとしたことがある。所が孔子は平氣で弦歌して輟めなかつた。門人の子路が孔子の前に行つて問うた。

子「斯かる危窮の際に弦歌して楽しめるのは何故ですか。」

孔「もつと進め。一つお前に話さう。自分がこれ迄困窮を厭ふことは已に久しい間である。然しそれを免れ得ないのは天命で致し方がない。又榮達を希求することも已に久しい間であるが、之も得られないのは時節で是非もない。昔、堯舜の時代に當つて天下に窮した人が無かつたのは、天下の人が皆々賢かつた爲ではなくて、時勢の然らしめた所である。之に反して桀紂の時代には、天下に満足な生活をした者が無かつたといふのは、天下の人が悉く馬鹿であつた譯ではなくて、やはり時勢に因るのである。されば今窮達の爲に心を勞するのはつまらぬことだ。思ふに、水行して蛟龍をも避けないのは漁夫の勇であり、陸行して兕虎をも避けないのは獵夫の勇であり、白刃目前に交るも懼れず、死を視ること猶ほ生けるがごときは烈士の勇であり、窮達ともに時命に因ることを悟り、大難に臨んで泰然自若たるは聖人の

勇である。汝よ。安んじて處れ。自分の事は凡て天命の制するまゝに任すべきで、人力の左右し得る所でない。」

問もなく、甲兵を率ゐた大將が孔子の前に進み出て、孔子をあゝの陽虎と見違へた爲に取り圍んだが、今始めてそれは誤りであつたことが判つたといふ次第を述べ、お詫をして辭し去つた。

公孫龍と魏牟とは或る時次のやうな問答をした。

公「自分は少くして先王の道を學び、長じて仁義の行を明かにし、且つ巧に論理を應用して同異を合して一様のものとし、堅白の概念を分析し、又詭辯を恣にして、然らざるを然りとし可ならざるを可とし、縦横に論じて現代思想家の頭を困しめ、舌を捲かせて、自ら最早至妙の域に達したと思つて得意になつてゐるが、一たび莊子の言を聞くに及んで、まるで呆氣に取られて、唯々彼は變つたことをいふと思ふのみである。こは一體自分の論が彼に及ばないのか、但しは知が彼に劣つて居るのか。今自分は口をあく餘地がない。何うしたものであらう。」

魏牟は此言葉を聞くや、机に倚つて大息し、天を仰いで笑つて言うた。

魏「君はあの廢れ井戸の蛙のことを未だ聞かないか。その蛙がかつて東海の鼈つづみに向つて言ふには「僕は誠に楽しく暮してゐる。出で、は井幹いげんの上に跳梁し、入つては壞れたたふがわら甃たふがわらの崖がらに憩ひ、水に飛び込めば兩腋わきを水に接して頤こゝろを水面にもたせ、泥を踏むときは、僅に足を没し、足の附かたを隠すのみである。所でかのほら蚪たふがわらや、蟹かにや、科斗かたまたまじやくしをふりかへつて見ると、僕にかなふものはない。まあ考へて見れば、一壑の水を我が自由にして廢井の中に跨時する樂みは、亦至極である。君も一つ來て見ては何うだ」と。東海の鼈が來て見た所が、體は大きく、井戸は狭いので、左足が未だ入らない中に、右膝は已につひ間へて動くことも出來ず、逡巡して退き、蛙に向つて大海の話をして言ふやう、「千里の遠きも到底海の大を語るに足らず、千仞の高さも到底海の深を極むるに足らぬ。夏の禹王の時、十年の間に九年まで洪水に遇つたが水はその爲に増すことなく、又殷の湯王の時、八年の中に七年まで大旱に遇つたが水涯はその爲に減することはなかつた。斯く時間の長短によつて推移せず、水量の多少によつて進退せず、古今不易なところは、東海の樂事である」と。これを聞いて蛙は大に驚き入つて、氣を失つたといふことである。君のこれ迄の心持はこの蛙と異ならない。今、君は是非の境界を判然と見定める

智慧すら無いくせに、莊子の言を觀察しようと思ふのは、譬へば蚊に山を負はせ、商しやう蛇じやに河を馳せしめると一般で、任に勝へないことは明白である。且つ其知は彼の極妙の言を論ずることを知らずして、人に勝つて一時の名利を喜んで居るやうな者は、廢井の蛙でなくて何であらう。所が一方莊子の知は、下は深く黄泉を踏み、上は高く大空に登つて、南もなく、北もなく、あらゆる制限を超越し、釋然通徹して、深遠測るべからざるものである。又、東もなく、西もなく、あらゆる見聞を超越し、玄冥不可思議の所に始まつて、大通自在の境に歸してゐる。然うであるのに君は規々こせき工夫して、莊子の道を索求するに小知小辯を以てして居る。謂はゞ管の穴から天を開き、錐きりでもつて地球の深さを測ると同じで、如何にもつまらぬものではないか。君、さつさと出て往け。更に附け加へて言ふが、君はかの燕の壽陵といふ所の少年が、趙の都の邯鄲に行つて、歩き方を習つたといふ話を知らぬか。その少年は邯鄲に往つて未だその歩行上の技能をも十分會得しない中に、自國本來の歩き方まで忘れて了つたので、致し方なく匍匐はらばひしてやつと歸つたといふことである。今、君も速に去らずんば、君本來の性能を忘れ、學業を失つて、虻蜂あはち取らずの人間になつて了ふであらう。」

公孫龍はこれ聞いて驚きの餘り、口あんぐりとして塞がれず、舌はつりあがつて物言へず挨拶もしないで匆々逃げ出して了つた。

「莊子が濮水に釣をして居つた時に、楚の威王が大夫二人をして往きて先づ己が意志を告げしめた。

大「國政を貴方に委託したいから、御迷惑ながら引受けて貰ひたい。」

莊子は竿を持つたまゝ、顧みもしないで言つた。

莊「聞けば、楚の國には靈龜があるが、最う死んでから三千年を経て居るさうだ。然るに楚王はこの龜を筈に入れ、巾で覆うて大切に廟堂の上に藏めて居るといふことだ。一體、龜自身はいつそ死んで、その骨を残して、珍重されんことを希ふであらうか。それとも害を免れ、生きながらへて、尾を泥中に曳きすつてゐることを希ふであらうか。」

大「寧ろ生きながらへて尾を泥中に曳きすつてゐる方を希ふであらう。」

莊「然らば、お前達速に去れ。吾輩も亦尾を泥中に曳すつて居たいのだ。」

「惠子が梁の宰相であつた時、莊子は往つて之に面會した。これに就いて、或人が惠子に向つ

て「莊子がやつて來るのは、恐らく貴方に代つて宰相に爲らうといふ下心であらう」と譏したので、惠子は大變恐れて、都の中を三日三夜も搜し廻つたのであつた。所で莊子は面會するや、彼に向つて痛くやり込めた。

莊「南方に一種の鳥が居て鵲鶴と稱する。君は知つてるか知らんが、此鳥は南海を出發して北海に向つて飛ぶのであるが、其間、梧桐の木でなければ止まらず、竹の實でなければ食はず醴泉の甘い水でなければ飲まない。たま／＼一羽の鵲が腐つた鼠を得て餌にしようとした處を、鵲鶴がその上を通つた爲に、鳴は其餌を奪はれはせぬかと氣遣つて、仰いで鵲鶴を睨むやうに視て「嚇！」と言つた。今君も梁の相位を奪はれはしないかと氣を揉んで、吾輩を嚇さんとするのか。失敬ながら、相位も吾輩に取つては腐鼠同様だ。」

更に莊子がかつて惠子と濠水の橋上に遊んだ時、二人は魚の樂みに就いて討論した。

莊「儻魚が水面に出て遊んで居るさまは如何にも從容自在で、これが魚の樂みである。」

惠「君は魚でもないのに、何うして魚の樂みがわかるか。」

莊「君は吾輩ではない。何に據つて君は吾輩が魚の樂みを知らないといふことがわかるか。」

惠「成る程自分は君ではないから、君の心底がわからぬのは勿論である。人間同士ですらそれであるのに、全然異類たる魚の樂みが知れよう筈がないぢやないか。そりや解りきつた話だ。」

莊「そんな水掛論をして居てもきりが無いから、更に根本に立歸つて話さうぢやないか。抑々君が初め吾輩に向つて、「君に魚の樂みがどうしてわからう」と言つたのは、已に吾輩が魚の樂みを知るといふ推斷の可能を認めた上で、如何にして知つたかといふ譯を尋ねたのであらう。而して吾輩が知つたといふのは他でもない。唯々我れ自ら濠上に在つて逍遙として樂しむが故に、濠下に悠々と泳ぐ魚も、やはり樂しんでゐると推斷したので、固より魚とは世界が異ふけれども、善く物情に通ずれば、一體同觀、すべてを洞察して常にその眞實を得るのである。」

外篇十八 至 樂

この篇は至樂活身の術を説き、死生變化を超越して四時晝夜と觀じ、すべて自然に順つて私意を交へずして、然る後ひとり長く樂み永く存するといふ旨を論じてゐる。

天下に至極の樂みといふものゝ有無果して如何。又、眞に身を活かす道の有無果して如何。今、至樂にして身を活かすべき道ありとせば、之を行はんとするには、何を爲し、何に據り、何を避け、何に處り、何に就き、何を去り、何を樂み、何を惡むべきか。思ふに天下のび尊重んずる所のものは、富貴と、長壽と、令名とであり、歡び樂む所のものは、安逸と、厚味と、美服と、好色と、好き音聲とである。之に反して下し賤しむ所のものは、貧賤と、天死と、惡名とであり、厭ひ苦む所のものは、身の安逸を得ざると、體の美服を得ざると、目の好色を得ざると、耳の好き音聲を得ざるとである。これ皆至樂活身の道でないのに、若し此等のものを得ないと大に憂懼するのが常で、斯く唯々吾身の欲に追はれて辛勞し、得て益なく、得ずして損なきも

の、爲に悶えるのは、誠に愚かなことだ。

それは富者は身を苦しめてせつせと働き、多く財寶を蓄積するけれども、盡く用ふることは出来ぬ。これは其身の爲に足ることを知らずして外に馳せるものである。又、貴者は夜を日に繼いで國事の爲に善否を思慮して、さらに休息する時はない。これは其身を疏んずるものである。人間の生存する間は、常に憂を懷いて生を樂しむことを知らぬ。斯くて壽者は惜々として憂へつゝ、而も死ぬことだけはせず長らへてゐるが、如何にも苦しさうである。これ亦其身を疎遠に附するものである。

烈士は身を忘れて節義に殉ずるが故に、名聲古今に傳はつて天下に善とせられるけれども、害に遭うて其身を活かすことも出来ない。して見ると普通に所謂善なるものは、本當に善であるか、不善であるか、一寸分らなくなる。若し善と定めんか、一方其身を活かすに足らず不善と定めんか、一方人を活かすに足るので、何れにしても兩者は矛盾を免れない。されば古語にも「其君を忠諫して聽かれなければ、仕方がないから順從して強ひて争ふな。これが身を活かすの術だ」というてある通りで、一例を示せば、かの伍子胥は其君夫差を諫めた爲に、刑戮に

遭つて其身を終つたのである。然し、彼にして若し強ひて諫めなかつたならば名譽も得られなかつたであらう。こゝの具合が誠にむつかしいので、本當に善ありや、將たなきや、未だ驟にきめ込んで了ふ譯はゆかぬ。

今日世俗の爲す所と樂しむ所とは、果して本當に樂しいものであるか樂しくないものか、何れも分り兼ねる。熟々彼等の樂しむ所を觀るに、世を擧げて残らず其樂しとする富貴利欲聲色等に趣きて死をも避けず、實に止むを得ざるが如き勢である。而して誰も之を樂しいと言つて居るが、予に取つては左程樂しくもない。それかと言つてまんざら樂しくないともしない。然らば果して本當の樂があるか、將たないかといふことになるが、予は無爲を以て眞に樂しむべき境地と考へる。所が世俗は反つて之を大苦として、至樂であることを知らない。古語にも「至樂は樂無きを以て樂となし、至譽は譽無きを以て譽となす」とあるが、固より俗物には解るまい要するに世俗の樂は眞の樂ではなく、烈士の譽も亦眞の譽ではない。

斯様な譯であるから、天下の是非といふものも一寸定め難いものであるが、無爲であれば凡てのものは各々性命自然の情を得、是非兩つながら行はれて悖らないからして、始めて之を定め

ることが出来る。至樂は身を活かすものであるが、これは亦無爲に依つて始めて得られるというて可い。更に試に言うて見れば、天は無爲にして清く、地は無爲にして寧いのである。此兩つの無爲が相合して、萬物は皆化生するのであるが、その様は芒乎として由つて出づる所なきが如く、勿乎として形象も認められないやうである。然も萬物は繁多にして皆無爲の中に於いて蕃殖してゆく。されば古語にも「天地は無爲であつて、而も爲さざる所はない」と言つてあるが、俗人どもは到底この無爲の妙を領得することは出来まい。苟くも一たびこゝに悟入するならば至樂活身の道は従つて得られるのである。

莊子の妻が死んだとき、惠子が弔問した所が、莊子は折しも足を伸ばし、缶ぼんを叩いて、暢氣さうに歌つてゐたので、惠子は怪しんで問うた。

惠「君はこれ迄妻君と一緒に暮し、子女を養ひ、偕ともに老いて情愛も深い筈である。今や妻君の最期に臨んで哀哭しないだけでもひどいのに、剩さへ缶を叩いて歌ふとは、まああんまりぢやないか。」

莊「いやさうではない。妻が今しも息を引き取るといふ臨終際には、幾ら吾輩でも慨然として驚嘆しない譯にはゆかなかつた。随分悲しんだ。然しつくゞ其始原を考へて見ると、本來生といふものは無いのだ。たゞ生がないばかりでなく、本來形といふものもなく、氣といふものもないのだ。而して唯々大道混沌の中に在つて、自然の勢に依つて變じて陰陽の二氣となり更に變じて形となり、形已に成つて、茲に始めて生といふものが出来たのだ。所で今又生から死に復つたので、譬へば春夏秋冬の四時が來ては去り、去りては復た來るといふやうに、無限に循環すると異ならない。吾が妻は今正に天地といふ巨室に安息してゐる。それに若し聲を立て、慟哭するに於いては、如何にも天命に通達しないことゝ心得たから止めた次第である。」

支離叔と滑介叔とは、ともに冥伯の丘、崑崙の墟、即ち黃帝が死んで休息した所に遊んだが俄に滑介叔の左臂に瘤が出来て、心中深く之を厭ひ惡む様子であつた。そこで支離叔がその事を探ねると、滑介叔は之を否定していつた。

滑「予は決して厭ひ惡む譯でない。人間の生は天地和合の氣を假りて成り立つたもので、要するに借物である。瘤は又之を假りて寄生するもので、謂はゞ塵垢の集合に過ぎない。死生は

晝夜の如きものである。且つ予と君と天地の化を觀て、予が身亦化の中に在るから、すべてを化に任せておくは固より當然であつて、予は何も厭ひ惡むことはしない。」
莊子が楚に往く途中で空になつた觸髅しやうりかろを見たが、一向澤氣つやけもなく骨格だけある。莊子は馬捶まづで之を打ちながら訊いた。

莊「お前は欲望を貪り、性理を失つて、斯かる成れの果てとなつたのか。或は戦争でもあつて其際斧鉞の誅を加へられたのか。或は不善を行つて父母妻子の醜辱を遺さんことを愧ぢて斯うなつたのか。或は荒凶凍餓の爲に斃れたのか。或は壽命が盡きたのか。」
言ひ卒つて莊子は觸髅を引寄せて、之を枕にして臥たが、夜中になつて觸髅は夢に現はれて莊子に向つて告げた。

觸「汝の談する所は、すべて辯士諸子に似て居るが、そは皆人生の累患であつて、死の世界には最う然ういふうるさいことはないのだ。汝は死の説が聞きたいのか。」

莊「聞きたさ。」

觸「死の世界には君臣上下といふ階級もなく、春秋四時の事もなく、從容として天地を以て春

秋として居る、楽しいことゝいつたら一天萬乗の君と雖も決してそれ以上ではない。」
莊子は之を信じないでさふ。

莊「予は人間壽命の司配者たる、司命の鬼をしてお前の形骸を再生せしめ、骨肉肌膚を爲り、お前の父母妻子及び郷里の知人の許へ反してやらうと思ふが、お前は希望するか。」

觸髅はいたく眉を擧めて、愁はしげにいつた。

觸「いや、どうして南面の王者にひとしい此樂みを棄て、再び人間界の苦勞をしよう。眞平御免だ。」

顔淵が東の方齊に往かうとする時、孔子は心配さうな顔をして居た。弟子の子貢は席を下つて問うた。

子「顔回が齊に往くに就いて、心配さうな御様子が見えるのは何うしたことですか。」

孔「汝、よく問うて呉れた。昔、管仲の言つたことで、甚だ面白いと思つてゐる言葉がある。

即ち布の袋の小さいものは大物を入れることが出來ず、又、釣瓶の繩の短いものは深井に汲むことは出來ぬといふのである。斯う考へるのは、抑々人は、天命は定まる所があり、形體は適

する所があり、何もかも一定の分があつて増減すべからざるものである。それで今心配するのは、顔回が齊君と堯舜黃帝の道を論じ、之に加ふるに、燧人氏、神農氏などの言を以てするならば、齊君は自ら内省しても解らぬから、やがて疑惑の念を生じ、顔回の己に勝るを怒つて、必ず之を殺すやうなことになるはしないかといふことである。且つ汝も聞いてゐるであらうが、昔、海鳥が來て魯の東郊に止つたことがある。その時、魯君は之を瑞兆として、迎へて太廟の中に酒宴を開き、舜の九韶の樂を奏し、牛羊豕を料理した所謂太牢の膳を具へた。所が鳥は目くらみ心悲しみ、敢て一片の肉をも食はず、又敢て一杯の酒をも飲まず、三日たつて死んで了つた。そは取りも直さず、人を養ふものを以て鳥を養ひ、鳥を養ふものを以てしなかつたからである。鳥の養を以て鳥を養ふには、之を深林に棲ませ、沙洲に遊ばせ江湖に浮べ、鱸や白魚の子でも食はせ、鳥どもの行列に隨つて飛んだり、止つたりして自由にさせておくべきである。鳥は唯々人言を聞くことすら嫌ふのに、況して喧しい音樂などは言ふ迄もない。されば堯の咸池、舜の九韶などいふ樂を洞庭の野でやれば、鳥は驚いて飛び、獸は逃げ、魚は深みへ沈んで了ふが、たゞ人間だけは之を聞いて相共にその周圍に集るもので

ある。魚は本來水に居て生存し、人は水に據れば必ず死ぬるが、その根本的に異ふ所が天性の自然で、其好惡も從つて異ふ譯である。されば古の聖人はその能を劃一にせず、從つて其事業も各々異にして、實の有る所に隨つて名を得、事の適する所に於いて義となすので、是をば條理通達して人惑はず、自ら福德を保持して、身は安泰を得ると謂ふのである。」
列子は旅行の途中で、蓬の生ひ茂つて居る中に、古い髑髏を見つけ、傍の蓬を抜いて之を指して言つた。

列「死は眞の死でなく、生は眞の生でなく、皆自然の一面の相に過ぎないといふ道理を知るの
は唯々予と汝とのみである。汝は今死して冥々の中に在るが、冥々果して養ふ所あるか。予
は生きて人間の中に在るが、人間果して歡ぶべきか。生死一理、歡養畢竟するに定分は無
抑々一切萬有の生滅變化は實に限りないものである。塵垢が水面に浮遊すれば、未だ苔に變
じない前のけいといふ微物となり、岸邊に近づいて漸く厚くなると蝦蟇の衣といふ一種の青
苔となり、青苔が更に土に近づいて陵阜に生ずれば、化して車前草おほはことなり、これが肥料を得
れば烏足といふ草になり、烏足の根は蟻螯といふ蟲になり、烏足の葉は胡蝶となる。胡蝶は

別名を胥といふ。胥は變じて蟲となつて竈下に生ずる。其狀は新に皮を脱したやうで其名を
鷓擾くわつといふ。こは千日を経て鳥となり、乾餘骨と名ける。その沫は色々の蟲に變ずる。即ち
先づ斯彌となり、斯彌は食醜けいとなり、頤輅いろうとなる。更に黃輓きやうは九猷より生じ、晉丙ほんせいは瑩から
生ずる。羊奚といふ草は久しく笋たけのこを生ぜざる竹と比合して青寧といふ蟲を生み、青寧は豹を
生み、豹は馬を生み、馬は人を生むのである。斯く萬物の變化窮りなく、而して人は又死ん
で道の機即ち無に歸入する。總じて一切萬有はひとしく無から出て無に反るものである。」

外篇十九 達 生

この篇は人をして性命自然の眞に達して、前篇の至樂活身の術を得しめんとするの
である。中にも藏神守氣の論の如きは精妙を盡して至人の域を描く。我等も修習し
て其旨に達すれば至人に成り得るといふのである。

性命自然の眞に達する者は、生の及びなき所を務めないから、従つて形體を勞することなく
又知の及びなき所を務めないから、従つて精神を虧くことがない。一體、形を養ふに主に物を
以てするは世俗の考であるが、物餘あつて形養はざる者も随分多い。例へば富貴にして天折
し、病に臥して呻吟するが如きものである。又生あれば必ず第一に其形を全うするは世俗の見
で、形だけは幸に全くとも、生の盡きる者が相當にある。例へば行死走肉、身存して實は死す
るが如きものである。されば自然に生れ来て防ぐことが出来ず、忽焉として死んで復た止める
ことが出来ず、これ固より奈何ともすべからざるもので誠に悲むべきである。俗人は老いても
形を養へば十分生を保つことが出来ると思つてゐるが、さうは行かぬから、これもつまらぬ。

然しつまらなくても衣食俯仰等は人並に爲ねばならぬのは、止むを得ないが爲で、若し形の爲にすることを免れようと思ふならば世を棄てるより外はない。若し世を棄つれば、私なく欲なく従つて累もなく、累なければ心廣く體胖ゆたかにして正平である。正平なれば自然とともに更生し、更生すれば道に近い。然し事は何故棄ててもよいか、生は何故忘れてもよいか。そは他ではない、現に事を棄つれば形勞せず、生を忘れなば精虧けず、形已に全く、精已に復すれば茲に天と同體となる。天地は萬物の父母である。陰陽の二氣、相和すれば體質を成し、散すれば未生の始めに復る。唯々形と精と全き者のみ、能く無窮に變移する者と謂へる。而して精の極に至れば反つて此方から天を相けて、以て天地の化育を賛するやうになるのである。

列子が嘗て關尹に問うたことがある。

列「至人は潛行して金石に入りても障なく、火を踏んでも熱からず、萬物の上に行きても懼れることがないといふが、何うしてさうなつたのですか。」

關「それは純一の神氣を守つて居るからである。區々たる知巧果敢などの術を弄して、人に勝たんとするが如き類ではない。いざ、これから汝に話さう。凡そ貌象聲色あるものは皆物であ

る。物は形あるが爲に障りがある。物々相近く、何れも無物の先に至るに足らぬ。そは形迹に拘はるからである。しかし同じ物の中に於いても、人はよく無形の先に至つて無化に止まり即ち大道に一致し、其至極に至れば物之を止むるを得ない。此人は將に自然に受けた所の性分に止まり、無始の大道の綱紀に據り、萬物の終始する所の自然に遊しなび性に牽ひひ氣を養ひ、徳を散ぜずして大道の本に通ぜんとするのである。かくの如き者は自然の道を守ること全くして、その神おのづから隙なく、外物に侵されるやうなことはない。

かの醉漢は車から落ちて怪我をしても死ぬことはない。その骨節、人と同じくして、害を犯すこと人と異なるのは、その神全きが爲であつて、乗つたことも知らず、落ちたことも知らず、死生驚懼皆胸中に入らざるが故に、物に忤つて觸れても、平氣なものである。醉漢が酒の爲に全きを得てすら、此の如くであるから、況して無心自然の道を得たるに於いては言ふ迄もない。聖人は天から得た性命の内に止まつて其外に出ないから、其神全きを得、物も之を傷ふことが出来ないのである。

讐を復せんとする人は、鋭い干將、鏌鋌の名劍を怒つて折らうとすることもなく、又いか

に害心あるも者も、風などによつて吹き落された瓦を怨むことはない。この二物は何れも無心の物であるからである。人も道に循つて無心なれば、天下は平均して攻戦殺戮の患はない。されば人の知欲を開かないで虚無の心を開くやうにすべきである。而して虚無の心を開く者は徳生じ、知欲を開く者は賊心が起る。故に天理を棄てず、又爲さねばならぬ人事の務めも忽にせず、一に自然に循へば、人は皆どうやら、その真に反ることが出来よう。」

孔子が楚に往く途中、林の中に出た時に、痾僂せむしの老人が竿で蟬をとつて居るのを見たが、まるで手で拾ふやうに巧いので、孔子は感心して尋ねた。

孔「お前は大變上手だが、それには道があるかい。」

老「もとよりある。五六月の間、一二つの丸を竿の先に累ねて落ちなければ、蟬を取るに大分うまくゆくので、取りそこなふのはほんの僅である。次に三丸を累ねて落ちぬやうになると、十の中一つ逃がす位、更に五丸を累ねて落ちぬやうになると、最う手どりにするやうなもので、一も逃がすことはない。私が身を据ゑる様や臂で竿を執る様は、枯株槁枝の如く凝り止まつて少しも動揺しない。天地の廣大、萬物の衆多と雖も、唯蟬の翼を知るのみで他

を知らず、凝立して四顧せず、天地萬物を以て蟬の翼に易へないから、之を逃がすことがな

501

孔子は之を聞いて、弟子を顧みて戒めた。

孔「小枝にも妙理があるもので、志を用ふること専一であれば修練の極、その神凝定して擾れないといふことがあるが、これ正しく此の老人の事であらう。」

次に顔淵が孔子に尋ねた話。

顔「私がかつて觴深といふ淵を渡つたとき、渡守が舟を操ること神の如く、如何にも上手であつたから、舟を操る術は學び得られるものと問ふと、彼は「學ぶことが出来ます。善く遊ぶ者が練習を積めば、やがて出来るやうになるが、若し善く水底に没する者ならば、水を視ること平地の如く、舟など始めから眼中にないから、之を操ることは何でもないのです」と答へたので、私は重ねて其理由を尋ねましたが、彼は何とも返事をしなかつたのですが、その術は何ういふことでせうか。」

孔「善く遊ぶ者が數々練習して上手になるのは、つまり水を忘れるからである。なほ更に進ん

で、善く水に没する者が、舟など眼中になく、巧に之を操るのは他でもないが、彼は深淵を視ること丘陵の如く、舟が覆ることも、車が坂で後却する位に考へて居て、いくら目の前で覆らうが、後却しようが、平氣で神を擾さず、常に餘裕綽々としてゐるからである。物を賭けて射を競ふ場合に、その賭物が瓦器であれば、心が牽かれないでうまく中るが、帶鉤である、いくらか氣を牽かされて中らぬことが多く、更に黄金を賭けると、愈々心がくらんで、中らないやうになつて了ふものだ。これその技巧は同一であつても、心に顧惜する所があると、その重んずる點が外部になるから、内心の守りを失つてさうなるのに違ひない。すべて外を重んずると、内は必ず拙くなるものである。」

田開之といふ者が周の威公に見えたとき、左の問答をした。

威「あの祝腎は養生の術を學んでゐるさうだ。お前は彼と交際して居るが何か聞いたか。」

田「私は箒を持つて門庭に侍するだけで、別に聞いたことはありません。」

威「田子よ。遠慮には及ばん。何うか是非聞かして呉れよ。」

田「私が先生から聞く所によれば、善く生を養ふ者は、羊を飼ふやうなもので、羊を扱ふ際に

さつさと前に行くものはよいが、後れてぐづ／＼して居るのは鞭で打つて進行させるのであるが、人でも已に内を養ふ者は更に外を養ひ、外を養ふ者は更に内を養ふといふやうに猶ほ至らぬ所を務めて修養せねばなりません。」

威「それは何ういふ譯か。」

田「魯に單豹といふ人があつて、山中に隱遁して人と名利を争はず、年七十になつても顔の色澤は如何にも若々しく少年のやうであつたが、不幸にして餓虎に遇つて食はれて了ひ、又張毅といふ者があつて、貴顯の家に諂つて出入りして居たが、年四十にして熱病に罹つて死にました。單豹は恬淡寡欲で、内部の修養はしたが、外部を怠つてゐるが故に虎がその隙を襲ひ張毅は外部に氣を取られて了つて、内部をお留守にして居た爲に、病にその虚を犯されたのであります。此二人は何れもその後れたものを鞭たないものです。孔子も「内を養ふに過ぎることなく、又外を養ふに過ぎることなく、枯木の如くして、何れにも偏せざる中央の境地に立つて、時に順つてゆけ。此三者がうまく行けば、養生の道は盡きてゐる」と言はれました恐ろしい物騒な道で、十人同行して其中の一人が若し殺されると、父子兄弟相戒め、必ず徒卒

を多くして後敢て出るやうになるので、これも知であるには異ひない。然し、人の畏るべきものは柩席の上、飲食の間で、食色皆生を傷ふべきものであるが、而も之を戒めることを知らないのは過であつて、即ち外を防いで内を防がないものであります。」

或る祭祀官が禮式の衣冠を着けて豕小屋に臨み、豕に向つて「汝は死を厭がるに及ばぬ。吾三月の間、美食を以て汝を養ひ、十日戒し、三日齋し、白茅を藉いて汝の肩尻を俎上で料理して神前に具へようとするが、汝は之を欲するか。然し眞實汝の爲に謀れば、汝はまづい糟糠を食はせて貰つて、豕小屋の中に自由にして置かれる方がよからう」と言つた。然るに彼れ自身の爲に謀るときは、苟くも生きて尊貴の位地さへ得れば、死んでどんなにされてもかまはぬといふ。豕の爲に謀るときは、死んではつまらぬとしながら、自分の爲に謀るときには、死んでも地位などが得たいと考へ、豕と自分と取捨を異にするのは、抑々何ういふ譯だらう。

齊の桓公が澤中に狩した時、管仲は御車となつた。その際桓公は魔物を見て大に懼れ、管仲の手を執つて、何か見たかと問うた所が何も見ませぬとの返事、やがて桓公は宮廷に歸つた後、嚙語をいつて病となり、數日外出しなかつた。時に齊の士に皇子告敖といふ者があつた

が見舞に來て、次の會話をした。

告「公の病は氣の所爲で自ら傷いたのであつて、決して魔物ではありませんまい。胸中に鬱結したる氣が散じて歸らないと不足を來して、失ふ所あるが如くなり、氣が上つて下らないと陽發して怒りつほくなり、下つて上らないと陰伏して忘れつほくなり、上らず下らず、身の中央にうろつき、胸につかへると、陰陽争つて攻め合ふから、そこで病氣になるのであります。」

桓「然らば魔物といふものは現にあるのか。」

告「それは現に有るもので、溝泥中の魔物を履といひ、竈中のを髻といひ、戸内の塵だめの雷霆といひ、室の東北方の下のを陪阿魘といひ、西北方の下のを泐陽といひ、水のを罔象といひ、丘のを幸といひ、山のを夔といひ、野のを彷徨といひ、澤のを委蛇といひます。」

桓「最後の委蛇とは何んな物か。」

告「委蛇はその大き轂の如く、長さ轆の如く、紫衣を着、朱冠を戴き、雷車の聲を嫌ひ、そして首を長く延ばして立つて居るもので、之を見た者は霸者になれるといふことであります。」

之を聞いた桓公は忽ち機嫌が直つて大に笑ひながら、

桓「是れ正しく予の見たものである。」

斯う言つて、やがて臥床から起きて衣冠を正し、告敖と坐談し、日を終へずして、病氣は何處へ去つたか分らぬやうになつて了つた。

紀消子といふ人、齊王の爲に鬪鶏を養つた所が、十日を経て王は尋ねた。

王「鶏は最う使つてもよいか。」

紀「まだいけません。今日はまだ氣が荒立つて敵を待つて居る位です。」

又十日を経て問ふと、

「まだです。たゞ敵の影と響だけでも、之に應じようとして居ます。」

又十日して問ふと、

「まだです。敵が來ると疾視して怒り出します。」

又十日して問ふと、

「どうやら宜しい。敵が鳴いて戦を挑んでも、最う氣色を變ずることなく、之を見るに、宛

も木の鶏のやうであつて、其徳が完くなくなりました。これなら他の鶏は相手になれず、逃げ出してしませう。」

孔子が黄河の呂梁に遊んだところが、そこには三十仞ばかりの瀑布があつて、その下四十里の間は流沫渦巻き、魚や鼈の類でも遊ぶことが出来ぬ位である。すると一人の男が水中に遊びで居たので、孔子は浮世をはかなんで投身したものだと思ひ、弟子をやつて流れに沿うて、之を救はせようとしたが、數百歩にして其男は水中から出て髪を被り、鼻歌を歌ひながら堤の下を歩いて居た。孔子はそこに追ひついて譯を質した。

孔「俺はお前を怪物だと思つたが、よく見ればやはり人である。お前に聞きたいのは他でもないが、水を遊ぶにも道があるのかい。」

男「道なんといふむつかしいものは知りません。たゞ私は平生の練習に始まり、練習の功が積つて第二の天性となり、その極、水と相忘れて、自然そのものとなつたのです。そこで渦とともに水底に入り、湧出する水とともに水面に出で、水の道に任せて己が意を交へません。これが水を渉るに自在を得た所以であります。」

孔「習に始まり、進んで性に長じ、自然の命に合致するとは何ういふ事なのか。」

男「陸に生れて陸に安んずるは習、水に長じて水に安んずるは性、然る所以を知らずして然るのは命で、結局自然に順ふ外に道はありません。」

梓慶が木を削つて鐘鼓をつるす鑠かけき（架木）を造り上げたが、その精巧なことは人間業と思へぬほどであつた。魯君が見て其の術を問ふと、梓慶は斯う答へた。

「私は大工で別に術などはありませんが、唯一つ、私が鑠を造らうとする時は、決して神氣を亂さず、必ず潔齋して心を靜にし、三日を経て慶賞爵祿を思はず、五日を経て毀譽巧拙を思はず、七日を経て超然として己が四肢五體をも忘れます。この時には最う朝廷などの考も頭に止まらず、巧心專一となり、心を亂すやうな外事は皆消えて了ふのであります。そこで山林に這入つて木の性を觀、木の形の極めて精妙で鑠とするに堪へるものを見定めた上で、之を取つて來るので、若しさういふものが見つからなければ、それまでの事として止めて了ひます。要するに己が自然を以て木の自然に合致するので、決して人爲的なわざとらしい技巧を弄して木の天性を損ふやうなことは致しません。器が精妙で、神工と疑はれるのは全くこれが

爲でありませう。」

東野稷といふ者、馬を御する術を以て魯の莊公に見えた。其の馬を御すること、進退は繩すみなはの直に中り、左右の旋轉は規ぎんまはしの圓に合してゐるので、莊公は組織ぬいとりの文あやでもその巧妙には及ばないと思ひ、更に圓く驅けて百度まで旋らせた。その時顔闔が途中で之に遇つたので、中に入つて莊公に見えて、その馬が今に倒れるであらうといふことを告げると、莊公は信じないで、返事もしなかつたが、やがて果して馬が倒れたといふので東野稷は還つて來た。そこで莊公は之の事を預知した理由を闔に尋ねると、彼は、馬の力が既に竭きて居るのに猶ほ過分の能を求めて走らせるから、必ず失敗するであらうと申した旨を答へた。

工倕といふ名工は、手を運らして圓形や方形を描くことは規矩を以てするもの以上で、指即規矩であつて、心で考へることもなく、心はたゞ純一にして有爲の念を雜へず、手に應じてひとりで出來て少しも之を妨げるものがなかつた。一體、足のあることを忘れるのは履がよく合ふからであり、腰を忘れるのは帯が工合よく合ふからであり、知が是非の別を忘れるのは心に一事なくして美惡兩つながら忘れるからである。内、己を變ぜず、外、事物に移されざるが

故に、遇ふ所に随つて心安泰を得て自適するのである。元來、自適といふことが念頭にあれば、それはまだ本當に自適してゐるのではなく、唯々自適といふことを全然忘れて了つて、無意識的に自適するやうになつて始めて眞の自適といへるのである。

孫休といふ人は一日扁慶子の許へ往つて怪しみ問うた。

孫「私は郷里に居ては品行が修まらぬと謂はれたこともなく、危難に臨みては卑怯だと謂はれたこともないが、然し原野に耕せばうまく出來ず、國君に事ふれば世に遇はず、郷里に斥けられ、州郡に逐はれるといふ始末。一體私は天の神に對して何の罪があるか知らん。まあ何うしてこんな運命に遇ふのでせう？」

扁「汝は至人の自ら行ひ、獨り修むることを聞かぬか。虚遠清高にしてその肝膽を忘れ、耳目を忘れ、茫然として墟垢の外に彷徨し、無爲の業に逍遙して居るので、これ謂はゆる其事を作為して敢て自ら恃まず、其徳を長育して敢て自ら主らぬものである。今、汝は心知を飾つて衆愚を驚かし、身形を修めて汚俗と異にし、昭々として日月を掲げて行くが如く人の耳目を聳動して居る。汝がその身形を全うし、九竅を具へ、中途にして聾盲跛蹇かたがへを免れ、人

間並みに生活を遂げ得るはまだしも幸である。それに何うして天を怨むなどいふ暇があらう。汝、速に去るがよい。」

斯う言はれて孫子は外に出た。扁子は室に入つて坐し、暫くして天を仰いで歎息した。そこで弟子がまた問をかける。

弟「先生は何を歎息されるのですか。」

扁「先刻、孫休が來た時、予は彼に至人の徳を告げたが、餘りに其大なるに驚いて、その爲に彼は一層惑ひを増すかも知れんと心配するのである。」

弟「いや、さうではありません。先生の言にして非なれば、固より彼を惑はすことは出來ず、又孫子の言非にして先生の言是ならば、彼は始めから惑を懐いて來たのですから、先生の方に何の罪もありますまい。」

扁「それはいかぬ。昔、或る鳥が魯の東郊に止まつた時、魯君は之を宮中に迎へて、至れり盡せりの饗應をしたが、其の爲に反つて鳥は死んで了つたといふ話があるが、こは要するに鳥の天性に合はぬことをしたからである。今、彼れ孫休は見識卑しく、見聞狭き小人であるのに、

予が至人の徳を告げたのは麋鼠を載せるのに車馬を以てし、鸚雀を楽しませるのに鐘鼓を以てするやうなもので、何うして驚き惑はずに濟まう。」

外篇二十 山 木

この篇は身を全うし患を免れる道を論じたもので、内篇の人間世と照し合はして見るべきものである。その旨意は己を虚しうし時に順つて、自ら賢とするの心を去るに在る。是れ即ち人間處世の要諦に外ならぬといふのである。

莊子が山中を通つて、大木の枝葉の茂つてゐるのを見たが、そま柚がその傍に立つたまゝ、これだけは伐り倒さなかつた。そこで理由をきくと無用の木であるからといふ返事であつた。莊子は無用のお蔭で此木は天壽を全うすることが出来ると言ひ残して、山を出て、昵近者の家に泊ると、その主人は大に喜び、童僕に命じて、雁を殺させて御馳走した。その時、童僕は雁は二羽あるが、一は鳴き、一は鳴かぬが、どちらを取るべきかをきくと、主人は鳴かぬ方を殺すべく命じた。翌日、弟子は莊子にこの事を質した。

弟「昨日見た山中の木は無用の爲に天壽を得ましたが、今、主人の雁は無役の爲に殺されました。先生はどちらの方を善いと思はれますか。」

莊「予は用と無用、材と不材との中間に居ようと思ふ。然し、材と不材との間は道に似て實は道に非ざるものである。故に猶ほ累を免れない。若しそれ道徳に乗じて世に浮遊する者はこれとは異つて、可もなく否もなく、或は屈し或は伸び、物に應じ時に隨つて凝滯することなく、或は現はれ或は潜みて、その可に適して止み、萬物の祖たる道の中に浮遊し、物を役して物に役せられなければ、外境に累はされることはない。これ即ち神農黃帝の法則である。されど、萬物の情、人事の常はさうでなく、合へば離され、成れば毀られ、圭角あれば挫き折られ、尊ければとやかく批評せられ、爲すことあれば虧き損ぜられ、賢なれば謀られ、不肖なれば欺され、材と不材と何れにしても災を免れぬ。實に悲しむべきである。汝等よく之を記憶せよ。たゞ自然の道徳に居る者が、獨り中正を得て禍を免れることが出来るものである。」

市南の宜僚が魯君に見えた時、魯君心配さうな顔をして居たから宜僚は問ひ始めた。

宜「何うなさいましたのですか。」

君「俺は先王の道に則り、先君の業を修め、居ては鬼神を敬し、立つては賢者を尙び、親切にして之を行ひ、暫くも離れることはないのに、相變らず色々の患難が起るから、それで心配して居るのだ。」

宜「そは君が患難を除く方法が浅いからであります。大狐や豹は山林に住み巖穴に伏して、あの様に靜かであり、夜は出て歩き晝は穴に居て、あの様に用心し、饑渴窮困するも猶ほ人里に遠かり、江湖の上を漁つて食を求め、あの様に考をきめて居るのに、網や罟わたに引罹るのは、何の罪といふこともなく、唯々其皮の美しきが爲であります。今、魯國は君の皮の如きもので、魯君にして魯國に生れた以上は止むを得ないことです。そこで必ず患難を免れんとならば、外、君の形を刮り皮を剥ぎて累を去り、内、心を洗ひ欲を離れて道徳の郷に遊ぶのが肝要であります。あの遠い南越に建徳の國といふのがあつて、其民は愚昧にして而も朴實、私欲少くして唯々耕作することを知つて貯藏することも知らず、人に物を與へても其報酬を取ることもしなければ、義に適ふか否かの分別もなく、禮を行ふべきか否かの差別もなく、無心にして跡なく、而も自然の道に適つて、生きては樂み、死しては葬り、時に安んじ順に處して、世俗の哀樂を超越した實に眞の至樂の境であります。君も魯國を去つて、俗を

棄て、道と相輔け導いて、其處へ行かれたらよからうと思ひます。」

君「かの建徳の國は、道が遠く險阻で、又所々に江山もあるさうだが、手許には生憎舟車がな
い。何うしたものか。」

宜「君、高貴の體を恃みに倨りたかぶることなく、己が身を忘れて了へば圓轉して其地位に凝
滞することなく、國を念頭から去れば何物も阻止することがないから、之を車として乗つて
行かれたらよいでせう。」

君「彼地は幽遠にして人も居ない。俺は誰とともに鄰をなすべきか。又俺に糧食が切れたとき
には何うして行くことが出来よう。」

宜「君の費を少くし、君の欲を少くすれば、糧食がなくとも足るであらう。又君にして一たび
江を涉つて海に浮ばゞ、之を望めども涯なく、愈々往いて愈々窮まる所を知らず、君を送る
者皆岸から還り去らば、君は超然世を離れて、獨り遠きに到るであります。」

すべて人を有つ者も累があり、人に有たれる者も憂があります。されば堯は天下に主たれ
ども、人を有つ意があるのでなく、又人に有たれる意があるのでなかつたのであります。願

はくは君も亦堯に倣つて、君の累と憂とを除いて、獨り道と連れ立つて、大莫の國即ち大無
の郷に遊び給へ。譬へば舟を方べて河を濟る時、その一方が虚船であつて、來つて我舟に衝
突した場合には、性急な人が居ても怒ることはないであります。然るに、若し一人でも其
舟に乗つて居たならば、之を呼んで、其船を開かせるか退かせるかするでせう。一たび呼ん
で聞えず、二たび呼んで聞えずば、其次には最う腹を立て、怒罵の聲を放つでせう。前には
怒らずして今怒るのは、前には虚にして相手なく、今は實にして相手があるからでありま
す。されば人能く己を虚しくし、事物に逆はずして世の中に遊ばゞ何物も之を害することは
ありません。」

北宮奢といふ臣が衛の靈公の爲に、民財を集めて鐘を鑄り、その前に祭をする爲に、祭壇を
郭門の外に作り、僅に三個月の間に鐘を懸ける架を造り上げた。王子の慶忌はその餘りに早き
を怪んで其術を問ふと、北宮奢はかういつた。

「唯々自然の理に循つたのみで別段術を用ひた譯ではありません。聞く所に據れば圭角を彫
琢して自然の純朴に復歸せよといふことで、私見を起さず、思慮を運らさず、狐疑を止め、

無心にして、去來彼れに任せて送迎することなく、來る者は拒まず、往く者は止めず、其の頑強にして我に背く者は之に任せて逆らはず、其の柔順にして我に附く者は之に任せて強ひず、すべて、其力の自ら盡すがまゝに任せて、敢て逼ることは致しません。それ故に、朝夕民財を徴して事を爲すも、心毫も挫け損ずることはなく、常に平靜である爲に仕事も捗つたのです。況して大道を得たる者に於いては猶更のことせう。」

孔子が陳蔡の間に圍まれた時には、七日の間煮たものを食べなかつた。時に大公任といふ人が慰問して相語つた。

大「君は今に死ぬかも知れん。」

孔「さうです。」

大「君は死といふことを嫌ふのか。」

孔「如何にも。」

大「然らば、今、試に不死の道を語らう。東海に意怠といふ鳥が居るが、自ら飛ぶことが出来ないで、頗る無能の如く、互に仲間を引連れて飛び、翼を連ねて棲み、進むときは前になら

ず、退くときは後に立たず、食ふときは順序に従ひ、敢て他に先んずることなくして必ず餘物を取る。故に其行列にも斥けられず、人間にも害せられず、さういふ患といふものは全く免れてゐる。それ直木は先づ伐られ、甘井は先づ竭きる。その用多きが爲である。意ふに君も亦知を飾つて衆愚を驚かし、身を修めて他人の汚れを明かにし、昭々として日月を掲げて行くが如く、著しく人目に附くが爲に此患に罹つたのである。嘗て予が大徳の人から聞く所に従へば、自ら伐る者は功なく、功成る者は傷れ、名成る者は必ず虧けるといふことである。誰かよく自ら功と名とを辭して、之を衆人に歸し與ふる者ぞ。道德は流行して天下に充滿するも、而も光を韜み輝を匿して其明に居らず、志を得て其道世に行はるゝも、而も名を藏し迹を晦まして、其名に居らず、朴素にして衆物に混じ、愚に類し、聖迹を削り、權勢を棄てゝ心を功名に留めず、人を責めず、亦人に責めらるゝこともない。斯かる至徳の人は世に名聞を求めらるものでない。然るに君は何故に之を喜んで自ら患を招いたのであるか。」

孔「善いことを教へて下さいました。」

そこで孔子は其交遊を辭し、弟子を退け、大澤に逃れ、皮の着物や短衣を纏ひ、椽の實や栗

を食つて無心平虚な生活をしたので、獸中に入るも群を亂さず、鳥群に入るも行列を亂さぬ様になつた。斯く徳至れば鳥獸すら惡まぬものであるから、況して人間に於いては言ふ迄もないであらう。

次に孔子は子桑雎に向つて問うた。

孔「自分は二度までも魯から逐はれ、宋では樹を伐られ、衛から追放せられ、商周に窮し、陳蔡の間に圍まれた。かゝる憂目を見て、親しき交も益々疎く、門弟朋友皆去るばかりであるが、これは何に因るのであらう。」

子「君はあの假といふ國の人の亡命した話を知らぬか。假の林回といふ人は千金の貴い玉を棄て、赤子を負うて走つた。或人が「價值より言へば赤子などは賣つた所で知れたもの、又係累よりいふも赤子は厄介物である。然るに千金の玉を棄て、赤子を負うて走るとは何うしたものか」といふと、林回は之に答へて「玉はもと利を以て合つたもので、赤子は天を以て吾に屬したものである。それ利を以て合ふものは危急の際に臨めば相棄てるが、天を以て屬するものは、危急の際に臨めば相頼つて決して離れぬものである」と言つた。相頼ると、相棄

てるとは全く懸け離れた事である。且つ君子の交は淡くして水の如く、小人の交は甘くして醴ちまきの如くである。而して君子は淡なるを以て愈々親しく、小人は甘きが爲にやがて絶交する。故なくして合つたものは、又故なくして離れる。君が門弟交友に去られるのも亦此類であらう。」

孔「謹んで承りました。」

かくて孔子は徐行逍遙して歸り、學を絶ち書を捐て、弟子も揖讓の禮を行はずして師弟の愛は益々加はつたのである。

他日子桑雎は又斯う言つた。

子「舜の將に死なんとする時、禹に命じて「汝、之を戒めよ。身は縁附するに若くはなく、情は率直なるに若くはない。縁附すれば、外圓滿にして人に忤はず、率直なれば、内方正にして其性に逆はず、斯くて離れず勞せずして自然に任せば、文を以て形を飾るに及ばず、従つて外の禮文や交誼を待つことなく、此に至つて、眞に人と交ることが出来る」と言つたが、是れ本當に世に遊んで身を全うする道である。」

莊子が粗布を衣て、所々補綴をあて、帯を結び、壞れた履を縄で縛り付け、いかにも貧しさうな風采で、魏の惠王を訪問すると惠王は驚いて問うた。

惠「先生は何故そんなに憊れたのか。」

莊「これは貧であつて憊ではない。士が道德を懐きながら、行ふことの出来ないのは憊れたといふべきであるが、衣が破れ、履に穴があいてゐるといふ様なのは、貧ではあるが憊ではない。所謂時に遭はぬものである。王はかの木に騰る猿を御存じないか。猿は柵、梓、豫章の如き好木を得て、其枝に取縋つて得意になつてゐる時は、古の射の上手な羿や其弟子の逢蒙なども、平氣で見向きもしない。所が柵棘柵の如き刺ある悪木を得るに及んでは、びく／＼して行き、側をじろ／＼と視て畏怖して居る。こは危難の爲に身體が硬くなつたのではなく、その勢便ならずして其能を十分發揮することが出来ぬからである。今、昏君亂臣の間に居ては、何うしても憊れざるを得ない。かの比干が紂王の無道を諫めて心を剖かれたことを以て見てもわかるのである。」

孔子は陳蔡の間に窮して、七日の間火食せず、左手は机に據り、右手に策を撃つて、恬然と

して神農氏の頌を歌つたが、その器具はあれども節奏なく、その聲はあれども五音を備へず、拍子木の聲と歌ふ聲とが釋然分別して、人の心に適當するやうであつた。そこで弟子の顔回は身を正しくし、手を拱き睛を轉じてその方を窺つた。すると孔子は、顔回が思ひ誤つて孔子自ら己の道德を廣めて大に至らんことを求め、己が身を愛して危きに遇ひ哀に至つてかゝる歌を歌ふものと爲すのを恐れて、顔回を召して告げた。

孔「自然の損を受け、窮阨に處しても樂しんでゐるのは易いが、人爲の益を受け、富貴に居りて常に心を擾さずに保存するのは難い。又始めは即ち終りにして變化は無窮であることを知つて心を以て物を逐はず、且つ人と天とは一にして皆自然に本づいてゐるから、其自然に任せば今歌ふも、そは我ではないのである。」

顔「自然の損を受けるは易いといふのは何ういふことですか。」

孔「飢渴寒暑、窮塞して、推せども行く能はざるは命であつて、猶ほ天地の絶えず運行し、萬物の一旦發泄して止むべからざるが如く、唯々造化に順つて俱に行くより外はないとの謂である。人臣たる者、君命の前には逃れることはならぬ。臣としての道を持する者すら、さう

であるのに、況して天から命ぜられる窮塞に當りては言ふ迄もなく、唯之に處して樂しむの外はない。」

顔「人爲の益を受けぬことは難いとは何ういふことですか。」

孔「人の進む所障礙なく、順境に立つて爵祿意の如くなるは、これ外より來る利益であつて、己が本有のものではない。即ち吾命は外に存するものがあつて、偶然來つて吾に寄るに過ぎぬ。君子賢人は竊に之を取るといふことに意あるものではない。而も來るに任せて安然として取るは何故か。見よ、かの燕といふ鳥は害を避ける智慧の最も勝れたものである。人家に入り、巢を作らんとして、適宜の處を得なければ、視るに違あらずして飛び出し、口に啣へた物を落しても、其儘拾はないで去るものである。斯く燕は人を畏れながら、而も人家に據らねばならぬといふのは、思ふに、彼は人家をすて、他に身を安んずべき地がないので、恰も社稷の神を一定の所に鎮祭して他に移すべからざると同じである。要するに人は人益の受くべきでないことを知るも、人世に處する以上は止むを得ないのである。而して燕が人によつて人に害せられぬやうに、人も亦人世に在つて富貴を受けて、而も人から厭はれないといふ

ことは難いことである。」

顔「始めとして卒りに非るはなく、終始一とは何ういふことですか。」

孔「道は一切萬有を生じて變化窮りなく、人はその中に在つて、それが如何にして行はれて行くか解らず、日夜相代つて終始する所を知らず、去來送迎すべからず、唯々眞を守つて自然の化を待つべきのみである。」

顔「人と天とは一であるとは何ういふことですか。」

孔「人は自己の力にて生ずるものでなくして自然に依つて生じ、天も亦自然に依る。されば人天皆自然である。然るに人往々自然のまゝを保つことを得ないのは、自ら人性の上に加損する所があつて自然に順はないが爲である。聖人は然らず、終始不二、死生一如の理に通ずるが故に晏然として化に隨つて往き、自然に任せて終るので、即ち天と合一したるものに外ならぬ。」

莊子は或る時彫陵といふ所の藩籬に遊び、一種變つた鵲が南から來るのを見たが、その翼の廣さ七尺、目は回り一寸、莊子の額に當つて栗林の中に止つた。そこで莊子は「翼大なるも巧

に曲折して行くこと能はず、目大なるもよく観ることを得ない。こは一體何ういふ鳥だらう」と獨りごとを言ひつゝ、衣裳をまくり上げて疾行し、彈弓を把つて之を窺つた。時に又一方を見ると、蟬が木蔭に隠れ、其身を忘れて楽しんで居たのに、螻蛄が草葉の蔭に身を隠して、そつと其蟬を捕らうとし、専ら其方に心をとられて、己が身をお留守にして居ると、さきの鵲はそれに付け込み、占めたと思つて、又そのことに心を奪はれて、自分の身が莊子に狙はれて居ることも忘却してゐた。莊子は之を見て怵然として驚懼し、「あゝ凡ての物は本來相累はし、利害の二類はお互に招き合ふものである。慾といふものは恐しいものだ」といつて、彈弓を棄て、走り歸つた。所が栗林の番人は、栗盗人と誤認して、莊子を追ひかけて罵つた。家に歸つて莊子は三個月の間、庭先までも出なかつた。そこで弟子の蘭且が其譯をきくと、莊子はかう答へた。

「俺は生を養つて而も己が身を忘れた。恰も濁水に見とれて清淵に迷ふが如く、人欲を以て天然を汨した。且つ俺は老子から、其俗に入つては其俗に従ふといふことを聞いてゐるが、こは其土地の禁令に違ふまじきことをいうたのである。然るに今、俺は彫陵に遊んで、己が

身を忘れ、鵲は俺の額に觸れ、栗林に行つて其眞性を忘れ、栗林の番人は栗盗人と罵つて俺を辱めた。俺は其事を悔いて久しく庭にも出ないのだ。」

楊朱が宋に往つて旅館に泊つたとき、其家の主人に二人の妾があつたが、一人は美女、一人は醜婦であつた。然るに後者の方が寵せられて、前者は賤しまれて居る。楊朱は怪んで其理由を問ふと、旅館の小僧は答へて言つた。

「その美なる方は自ら其美を鼻にかけ、慢心を挾んでゐる爲に、厭氣がさして、別に美しいとも感じません。之に反して醜い方は、自ら不器量だと謙遜してゐる爲に、そのやさしさに感じて、其醜を忘れて了ふのです。」

此言葉を聞くや楊朱は弟子に向つて戒めた。

「汝等よく之を記憶せよ。行ひ賢にして而も自ら賢なりと矜るやうな態度を去つて了へば、いづくに往くとして愛せられない筈はないぞ。」

外篇二十一 田子方

300

この篇の趣旨は學者をして性命の由つて起る所を自得せしむるに在る。内篇の大宗師と參看すべきものである。篇題の田子方は人の名で、莊子は之に就いて學んだことがあるといふ。田子方の學は孔子の門人の子夏から出て居る。莊子が一面に儒學を修めてゐると見られる所以はこゝに存するのである。

田子方が魏の文公に侍坐してゐたとき、屬々谿工の賢を稱揚した。文公は之に就いて子方と問答を始めた。

文「谿工は汝の師か。」

子「いえ、彼は私の同郷人ですが、その論するところが道に當つてゐるので私は彼を譽めるのであります。」

文「然らば汝は師はないのか。」

子「あります。」

文「誰だ？」

子「東東郭順子といふ人です。」

文「それでは汝は何故一度も順子を稱揚しないのか。」

子「順子の人と爲りは至眞にして偽なく、貌は人にして心は天と合一し、自然の大徳があつて己を虚うし、物に順つて天眞を保ち、清廉にして而もよくすべてを包容し、人に無道なる行があつても言語を以て之を責めず、唯々己の容を正しうして、彼をして自ら感悟し、不肖の念をおのづから消滅させるやうにしますので。其徳餘りに大なるが故に、私の如き者にはとても稱することが出来ぬので、今まで噂もしなかつたのであります。」

子方が退出した後、文公は茫然として終日無言であつたが、その後前に侍る臣を召して語つた。

文「あゝ、全徳の君子には遠く及ばない。始め予は聖智の言、仁義の行をば究極のものとして考へて居たが、今、子方の師の事を聞くに及んで、予が體は解散して動きもならず、予が口は銛ついでんで言ふべき語もない。予が此迄學んだ所のは眞に土偶の如く、貌あれども神たまひのないも

301

のである。さても、魏王たる人爵は眞に予が身の累となるに過ぎぬ。」

温伯雪子が齊に往く途中、魯に泊つたとき、魯人で面會を請ふ者があつたが、雪子は「それはお断りする。一體、魯の君子は人爲の禮義に明かであるが、これのみに拘つて、人間の本心を知るに拙であると聞いて居るから、さういふ人には會ひたくない」といつて、之を拒絶したやがて齊に往つて、その歸り路に再び魯に一泊したらば、さきの人が復た面會を請うた。雪子は「先日自分にも會ひたいといひ、今また態々さう言うて來るのは、何か自分に益する所があるに違ひない」といつて、出て客に面會した。やがて室に入つて歎息した。翌日もまた會つて同じやうに歎息したので、召使が怪んでその譯を尋ねると、雪子は答へて「それでは聞かすが魯の君子は外面の禮節をよく辨へて居るが、本心の眞を知るに拙い。先日予に面會した人はその進退は規矩法則に適ひ、その様從容として龍虎の如く文彩に富んで居る。而して予に忠告すること子の如く、予を誘導すること父の如く、餘りに形式に過ぎるので、予は其弊の甚しきを歎息したのである」といつた。一方、孔子は豫て雪子に面會することを望んで居て、漸く其機を得たのに、一言も雪子に向つて發しないので、子路が不思議に思つて其由を問ふと、孔子は

「雪子の如き人は、目の觸れる所に隨つて道が存してゐる。即ち一見して意已に達するが故に何も言説を須^{もと}ひないのである」と答へた。

顔回と孔子とはかつて次のやうな問答をした。

顔「私はすべて先生の爲さる通りにして、或は歩み或は趨り或は馳せるのでありますが、先生が宛も馬の奔逸して塵を絶つ如く速に走られるときには、私は只後に瞠^{しり}若として目を視張つて居るばかりです。」

孔「回よそは何の事か。」

顔「それは即ち先生が言はるれば私も亦言ひ、先生が辯ぜらるれば私も亦辯じ、先生が道を談ぜらるれば私も亦談するといふことであります。然るに先生が奔逸絶塵して、私は只後に瞠若たる譯は、先生は自ら言はれなくとも人自然に信じ、親まれなくとも人自然に親み、名位なくして人自然に歸依して、而も何故かといふことは解りません。とにかく吾々の到底眞似ることの出来ない偉大な點があるからです。」

孔「さて、其點は篤と考へねばならぬ。それ悲哀は心の死より大なるはない。肉體の死は其次

である。かの太陽は旦に東方に出て夕に西山に没する。日既に昇れば萬物燦として指點すべく、目あり足ある人類は日の出を待つて仕事を爲し、生息を遂げる。従つて日が出れば存し、日が没すれば亡びるといふやうに、人事の存亡は日の出入に係るのである。獨り人類のみならず、萬物が道に待つ所あるも亦この通りで、生死皆之に循ひ、之を待つてするものである。一旦天地の成形を受けたる以上は、我自ら之を化し滅さずして、自然に任せて盡きるを待ち、其間はすべて他に倣つて動作して一點の私心を容れず、變化隙なく日夜に新たに於て終る所を知らず、唯々自然に人の形體を稟けて生死皆天命なることを知るも、事前に之を度ることは出来ない。此の如くして自然の化とともに日々移り往くのである。終身汝と臂を交へて相守るとも竟に停らしむることは出来ぬ。この點は哀しと謂へば哀しいのである。然るに汝は唯々予が言動の目に見えるもののみを見て、見えない所の或るものを見ない。即ちかの道は停滯して迹を止むるものに非ずして必ず無に歸するものであるのに、汝は相變らず之を有に求めて居るが故に道を見得ることが出来ないのだ。譬へば馬を求めぬのに、馬市まで往かずに、その途中の宿泊所で求めようとしても、往來常なく、馬は此に留まらずして

遂に得られないのと同じである。抑々人間思惟の作用は我といふものに基くのであるが、予の我も汝の我も去ることの甚だ迅速なもので、故き我は忽ち去つて新しき我は忽ち來り、去來常なきも、然もそこに一貫して去來しないものがあつて存する。即ち眞我である。これを覺りさへすれば何も哀しむの要はないであらう。」

孔子はかつて老子と會つた。偶々老子は髪を洗つて、日に乾すところで、凝つとして動かさず人でないやうに見えた。孔子は折を見計らつて待つて居たが、やがて會談した。

孔「私は目が眩惑したのでせうか。さきに先生の御體は兀然として枯木の如く、物を遺れ人を離れて超然獨立して居られるやうに見えました。」

老「俺は物の初め、即ち道體の境中に遊んだ。」

孔「そは何ういふ譯ですか。」

老「道は心に知る能はず、口に言ふ能はざるものであるが、試に汝の爲に先づそれに近い所を語らう。抑々至陰は肅々として嚴冷、至陽は赫々として光明なものである。而して其肅々たるは天より出で、其赫々たるは地より發し、陰陽互に相根ざして、二者遂に交通相和して、

始めて茲に物が生ずる。其間何者かあつて之を主宰するやうであるが、其形は見えない。四時の推移、日月の運行、晦明循環、日に改まり、月に變り、暫くも停らないけれども、其功は解らぬ。生は萌す所あり、死は歸する所あり、死生終始、反覆往來して窮りないのは、そこに然るべき本源があるからである。是れ即ち道であり、物の初めである。」

老「その道に遊ぶには何うしたらよいでせうか。」

老「それ斯道を體得するときは至美至樂の境に入る。この至美を得て至樂に遊ぶ人をば至人とすふのである。」

孔「そこまで達するには何うしたらよろしいか。」

老「かの草食動物は己が住む藪を易へることを厭はず、水に棲む蟲はその淵を易へることを厭はぬ。それは處易るも飲食の資なほ存し、小變に遭つても大常は依然として存するが故である。従つて喜怒哀樂の情は其胸中に入らないのである。思ふに天下は萬物の歸一する所である此點を知つて自ら之に同すれば、こゝに天下萬物と合體して己が肉體各部は塵垢同様、責びもせず、執着もしない。又死生終始などは晝夜の交代するが如く考へる。而して此等の

ものに依つて心を亂すことはない。況して得失禍福等微々たる事柄に於いては言ふ迄もないかの奴僕を棄てること泥土の如き者は、我が彼より貴きを知るが故である。今若し貴き道が我に在ることを知れば、外界の事物衆多なるも、もとより意に介するに足らない。且つすべて變轉して極ることなく、何物も我が心を憂へしむるに足らぬ。たゞ修道の人のみが此理を悟り得るのである。」

孔「先生の至徳、天と同じきを以てして、而も猶ほ至言を假りて修養されたのですが、古の君子にして誰が能く言説を離れ、之を假らない者がありませう。」

老「いや、かの水は、人が勝手に汲んで用とするも、水自ら之を爲すにあらずして、その本質がおのづから然らしむるのである。至人の徳に於けるも亦自ら修めずして、而も他物は之を慕うて離れることが出来ないものである。それは天の自ら高く、地の自ら厚く、日月の自ら明かなるが如く、すべて自然であつて、何も特別に修めるといふ譯でない。」

孔子は退出した後、顔回に向つていつた。

孔「自分の道に於けるは丁度醋甕すげの中の蟲のやうである。老先生がその蓋を開けて下さらなか

つたならば、自分は何時迄もその小さな中に在つて天地の大全を知らずに終つたことであらう。」

莊子が魯の哀公に見えた時の話。

哀「魯には儒者多くして、先生の道を修める者は少す。」

莊「いえ、魯には儒者が少い筈です。」

哀「魯國を擧げて悉く儒服を着て居るのに、何故少いと言はれるか。」

莊「承るに、儒者が圓冠を戴いて天に象るは天時を知るを表し、方履を穿^はいて地に法るは地形を知るを表し、歩行緩かにして袂綬を佩ぶるは、事に遇つて決斷する意味を表したものださうですが、君子にして眞に其道を有する者は、必ずしも表象の服を作らず、又其服を着る者が必ずしも道を知るとは限りません。君若し疑はれなば、國中に發令して、儒道を認得せずして儒服する者は死刑に處するといつて御覽なさい。」

これを聞いて哀公は早速天下に發令したが、その後五日にして、魯の國中に敢て儒服する者が不在になつた。唯々一人の男子(孔子)があつて、儒服して魯公の門に立つたので、哀公

は之を召して國事を問ふに、その議論は千變萬化、縱横自在で、窮る所がなかつた。そこで

莊子は哀公に向つていつた。

莊「それ御覽なさい。魯國の廣きを以てして眞の儒者は唯一人、決して多いといふことは謂へますまう。」

百里奚といふ人は爵祿の尊きも其意に介しなかつた。それ故に牛を畜つて、その牛が肥えたので、秦の穆公をして、其身の賤を忘れて國政を任せしむるに至つた。又、舜は頑迷不靈の親に依つて屬々殺されようとしたが、彼は死生を心に留めず、至誠を以て貫いた。それ故に人を感動せしむるに十分であつた。

宋の元君が畫をかゝせようとして、多くの畫工を集めた。畫工達が皆やつて来て、命を受けて會釋して立ち、筆を砥り、墨を加減して、我こそはと意氣込を示してゐる。而して競争者が多くて内に這入り切れないうで外に在る者が半数である。時に一人の畫工が後れ馳せにやつて來たが、如何にも悠々と落ちつき拂つて徐行し、命を受けて會釋はしたが、其位地に立たずして其儘宿舎に歸つて了つた。元君が使を遣つて之を視させたらば、正に衣を解き兩足を投げ出し

て、眞裸になつて居た。元君は大に感心して「可し。これこそ眞の畫工である」といつた。

文王は臧といふ地に遊んで一人の男が釣するのを見たが、その様子を見ると、眞に釣をして居るのではなく、即ち外の人のやうに何うかして魚を獲ようとして釣竿を堅く持つてちつと待つて居るわけではなく、たゞ平生此邊りに綸（りいど）を垂れて、その趣きを楽しんでゐる位のものであつた。文王は何を感じたか、之を擧げ用ひて國政を委ねようとしたが、大臣父兄の安心しないことを恐れて、其儘に捨て置かうかとも思つた。しかし萬民の天と仰いで國事を托する者が無いのを忍び兼ねた。そこで一策を案じ、翌朝大夫を集めて相談を仕掛けた。

文「昨夜予は夢に、色の黒い、そして鬚を蓄へた賢者が、一蹄赤き駿馬（ぎやうま）に乗つて来て、予に告げて、「汝の政を臧の老人に托せよ。然うすれば國は治まり、民の苦も癒えるであらう」といつたが、何うしたものであらう。」

大「それは恐れ多いことでしたが、その方は多分御父君で御座いませう。」

文「然らば念の爲に其吉凶を卜つて見よ。」

大「御父君の御命なれば、差ひ給ふことなく、直に御治定遊ばすがよろしい。何も別に卜つて見るには及びませぬ。」

斯くして文王は一同の協賛を経て、遂に臧の老人を迎へて、之に國政を授けた。その老人は法度を變ずることなく、一令をも出さなかつた。三年の後、文王が國內の情況を観ると、朝廷に列する士分の者は朋黨を立つることなく、長官連は政事上の成績を己が功德とせず、兵糧は兵役がないので敢て國內に運び込まれることがなかつた。思ふに分裂朋黨しないのは大同團結を貴ぶが故であり、政事上の成績を己が功德としないのは、衆と務めを同じうするが故であり、兵糧の輸入されないのは、天下の諸侯にして二心を懷く者が無い爲である。是に於いて文王は此老人を大師範と仰ぎ、自ら北面して臣位に就いて、その立派な政事を天下中に推し及ぼし得るか否かを問うた。然るに老人は何も解らぬやうな容子をして答へず、取り止めもない態度で辭退し、朝に王命を聞いて、其夜遁れ去つて、それ以後竟に何うなつたか消息が絶えて了つた。さて之に就いて顔回は孔子に質問した。

顔「文王はまだ徳の至らぬ人ですか。現に人物を見止めて居ながら、何故之を夢に托したのですか。」

孔「黙せよ。汝言ふことなかれ。文王は十分心を盡して居られるのだ。決して格別論評譏刺すべき所はない。文王は唯々一時方便として民の常情に順はれたまでのことである。」

列子が伯昏無人の爲に弓を射たとき、弓を矢先まで一杯に引き絞れば、手と肘と一直線になつて、杯水を肘上に置いて傾かぬほどであつた。矢を發つに、今一矢去るかと思へば、忽ち次の矢が弦上に来り、弦上に在る矢が去るかと思へば、又忽ち新しい矢が弦上に運ばれてあるといふ様に、矢を繼ぐことが極めて速かである。是の時に當つて列子の體は木偶の如く、身動きもしなかつた。伯昏無人は之を見て、

「汝は巧ではあるが、畢竟有心の射である。全く射るといふことを忘れて射る無心の射ではない。今、試に汝と共に高山に登り、危石を踏み、百仞の淵に臨まうと思ふが、それでも汝は能く射るか。」

斯う言つて伯昏無人は先づ自ら高山に登り、危石を踏み、百仞の淵に臨み、山に面し、淵を背にし、猶ほ逡巡して、踵は三分の二ほど崖から出て淵の方に垂れて、極めて危険な位地に立ち、やがて列子を指し招いて此處に來いと言ふに、列子は恐れ入つて、地に膝伏し、汗は

流れて踵に及んだ。是に於いて伯昏無人は列子に向つて戒めた。

「抑々至徳の人は上は青天を闚ひ、下は黄泉を潛り、八方自在にして神氣顔色少しも變ることはない。今、汝は怵然として心懼れ眼狂ふ様子がある。そんなことでは弓を射ても的中は覺束ない。」

肩吾が孫叔敖に問うた話、

肩「君は三たび楚の宰相となつたが、之を榮譽とせず、又三たび其職を罷められても毫も憂へる氣色がない。そこで自分は始めは君を疑つたが、今君の鼻の所を見ると、如何にもものんびりして心氣平靜の相がある。君は如何様に心を用ひて修養したのか。」

孫「予は何も人に勝つた所はない。思ふに、富貴の來るは自然にして却くべきでなく、それが去るも亦自然にして引き止むべきでない。一得一失は皆自ら爲す所ではない。故に予は憂へないのみである。且つ予が宰相となつて人は貴んで呉れるが、その貴きこと其のものは宰相の官に在るか、將た予自身に在るかわからぬ。若し官職の上に在りとせば予自身には無い。従つて宰相たるも予自ら喜ぶには足らん。又若し予自身に在りとせば官職の上には無い。故

に罷められても憂ふるには足らるのである。予はまさに躊躇四顧して思ひを馳せてゐる。何
ろして人間の所謂貴賤などに心を留めてゐる暇があらう。」
後、孔子が之を聞いて言ふやう。

「古の眞人は、人格至高なるが故に知者も説服することが出来ず、美人も淫惑することが出
来ず、盜賊も劫剝することが出来ず、伏羲黃帝も交遊することが出来ず、死生の大事も心を變
移することは出来ぬ。況して爵祿などは言ふに足らるのである。斯の如き人は、其心神は、
太山を経るも障らず、淵泉に入るも濡れず、卑賤微細の地位に處るも病み憊れず、天地の間
に充滿して加損する所がない。事物の爲に己を損はざるが故に、爵祿を人に與へても、己の
身には無形の實が愈々具はるのである。」

楚王が凡といふ國の君と對談して居た時、楚王の侍臣が凡には亡ぶべき三事實の存すること
を述べた。凡君は之に對してかう應へた。

「凡が亡びたとて吾が身に有する所の大道を失ふことはない。凡は滅びるも道を喪ふに足
らぬと同時に、楚は猶ほ存するも存すべきものを存するに足らない。されば凡は未だ始から

亡びるといふ譯もなく、楚は未だ始から存するといふ道理もないのだ。畢竟、吾が重んずる
所は道であつて、國家の有無は敢て道の存亡には關しないのである。」

外篇二十二 知北遊

816

この篇は人をして知と故とを去つて道の眞を體せしむることを論じてゐる。道の偏在性を認むる汎神論的思想は此篇の中に明かに窺はれる。陸方壺は「此篇、論ずる所の道妙、言語を斷ち、名相を絶ち、混溟晦昧、はるかに思議の表に出てゐる。南華を讀む者は、知北遊を最も肯綮となし、之より悟入すれば、大乘清藏、皆又を迎へて解くことが出来る」と言つてゐる。

知はかつて北の方、玄水の邊りに遊び、隱牟の丘に登つて、偶々無爲謂といふ者に逢つたので、之に向つて問を發した。

知「一寸聞きたいことがある。如何なることを思ひ如何なることを慮つたならば、道を知ることが出来るか。如何なる所に據つて如何なる事に服したならば、道に安んずることが出来るか。また如何なる處に従ひ如何なる道を取つたならば、道を得ることが出来るか。」
三たび繰返して問うたが無爲謂は一向何の返事もしなかつた。そは答へないのでなく、

何と答へてよいか解らなかったのであつた。知は遂に問ふことを得ずして、白水の南に反り、狐闕けつの上に登つて狂屈といふ者に逢つたので、前と同じことを問うたれば、狂屈はかう答へた。

狂「俺はそのことをよく知つてゐるから一つ汝に語らう。」

斯くて何事か語り出したが、中途にして其の言はんと欲する所を忘却して了つた。知はまた問ふことを得ずして帝宮に反り、黄帝に見えて之を問うた。黄帝は之に對して、

黄「知無く慮無くして始めて道を知り、處無く服無くして始めて道に安んじ、從ふ所なく由る所なくして始めて道を得るであらう。すべてを否定する所に始めて道は顯はれて來るものである。」

知「俺と君とは最早之を知つた譯であるが、かの無爲謂と狂屈とは知らなかつた。一體どちらが是ぜだらう。」

黄「無爲謂こそ眞に是なるものだ。狂屈は稍々近似したもの、予と汝とは近からざるものである。思ふに、眞實の理を知る者は言語に發せず、言語に發する者は眞實の理を知らぬものだ。それ故眞人は不言の教を行ふのである。抑々道は自然にして、言語を以て得られるものでな

317

く、又徳も自然であつて形跡を以て求められるものでない。世に謂ふ所の仁は博愛を務める所に作爲を待ち、義は分別裁制を主とする所に必ず虧損する點が生じ、又禮は凡て外面形式に托して、虚偽に流れることを免れぬ。されば老子(第三十八章)には「道を失つて後始めて徳が生じ、徳を失つて後始めて仁が生じ、更に仁を失つて後始めて義、義を失つて後始めて禮が生ずる。禮は道の實なき華であり、従つて虚偽の源となるから亂の始である」といひ、又同書(第四十八章)に「道を修むる者は、日に損し、損に損を重ねて遂に爲すことなきに至り是に於いて始めて天理自然に循ひ、翻つて爲さざることなきものとなる」と言つてある。今や一世の人は皆本來の朴を散じ、器物となつて彫琢の跡を存してゐる。されば道德の根本に復歸しようとしても容易ではあるまい。たゞ大人のみは禮義などに惑溺しないから、これが容易に出来る。それ人は生あれば必ず死が伴ふもので、生は死の徒伴であり、死は生の本始である。死生終始する所、何者によつて司配されて居るかは更にわからん。が恐らく生死は氣の聚散によつて起る現象であることだけは知れる。若し死生一如の理を知つて、死生を徒伴とする以上は、何も患ふる所はない。従つて萬物に於いても其理は一である。而るに人は

態々美惡を分別して、花の爛熳として美なるものをば、之を神奇とし、落花片々として地に在るに及んでは、之を臭腐とする。けれども臭腐は復た變じて神奇となり、神奇は復た化して臭腐となる。故に古語には「時空を通じて唯一氣のみ」と言うてある。真人は此理を悟るが故に、死生窮達禍福を以て分別を立てずして、専ら一を貴ぶのである。」

知「俺が無爲謂に問うた時、彼は答へなかつたが、それは答へざるに非ずして、答ふることを知らなかつたのである。次に狂屈に問へば、彼は中途にして言を斷つて告げなかつたが、それは告げざるに非ずして告げようとして遂に忘れたのである。そこで、今汝に問へば、汝はよく之を知つて居た。彼等よりも偉いと思はれるのに、却つて道に近くないといふは何ういふ譯か。」

黄「無爲謂を以て眞に是なりとするは、彼が無知の妙諦を得たるが爲であり、狂屈を以て道に近しいというたのは彼が未だ道の眞を得ず、言を以て告げんとして中途反照して告ぐべき言を忘れたからであり、予と汝とは終に道に近くないというのは、知を運らし理を考へ、言葉の上に乗られて、眞の道とは大分隔りがあるからである。」

狂屈は之を傳へ聞いて、さすが眞を穿つた言葉であると思つた。

天地は大美を具へ、無爲にして萬物その生を遂げるけれども、未だ言を發したることなく、四時は一定の明法あつて相代謝すれども、未だ評議したることなく、萬物は生成の理あれども、未だ説明を試みたことはない。至聖の人は能く此天地の美に原づき、萬物の理に通達するが故に作爲を弄しない。是即ち天地を觀て、その徳に合するの謂である。今、かの道は神明にして至精、一切萬有を生じ、一切萬有を化して相共に遷移するもので、この一切の物を離れて外に特別なる道がある譯でない。一切の死生方圓誰かその本を知る者があらう。而して萬有は飄然として生々化々して、古より常に異なることのないのは道に順ふが爲で、これ取りも直さず本である。全宇宙の大も道の内を離れず、秋毫の小も道に資つて始めて其體を成し、斯くて一切萬有は浮沈升降して常に變じ、常に新なものになつて行く。陰陽四時も運行止まずして各々その次序に循つて變轉するが、是皆道によつて然るのである。道は味然として無きが如くにして有り、油然として生氣を含み、形象を示さずして神通自在である。萬有は道に畜はれて而も其の然る所以を知らぬ。畢竟道は所謂宇宙萬有の根本である。此理を悟る者こそ眞に自然を觀る

といふべきである。

醫缺が道を被衣に問うた時、被衣は答へていつた。

「汝宜しく汝の形容を正しくし、汝の視線を一にして、妄に動き妄に視ることのないやうにせよ。さすれば自然の和氣が生ずるであらう。又汝の知慮を去り、汝の意度を一にして、妄に頭を勞しないやうにせよ。然らば汝の心虚靜にして、精神が來り舍るであらう。而して深玄の徳は汝を美にし、無極の大道は汝の心中に住するであらう。汝無知に歸つて直視すること新生の曠（まひら）の如くにして、敢てその然る所以を問ひ求むることなかれ。」

その言葉の未だ終らぬ中に醫缺は最う居睡を始めてゐたので、被衣は大に悦んで、歌を歌ひながら去つた。その歌に「體は枯骸の如く、心は死灰の如く、而も眞實の理を知つて自ら其智を矜持せず、昧々晦々として心を忘れ智を忘れて、與に謀るべからざる者、これは果して何人か。凡人の得て識る所ではない」と。

舜はかつて丞といふ人に問うたことがある。

舜「道は己が身に有することの出来るものか。」

丞「汝の身さへ實は汝の有する所でないのにか、かの道を有することが出来ようぞ。」
舜「吾身が果して吾の有する所でないとするならば、何者が之を有するのか。」

丞「それは天地陰陽の氣が積聚して假に汝の身を形成して居るに過ぎぬ。従つて生は汝の有に非ずして、陰陽の二氣相和して生じたものであり、性命も亦汝の有ではなくて、自然の理に循つて賦與されたものである。父死して子代り、子死して孫繼ぎ、世々相代ること蟬蛻と異なる所はない。故に孫といひ、子といふものも汝の有ではなくして自然に造られた蛻である。されば行けども往く所を知らず、處れども持する所を知らず、食へども味ふ所を知らず、是れ皆自ら爲すに非ずして別に爲さしむるものがあるので、それは即ち天地健動の氣に外ならぬ。汝の一身を擧げて、皆汝の有でないのに、又何うしてかの道に執着して、之を汝の私有にすることが出来よう。」

孔子はかつて老子に向つて道を問うた。

孔「今日は間ですから、篤とあの究竟の道に就いて承りたく御座います。」

老「汝、究竟の道を知らんとせば、先づ齋戒して心の滯りを通じ、精神を洗滌し、知慮を屏去

せよ。それ道は玄妙にして言語に依つて現はされるものではないが、汝の爲に大體を語らう。抑々昭々として見るべきものは冥々の裡より生じ、一切の物は自然より生じ、精神は本源の道より生じ、形體は兩性の精より生じ、かくして一切の物は形を具へて相生する。而して人獸は胎生し、鳥魚は卵生する。その生れ來るも迹なくして何處より出づるかを知らず、その死に往くも際なくして何處に止まるかを知らず、門もなく、房もなく、廣大にして四達自在である。道に遇うて自然に合する者は肢體強健にして、思慮通達、耳目聰明である。その心を用ふること無心なるが故に勞せず、送迎せずして萬境に應ずるが故に機に臨んで自在である。道は極めて尊貴なもので、天も之を得ざれば高からず、地も之を得ざれば廣からず、日月も之を得ざれば運行せず、萬物も之を得ざれば昌榮せず、これすべて道の功用である。尙ほ道の言ひ表はし難いことは人間の博知も辯慧も俱にその甲斐はない。故に悟道の人はその智辯を斷棄して之を自然に附するのである。惟々それ大中至正、損益を超越し、而して保つ所我に在つて外境の事物に動かされないといふのは、正に悟道者の事である。淵々として海の如く、巍々として高大無窮、終るかと思へば復た始まり、萬物を運載して各々之を裁量し

て乏しくないのは、君子の道とする所で、そは外に在るに非ずして己に在るのである。萬物皆往きて之に資つて、己常に缺くる所を知らざるもの即ち道であらう。されば道を知る人は陰陽を超越して、死生有無に繫縛されず、天地の間に據つて、姑く人の形を假りて將に事物皆無の初めに反らんとするのである。根本に立つて觀れば生は聚氣の生ずる所、たゞ一時の現象に過ぎずして忽ち宗本即ち無に反るので、その間壽夭の別あるも相去ること幾何もない。人生百年といふも亦須臾に過ぎず、何も歎々して堯を是とし、桀を非とするが如き區々の論を爲すに及ぶまい。草木果蔬にも猶ほ夫々然るべき理があると同じく人には人倫がある。人倫は固より煩雜といへども人間を秩序立てる所以のもので、當然免るべからざるものである。故に道を知る者はその遇ふ所に順つて逆はず、その過ぎ去る所に任せて無理に守らず、よく調和偶合して之に應ずるのである。これ亦帝王の興起する所以に外ならぬ。人が天地の間に生けるは、白駒の隙を過ぐると等しく忽然たるのみ。或は生じ、或は死し、反復循環して止まない。而るに生物はその死を哀しみ、人間も亦之を悲しむが、こは死生に束縛せられて未だ脱し得ないものである。此束縛を脱して宛轉變化し、魂魄將に去らんとして、身之とともに

息を引き取つて、そこで始めて無に大歸するのである。不形より形を生じ、形より不形となるのは人の同じく知る卑近の事で、道に至らんとする達人の務むる所ではない。此亦衆人の均しく論ずる所であるが、道に至る者はそんなことはしない。口に彼此論ずる者は未だ至らないのである。道の本體は見聞言説を絶したもので、目を正しうして明視せんとしても眞に値ふことは出來ず、又辯ずるは黙するに若かず、耳を傾けて聽くは、之を塞ぎて聞かざるに若かず、すべて心神奔逐する所なくして自然道に合ふを大得と謂ふのである。」

次に東郭子と莊子との問答。

東「謂ふ所の道は何處に在るか。」

莊「道は何處にも存在しない所はなし。」

東「何處に在るかをはつきり指して貫はねば得心がならぬ。」

莊「螻や蟻にも在る。」

東「そんな卑しいものに？」

莊「稊稗にも在る。」

東「そんな一層卑しいものに？」

莊「瓦甃にも在る。」

東「益々以て卑しいものに？」

莊「糞便にも在る。」

東郭子は最う呆れて何とも應へなかつた。莊子は更に語を繼いでいつた。

莊「君の問は固より道の本質に及んで居らぬから従つて予の答も亦末を擧げたのである。たとへば飲酒禮の役人が禮に用ふる豕の肥瘠を市場の監督者に問ふ場合に、監督者が豕の脚部を踐んで、其肥瘠を答へると同じである。脚部の肥えてるものは他の部分もすべて肥えてるこゝとがわかるやうに、道が卑しい糞便に在ることを知らば、貴きものに在ることは言はずして明かであらう。されば道は一定の物に限つて求めてはならぬ。何物にも在らざるはない。若し之を一物に求むれば却つて道を知ることが出来ぬ。全宇宙何物も道を離れて存在するものなく、又道は萬有を逃れて別に獨立するものではなくて、兩者は相即不離のものである。究竟の道とは此の如きもの、大言も亦然りである。例へば周、徧、咸の三字はその名異なるも

その實は同一で、皆道の徧在を表はす語である。試に汝と共に虚無の郷に遊んで彼此物我の別を去り、合同して相論じて見よう。此域に達すれば道と冥合するを以て終始窮極するところ無く、又何等爲すところが無い。故に恬澹安靜、寂寞清虚調和間逸にして、心未だ嘗て妄に動かざるを以て志自ら寂寥である。心の不動といふは心が絶対に働かないといふ意味ではなく、物に順つて自然に動くのみにして、吾先づ動きて物に應ずるのでないことを謂ふのである。従つて心苟も外に往くことなく、又往來することあるも變に應じ物に隨つて移り、一事一物を執して此に止まり終ることなく、心は至大虚無の域に彷徨し、知は大道の中に入りて自適し、その往く所を恣にして無窮に合するのである。それ道は一切の事物を事物として之を主宰する。而も事物と離れて別に一個の道といふものがあるのではない。故に事物と道とは彼我の際りはない。但々事物相互の間には夫々彼此の分があつて相際るので、これを物際と謂ふ。道と事物とは相同じからざること明かであるが、道の大を爲すは、其の能く事物を主宰するに在り、而して事物は其れ自ら事物として存在すること能はずして必ず道に由るのである。されば道の不際も其生ずる所の事物に依つて見れば際、事物の際も道に由りて

生ずる點より見れば不際である。斯くて道と事物と又冥合して一となる。事物を綜貫する玄妙の理法を道と稱し、道は是に於いて其大を爲す。事物には盈虚衰殺本末積散等の現象が起つて來るが、それは決して事物それ自ら爲すことではなくて、實に自然の大道の然らしむる所に外ならぬのである。」

芻荷甘と神農と同じく老龍吉といふ人を師として學んだ。或る日、神農が几に倚り、戸を閉ぢて晝寢をして居ると、芻荷甘が日中に戸を推し開いて入つて來て老龍の死を告げた。神農は几に倚り杖を把つて起つたが、やがて杖を投げ出して笑ひながら言つた。

神「老龍は予の僻陋にしてみだりかはいふことを知るが故に予を棄て、死んだのだ。老龍は予を啓發すべき大言を示さずして死んで了つたか。さても歎かはいふことだ。」
芻荷甘といふ者が老龍の家を弔問してこの事を聞いて言ふには、

「それ道を體得する者は、天下の君子の歸服して宗とする所である。今神農は道に於いて毫も得る所無くして、而も猶ほ老龍が大言を藏して死んだことを知る程なれば、況して道を體した人に在つては見る所更に高いのであらう。道は聲形の視聽し得る所でない。人、道を論

じて之を冥々と名けるが、冥々たる以上、本來言説を以て論ずることの出來ぬ筈である。故に論ずれば最早眞の道ではなくなる。」

泰清は無窮、無爲、無始等に對つて道を質さんとし、先づ無窮に問うた。

泰「君は道を知つてゐるか。」

無「自分は知らぬ。」

次に無爲に問へば、

無「自分は道を知つてゐる。」

泰「君が道を知る所、何かきまつたものがあるか。」

無「ある。」

泰「それは如何。」

無「道は貴くしては帝王となり、賤しくしては僕隸となり、約聚しては生となり、分散しては死となり、貴賤約散、一に偏することはない。自分は道を斯う心得てゐる。」

泰清は此言を以て無始に問うた。

泰「是の如く兩者相異なる場合に、無窮の道を知らざると、無爲の道を知るとは、孰れか是にして孰れか非と思ふか。」

無「知らざるは深く、知るは浅い。知らざるは理に合つて内、知るは道に背いて外である。」

是に於いて泰清は其返答の中途歎息して言ふに、

泰「知らざるは反つて知るもの、知るは反つて知らざるものであらうか。誰か此不知の知たるを知る者があらう。」

無「道は聞くべからざるものである。聞き得るものは道ではない。又眼を以て見、言を以て説き得るものは、すべて眞の道ではない。一切の物を形つて、而も自らは形を有することなく、従つて名を附すべきものでないことがわかる。」

道の何たるかを問はれた場合に、之に應ふる者は道知らないものである。道を問ふ者と雖も、亦未だ之を聞くことを得ない。畢竟、道は問答で解るものではない。問ふべからざるものを強ひて問へば、問ふ者必ず窮し、應ふべからざるものを強ひて應ふるは、中心に道無きものである。中心に道無くして強ひて言説によつて道を求むる者は、外は宇宙の道に由つて

生ずる所以を察せず、内は道初本來無なる所以を知らず、従つて至高の域に登り、大虚の地に遊んで、道と冥合することは到底出来ないのである。」

光曜が無有に對つて問うた。

「君は有あるか、將た有なきか。」

無有は何の返事もしなかつたので、その状貌を熟視するに、如何にも奥ゆかしさうで、終日視つめても見えず、耳を傾けても聞えず、手で搏つことも出来なかつた。光曜は歎じて言つた。

「至れるかな。誰か能く此妙境に入る者ぞ。予は無といふものゝあることは悟り得たが、未だその無も無いといふことを悟ることが出来ぬ。有無一切有ること無しといふことを悟り得るは、玄徳の人でなければ出来ない。予の如き有だとか無だとかいふ言葉に拘つて居るやうでは到底覺束ない。」

大司馬の下役の帶鉤を鍛ふる者、年八十にして益々妙技を得て、毫も過失がなかつた。大司馬は之に向つて問うた。

大「お前のそんなに巧みなのは、やはり相當の道があるのか。」

下「私は心に守る所があります。私は二十歳の頃から此仕事を好んで、他物には目も觸れず唯々帯鉤のみを觀て居ました。」

即ちその技術を用ふる場合に當つて、心を外に馳せず、專念虚心、帶鉤に集注して、道の自然を假りて、老の身に至るまで、之を一事に用ふることを得たるが故に、斯くまで巧妙になつた譯である。たゞ一小技術すら此の如くであるのに、況して道を體して自然に合致すれば、用ひざる所なく、一切の物皆之に資らざるはないのである。

冉求是或る日孔子に向つて問答を始めた。

冉「未だ天地の創造されざる以前の事が知れませうか。」

孔「知れる。古もやはり今と變りはない。」

冉求是再び問ふことを得ずして退き、その翌日復た見えて問うた。

冉「昨日私が天地創造以前の事が解るか何うかお尋ねしました時、先生は、知れる、古も今も異ひはないと仰せられました。その時は私は昭然としてよく解りましたが、今日は昧然として何が何だか譯が解らぬやうになりました。これは一體何うしたものでせうか。」

孔「昨日の昭然たるは心虚にして神靈なる者先づ之を受けて悟了したのである。今日の昧然たるは、要らぬ不神の者を以て之を考へ求める爲であらう。まだ天地の無い先に於いては、古もなく、今もなく、始もなく、終もない。未だ子孫もないのに、ありとせば承知が出来ぬやうに、無いものを有るやうに考へるから譯が解らぬことになるのだ。」

冉求是何とも對へなかつた。孔子更に語を繼いだ。

孔「止めよ。汝今暫く口を開くこと勿れ。試に生死に就いて言ふに、生より死を觀れば、死を生とすることは出来ず、又死より生を觀れば、生を死とすることは出来ず、生は即ち生、死は即ち死、兩者相待つて立つものである。而して死生には時節があるから吾人は自然に順つて之を待てばよからう。而も生死を貫いて一體とする所がある。天地に先つて生ずる者ありといふは、果して物といふべきものであらうか。否、天地に先つて物の生ずべき理はない。たゞ天地に先つて在るものは、物を物として主宰する所の者即ち道に外ならぬ。道は物ではなく、死生古今終始はない。物は物より出づるが故に物に先つことは出来ない。即ち天地といふ物があつて後に始めて一切萬有は生じて來たのである。已に物あれば又物を生じ、斯く

て一切萬有は生々已むことがない。而して之を主宰するものは言ふ迄もなく道そのものである。聖人の人を愛して已むことなきも、亦自然の道に従つて、其の生々已まざるに倣つたものである。」

顔回はかつて孔子に向つて問うた。

顔「私は嘗て先生から承つたことがあります。それは、悟道の人は往を送らず來を迎へずといふことでしたが、何うしたらばこの送らず迎へざる無心の境に遊ぶことが出来ますか。」

孔「古の人は外境の事物に心無くして、その爲すがまゝに順ふが故に外は化し、心を以て外境の事物を送迎せざるが故に内は化することがない。之に反して今の人は、心を以て事物を逐ふが故に内化し、己を以て事物を制せんとするが故に外化しないのである。事物とともに化する者は事物に順ふのみであるから、外化といふも一面より觀て不化とも謂へる。従つて内外俱に化せざるものといひ得る。しかし要するに化もなく不化もなく、唯自然に任すのみである。故に事物の爲に心を勞して之と争ふこともなければ、又事物を制して勝を求めるといふこともしない。かの稀韋氏は苑囿を造り、自然の天地に樂しめる鳥獸を捕へて、こゝに畜

ひ、己の樂みに供したが、猶ほ人と樂みを與にする所があつた。次に黄帝は圃畦を作つて、蔬菜を藝ゑたが、人工既に多く、亦人と與にしないやうになつた。舜や湯武に至つては妄に壯大なる宮室を營み、益々多く人力を使つて、之を己の私有となし、他人が自由に出入することをすら禁じて了つた。更に當時の所謂君子、中にも儒墨の師の如きに至つては、己の主義を以て人を律せんとし、只管己の主義を是として人の主義を非議し、お互に擯斥し合つて居る。斯く段々現代に近づくにつれて愈々内化して偏執の心を強めて來た。況して現代人は言ふ迄もない。聖人は事物の間に處して、それを傷ふことなく、従つて事物も亦之を傷ふことは出来ない。唯々傷ふ所なき者にして始めてよく人と與に相應することを得るのである。山林高壤は人の遊樂する所、人は此處に遊んで欣然として樂しむけれども、其樂未だ畢らざるに、最早哀愁がやつて來る。外境の事物に依つて哀樂を爲す者は常にこの通りで、哀樂の去來に従つて悲喜して、之を禦ぐことも、止めることも出来ぬ。これは即ち内化して外化すること能はざるが爲で、誠に殘念なことだ。畢竟人はたゞ哀樂の逆旅たるに過ぎぬ。人は其知の及ぶ所は、之を知れども、其知の及ばざる所は、之を知ること能はず、其能くする所は、

雜篇二十三 庚桑楚

雜篇は内外の二篇を承けて言を立てたものである。而してこの篇は往々内篇の語を擧げ、人をして一の化せざるものがあつて形氣の外に超然として存することを知らしめたのである。

老子の弟子に庚桑楚といふ者があつて、老子の道の一偏を學び得て、北方畏壘の山に住んで居たが、其僕の賢明にして知を飾る者は去り、其婢の慈柔にして仁に矜る者は遠ざけ、鈍朴な者とともに居り、外貌を繕はぬ者を召し使つてゐた。三年を経て畏壘の地大に豊熟したので、其處の人民は相與に語り合つて言うた。

「庚桑君の始めて來られた時は、其容貌が如何にもさつぱりして凡人と異ふ所があるやうに感じたが、今其功を計ると、日を以てすれば稱するに足らぬやうであるが、歳を以て計れば其功餘りある程である。彼はまづ聖人と謂つてよい人であらう。吾々はともに彼を尊崇して

君と仰がうではないか。」

庚桑子はこの事を聞いて、南面して塞ぎ込んで居たので、弟子どもは不審に思つた。庚桑子は之を諭していふ。

庚「汝等何故に予を異しむか。それ春氣發して百草生じ、秋に至れば萬物が成熟する。春生秋成は自ら勝手に起るのでなくて、自然の大道に由つて行はるゝ必然の事象である。予の聞く所に據れば、悟道の人は、その身を方丈の室に藏めて、寂然として爲すことなく、百姓も亦其天性に率ひ、知愚賢不肖の別を立て、誰に歸依しようとも考へず、一切相忘れて大道に化するものである。然るに今畏壘の小民どもが相謀つて、予を禮して賢と爲し、予を尊んで君と仰がうとしてゐる所を見れば、予の道を修むること猶淺くして人の目に付き、標的にされるのである。予は老子の道を學びながら、老子の言と合致することが出来ないで、自ら恥ぢて塞ぎ込んで居るのである。」

弟子達は更に進んで質問をした。

弟「いえ。さうでは御座いますまい。かの尋常の狭い溝にては大魚は其體を動かす餘地もない

けれど、鯢や鱈などは自由に暴れ廻り、又六七尺の丘陵にては、巨獸は其軀を匿すことも出来ぬが、妖狐は之を幸として、其所に威張つて居るやうに、すべて地小なれば、それ相應の小物がその主となるものであります。かの賢者を尊び能者に授け、社會の善道福利を先にするは、古の堯舜も同じでせう。固より畏壘の如き狭小の地に於いては、民の智も小ですから、高大を知ること出来ません。堯舜の尊ばれたのも民の見る所に由るのですから先生も亦畏壘の民の見る所に従はれたらよいのです。」

庚「汝等もつと前へ出よ。軍を容れる程の大獸も獨り山を離れて里に出れば網罟の患を免れず、吞舟の大魚も流蕩して水を失へば、蟻さへも之を苦しめる。それ故に鳥獸は高きを求めて厭はず、魚鱉は深きを求めて厭はず、各々身を守つて自ら全うせんことを圖るものである。況して身體生命を全うする人は、その身を藏して、飽くまで深玄幽渺を求めるのは言ふ迄もない。思ふにかの堯舜の二人は、居る所極めて小にして身を藏するに足らず、又何等稱揚するに足らぬ者である。堯舜の智辯を弄するは、譬へば垣牆を穿つて態々蓬草を植ゑつけるやうなもので、其處置を誤つてゐること甚しい。且又髪を擇んで櫛り、米を數へて炊ぐが如く、

詰らぬことにせしめてゐる。あんな調子では眞の濟世利民といふことは思ひも寄らぬ。

賢人を拔擢すれば民は必ず軋り争ひ、智者を任用すれば、民は必ず盗み合ふやうになる。此等は皆民をして淳厚ならしむるに足らずして、却つて民愈々競うて利に走り、その極、遂に子にして父を害ひ、臣として君を弑し、白晝に盜を爲し、日中に垣を破つて忍び込むやうになる。予、汝等に語る。大亂の本は必ず堯舜の間に生じて、其の末は千歳後に存在する。

而して千歳の後には其弊益々甚しく、必ず人と人と相食むやうになるであらう。」

時に、弟子の一人南榮絳といふ者、驚いたやうに坐を正して問うた。

南「私の如きは已に老境に入つた者ですが、何處で學業を受けて、斯かる藏身深渺の言を實現すべきでせうか。」

庚「汝の身體生命を安全に保持して傷ふことなく、且つ營々として思慮を運らすこと勿れ。斯くすること三年ならば、其の言を實現することが出来よう。」

南「目、耳、心は皆同一身體の一部であつて、その身體に對する關係は本來異なる所はない譯であるが、唯々閉塞するの故を以て盲者は見ることを得ず、聾者は聞くことを得ず、狂者

は物事を會得することが出来ないであります。今、私の目耳心は既に閉づる所なく、共に辟けて明徹してゐる筈であるのに、猶ほ何等か之を隔つるものがあるが爲か、道を求めて未だ悟ることが出来ません。只今先生の御教へを聴きました。ひたすら道に達するべく努力致しませう。」

庚「予が汝に告ぐる辭は最う盡きた。されど更に一言すれば、かの小蜂は豆に居る青蟲を化育すること能はず、又體の小さい越の鶏は鵝卵を孵化し得ざるも、體の大きい魯の鶏はこれが出る。魯鶏と越鶏とは卵を孵化するといふ性能は同じであるが、斯く能と不能とあるは、固よりその才に大小があるからである。今予の才は小にして、汝を教化するに足らぬ。汝は今から南の方老子の許に參つて教を受けるが宜からう。」

南榮昧は糧食を負ひ、七日七夜を費して老子の許に往つた。

老「汝は庚桑楚の所から來たか。」

南「はう。」

老「汝は何故そんなに衆くの者共と一緒に來たか。」

南榮昧は此意を悟らず、異しき驚いて後を振り向いた。老子は更に語を繼ぐ。

老「汝は予の今謂うたことが解らぬか。」

南榮昧は首を低れて愧ぢ、やがて仰ぎ歎じていふ。

南「今私は先生の御詞をきいて、茫然として答ふる所を忘れて了ひ、私から御尋ねすることを、もつひ失念しました。」

老「汝の問はんとする所は何だ？」

南「若し不知であれば、社會の人はまるで馬鹿にするし、若し又知であれば反つて我軀を愁へしめるでせう。更に不仁なれば人を害し、仁なれば反つて我身を苦しめ、不義なれば人を傷ひ、義なれば反つて自己を惱ますであります。斯く彼此矛盾するのでありますが、何うすれば之を切抜けて甘くゆくやうになるでせうか。此三者は私の常に患ふる所であります。願はくは私の師庚桑楚の手引に因つて御教を垂れ給へ。」

老「俺は先刻汝の眉睫を相て、早くも汝の心がまだ道に入つて居らぬのを知つたが、今汝の言によつて益々それが確實になつた。汝が區々として精神を勞するさまは、小兒が父母を喪つ

た時、竿を掲げて之を海中に探り求めると一般である。汝は本心を失つた者で憫として歸する所を知らない。此の如くにして本然の性情に立復らうと欲しても入るべき門を得る由がない。憐むべき哉。」

南榮誅は老子に請うて學舎に入り、沈思默考して、其是とする所を求め、其非とする所を去らんとして、十日間苦しんだ後再び老子に逢つた。

老「汝自らは是を求め、非を去り、心身を洒濯して果して其功精熟したか、何うか。汝の容子を見るに鬱々として未だ開悟せず、中心猶ほ思慮の弊がある。それ外に耳目を用ひて聲色を逐ふ者は、事物繁多なるが故に、急に之を捕へて奔馳を防がんとするも及ばざれば、將に内に閉ぢて其欲を制するやうにし、心を以て是非に循ふ者は、事物綢繆して徐に之を捉へんとするも不可能なれば、將に外に閉ぢて其耳目を制するやうにするの外はない。内外に束縛せらるゝ者は耳目外に眩惑し、心内に流蕩し、縦し道德を具ふる者と雖も長く堪へ得る所でない。況して道に依倣して行ひ、未だ純熟の地位に至らざる者に於いては猶更である。」

南「今、村に病人があつて、村人之を見舞ふ時に、病人自ら其容態を述べ得る程ならば、其病

はまだ甚しくはないので、十分治する見込がありますが、私の如きは大道を聞けば益々惑ひ、宛も藥を飲んで更に病勢を加へたやうなものであります。惟々願はくは心性の上に於ける衛生の常法を教へ給へ。」

老「衛生の常法とは、即ち、純一の氣を守り、天稟の徳を失ふことなく、卜占することなくして能く吉凶必然の理を知り、能く止まるを知り、能く足るを知り、外を務めずして内を務め、何物にも累らはさるゝことなく、無知無心にして赤子の如く飾らず、偽らざるやうにせよ。赤子は終日泣けども聲嘔れざるは淳和の至りであり、終日手を握れども硬くならぬのは、その徳自然に合するが故であり、終日視れども瞬せざるは、心偏に外境に移らざるが爲である。斯様に全く無心にして、行けども往く所を知らず、居れども爲す所を知らず、一切念慮を忘れて、専ら外境に随順し、毫も忤ふ所なく、波の間に一推移つてゆくこと、是れ即ち衛生の常法である。」

南「然らば究竟の大道を悟つた至人の徳も此に止まるものですか。」
老「否。こは猶ほ學んで悟る者で、譬へば春和の光を待つて始めて氷凍の釋けると同じく、未

だ全くの自然には及ばぬ。かの至人は衆人と交つて社會に活き、衆人と共に自然を楽しみ、日々人物利害の中に在れども、共に心を擾すことなく、且つともに怪異を爲さず、ともに謀圖を爲さず、たゞ無爲にして、累を離れ、知を去り、悠々として其間に推移するのである。これ謂はゆる衛生の常法に外ならぬ。」

南「それでは此が究竟の處ですか。」

老「まだ然うはゆかぬ。俺は已に汝に告げて、よく赤子の如くなれと言つたが、赤子は動けども爲す所を知らず、行けども往く所を知らず、身は枯木の枝の如く、心は死灰の如くである。斯かる者は超然として禍福の外に脱却してゐる。何うして人災など受ける筈があらう。」

それ心宇泰然として定まれる者は、自然の光輝を發して事物を照すものである。此の如きは眞に人として自覺したもので、若し修養して此境地に至れば、全く自然と同じく恒久にして人は之に歸し、天は之を助ける。天人の俱に贊する所、之を天民と謂ひ、又天子と謂ふ。その社會的地位は上下異なることあるも、その徳に於いては何等變る所はない。今、社會の人が學、行、辯を爲すや皆強ひて穿鑿して、學ぶ能はず、行ふ能はず、辯する能はざる所を求めんとし

て努力するが、知若し知る能はざる所に至つて止まり、自然に順はゞ是れ究竟である。此に従はずして強ひて知らうとすれば自然に敗れるの外はない。

自ら萬物の理を備へて以て生の自然に順ひ、知を藏して、事物に接せざる前に豫め處かるとをせず、事物に應じて心を生じ、人に對して中心の敬を捧げる。而も猶ほ萬惡の振掛つて來るのは、それは必然の天命であつて、人力の爲す所ではない。斯くて時に安んじ、命を悟れば萬惡至るも己が渾然大成の徳を亂るに足らず、又すべての外境事物も己が靈府を侵すことは出來ぬ。而して靈府には主持する所のあるがある。然し吾自ら主持するのではなく、従つて其主たる所を知らない。若し吾自ら主持せば不可である。それは吾自ら主持する所あれば、中心の至誠なくして心意妄に發作し、而もその度毎に理を失ひ、紛々の世事、靈府に入りて止まらず、出入時なく、常に擾れて眞實を得ないのである。凡そ顯明の中に於いて不善を爲す者は、人之を誅することが出來、又幽暗の裡に於いて不善を爲す者は、鬼神之を罰することが出來、幽明兩つながら決して逃れ得るものでない。人よく之を明知し、幽明ともに心に愧づる所無き者にして始めて能く獨行して懼れざるものである。己が分内に自適する者は獨行して名迹なく、己が分外

に遊ぶ者は、期する所、己を損して物の爲にするに在る。而して前者は常に本來の光輝を保ち後者は己に無きものを借り取らんとする商賈に過ぎぬ。且つ後者は道に順はずして強ひて自ら企て高くするものであるが、世人は之を見て眞に高しと爲すのである。衆とともに終始する者は衆之に歸入して自他合一冥符する。他と苟且に相交渉する者は、外境に逐はれて營々するが故に其身の守りを失つて、己れ自らをも容れることが出来ぬ。況して他を包容するなどは及びもつかぬことである。されば人之に親しむ者はなく、従つて竟に人と相背き疎隔して了ふやうになる。吾身を殘ふものは一念不慎の志より憎ましきはなく、鄧鏜の利劍も及ぶ所でない。又吾身の賊は陰陽より大なるはなく、天地廣しと雖も逃るべき處はない。しかし、本來より言へば陰陽が吾身を賊ふ譯ではなくて、貪慾の心其れ自らの然らしむる所である。

道は成毀善惡等すべて相待の分を通じて一となすものである。一方に成れば一方に毀れ、成毀相待つて始めて備はることを知らずして、其一方を持して備はれるものと爲さんとするが故に分を惡み、又不備を以て備と爲さんとするが故に備を惡むのである。道を知らざる者は私見に執著し、己の内より飛出して反るを忘れ、久しからずして死に至るものである。外を逐うて

得る所なければ己に反るも、若し何物か得る所あればそれに氣を取られて了ふ。これ所謂死滅の因を得たる者に外ならぬ。此の如き者は己に其性を滅せるが故に呼吸だけはしてゐても死者と異ならない。人能く有形を以て無形の道に似る者は、自然と冥合して之に順ふが故に安定である。生じて本く所あり、死して歸する所あるも其形迹を知らず、空間は有なるも、而も無窮にして方所なく、時間はたゞ永劫にして本末なく、時空ともに久遠である。一切萬有は永劫に循環しつゝ無窮の空間に存在する。而して其現出するや、必ず基く所あるも其出で來る竅を窺ふことは出来ぬ。かくて一切の物が生死出入するは必ずや道なる自然の門に由るが故に、之を天門と稱する。天門は無にしてすべての有の母であり、而して有無を綜べて一にする。畢無有は皆無より出づるものにして、無は一切の根本である。聖人は此に見る所あつて、心知を深渺に藏め、その自然に任せ、事を事として區々たる相待是非の間にさまよふ如きは其の爲さざる所である。

古の人は其知大に至る所があつて、その度を見るに、第一は未だ始より物あらざる所謂無物の先に到達して、生もなければ死もない者であつて、至れり、盡せり、此上もないものである。

其次は物ありと爲す者で、生を以て喪とし、死を以て本に反ると觀じて居る。然しこは已に死生を對立せしめ、分別した者である。又其次の者は、太始は無なれども已に生といふものが出て来て、それは又忽焉として死にかはると考へて居る。是れ有ること無きを以て首とし、生を以て中とし、死を以て尾とするものである。世人誰か有無死生の不二なるを知つて、之を修め守る者ぞ。若し有らば予は之と親友たらんと欲するも斯かる人は眞に得難い。今上の三者の説は死生に關して見解同じからざるも是非を胸中に無くするに於いては一である。恰も諸侯から分れた公族の如きもので、例へば、均しく楚の公族の中にて昭氏と景氏とは職任を以て顯はれ、甲氏は封土を以て著はるゝといふやうに、末別れて一にあらざるも、本は即ち不二である。

生は氣の聚合に過ぎぬ。即ち人は皆一氣より生ずるものである。然るに強ひて披然として分別し、己を是として人を非とし、是非轉移して定まりない。是非本來辯すべきものでなく、何れが是か何れが非か到底不可解である。かの臘祭に犠牲を供へる者は、牛の臘とろろや足指を夫々解き離して陳列するが、然し要するに均しく牛の體に外ならぬ。又家室を觀る者は座敷や祖廟を觀て、更に休憩室に行つて觀るので、室には夫々別のものもあるも合せていへば、均しく一家の室

に外ならぬ。是非の定まらざるは猶ほ此の如きものである。而して是非の定まらざるは是非に拘はるに因り、是非に拘はるは生を本とし、知を師とするに因るのである。又名實の分も己を本とし、人をして己の節度に聽從せしめんとするに基いてゐる。既に斯く自己に執着するが故に、自己の節度を立てんが爲には死を賭して甘んじ、而して用不用を以て知愚と爲し、窮達を以て榮辱と心得へて居る。現代の人は皆是れである。宛も蟬と鳩とが大鵬の圖南を笑ふの類にひとしく、各々自ら其の是とする所を是として人を非とするものである。

今、誤つて往來の市人の足を踏めば、自ら不注意をお詫するが、若し兄が弟の足を踏む時には唯々撫でゝやるだけでお詫を言ふといふことはない。更に父母は撫でもせず、その儘に濟して了ふのは情極めて親しきが爲である。されば至極の禮は自他の觀念なくして自然に次序があり、至極の義は事物の宜しきを求めずして自然に宜しきに合ひ、至極の知は謀慮を用ひずして自然に覺り、至極の仁は特に親しむ所なくして、汎く愛し、至極の信は金玉の符を待たずして自然に誠實である。

心志の悖謬を解き、道德の妨累を除いて自然に任すべきである。貴、富、權、威、名、利の

六つの者は志を亂し、容、行、色、理、氣、意の六つの者は心を謬らせ、憎、愛、喜、怒、哀、樂の六つの者は徳を累はし、去、就、取、與、知、能の六つの者は道を塞ぐものである。以上の事項が胸中に蕩亂しなければ心神おのづから正しく、正しければ靜、靜なれば明、明なれば虚、虚なれば恬淡無爲にして、而も事物に應じて爲さざるはないのである。

道は自然の理にして、徳の欽仰する所である。生々は天地の大徳なるが故に、一切の物を生々化育するは、その盛徳の光華である。而して本然の性は生命活動の本質で、それが發動して所謂爲を生ずる。爲すことあれば、漸々性を離れて人爲の偽に陷るので、之を失と謂ふ。知は事物と相接して謀謨する。されど眞知は知らざる所に止まること恰も赤子の物を直視して分別を起さざると同じである。その動くは皆己むを得ずして後にするもので、之を徳といひ、又動いて常に眞我に非るはないので、之を治といふ。徳と我とは内在的であり、動と治とは外在的であつて其名稱は相反するが如きも實は内外相應するものである。

羿は弓の名人で、微物を射中てることには巧みなるも、人をして己を譽めしめないことには拙である。所謂聖人は自然に合致するには巧みなるも、天下の名を逃れ得ざるが故に、人に對し

ては拙である。天人ともに巧みなるものは唯々全徳の人のみ能くし得る所である。かの蟲などはただ微物に過ぎないのであるが、蜘蛛の網を張り、蜂蟻の巢を作るが如きは、皆一に天稟の能にして私知を以て作爲する所ではない。全徳の人は己が天分を嫌惡せず、又人の天に稟くる所を嫌惡せず、天人の別を認めずしてすべて之を自然に任すのである。羿が雀を見れば必ず射落すのは、弓矢の威を以て雀を畏れしめるからである。けれども弓矢で捕り得るものには限りがあつて、宇宙を以て籠と爲し、雀皆其中に入つて一として逃れることのないには及ばぬ。斯るが故に、殷の湯王は伊尹の性に循ひ、料理番として之をとり入れ、秦の穆公は五羊の皮を以て百里奚をとり入れて了つた。若し其好む所の性に循はざれば何者もとり入れ得るものではない。足斬りの刑に處せられた者が裝飾を去つて用ひないのは、世間の毀譽を外にして居るからであり、又徒刑に遇つた者が高處に登つても懼れないのは、最早死生を懸念してゐないからである。道を修むるに、反復習熟して、眞に我が爲にし、道を人に餽ることなく、人を忘れて、こゝに自己に在るものが純全なものになる。されば敬侮によつて情を亂して喜怒哀楽はないのは、惟々自然の和に合する者にして始めて出来ることである。怒りて而も怒らなければ、是れ怒自

然に出で、有心の怒でなく、爲して而も爲さざれば、是れ爲自然に出で、有心の爲ではなく、無爲の爲、即ち已むを得ざるに出で、自然に爲すものなるが故に、爲して皆理に當るのである。故に靜ならんと欲せば其氣を平にし、神を保たんと欲せば其心を順にして事物に忤ふことなく、爲して其當を得んと欲せば止むことを得ず自然に動くといふ法に縁るのが、本當の聖人の道である。

雜篇二十四 徐無鬼

この篇は内篇の餘蘊を盡して言外の意を示したもので、前半は詮理精到、後半は變幻斷續して奇を争ひ、怪を献するが如く、捕捉すべからざるものがある。殊に此原文は隱晦にして了解し難い語句が多い。

徐無鬼が女商の手を経て魏の武侯に見えた時、武侯は之を勞つて言うた。

武「先生は久しく山林に勤苦して憊れた爲に寡人に會ひに來られたのか。」

徐「私の方から君を勞はうと存じます。君が何も私を勞はれることはありません。君若し嗜欲を満足し、好惡の情を増長すれば性命の眞が憊れるでせう。又若し、嗜欲を黜け、好惡の情を抑ふれば、耳目樂しむ所なくして反つて憊れるでせう。それ故に私は君を勞はうとして居る次第です。」

武侯は悵然として一言も對へなかつた。やゝ暫くして徐無鬼は更に語を繼いだ。

徐「今試に私が狗の善惡を判別したことを君にお話し致しませう。狗質の劣等なものは餌食を

執つて飽けばそれで満足するので、例へば狐狸の鼠を捕へると一般で、別に大志もありません。中等のものは凝然として日を視つめるやうに意氣高遠であつて、あまり狐鼠つかないのです。上等のものは精神不動にして身を失へるが如くであります。又私が馬を相する術は更に一層得手であります。凡そ馬を相するに、其動作の直曲方圓によつて夫々繩鈎規矩の法にかなふものは、國中一等の馬です。されどこれは未だ天下第一の馬には及びません。抑々天下第一の馬には天成の材があつて、憂ふるが如く、迷ふが如く、悶然として其身を喪ふが如きさまで、斯かる馬こそ群馬に卓越して、奔放絶塵、一たび去つて、その止まる所を知らぬものであります。」

武侯は大に悦んで莞爾として笑つた。徐無鬼が退出して女商に會ふと、女商は之に問うた。女「先生は何事を吾君に説かれましたか。私が平素君に説く所は詩書禮樂の道德、若しくは金版六韜の兵法であつて、縦横論議、事局に當つて、それが大に功を奏したことは數へきれぬ位なのに、吾君未だ一度も悦んで笑はれたことはありません。先生は何事を説いて斯程に吾君を悦ばせられたのですか。」

徐「俺はたゞ武侯に狗馬を相する術を告げたのみである。」

女「それだけのことですか。」

徐「お前はかの越の浪人の話を聞かないか。彼は國を去つて數日の後には、その知己に遇へば喜び、國を去つて旬月の後には懷郷の情漸く深きが故に、知己でなくとも嘗て國內にて見覚えのある人ならば喜び、更に一年に及べば、懷郷の情愈々痛切にして母國人に似た人を見てすら非常に嬉しく思ふのであつた。こは國人の許を離れること久しきに從つて益々之を懷ふの情深きが爲ではないか。又、空谷に隱逃する者が、藜藿の如き雜草が騷擾の通ふ路に茂り塞がつて、一向人も通らぬ荒涼たる中にさまようて行きつ止りつ困倦して居る時に、遙に人の足音を聞けば心丈夫になつて喜ばしいものである。況して兄弟縁者が其側に來て、面りその警歎に接したならば、その喜びは如何ばかりであらう。吾君が眞人の警歎に接しなかつたことは實に久しい間であつた。俺が一たび會ふや、大に悦に入られた所以も解るであらう。」

更に他日徐無鬼が武侯に見えた時の會話。

武「先生は山林の間に隱居して、茅や栗を食ひ、葱や韭に飽いて、寡人を擯斥して敢て會ひも

せられなかつたが、今態々來られたのは、老耄の爲か、或は酒肉を求めんとしてか、但しは善謀嘉言を以て寡人の國家を利せんと思はれてか。」

徐「私は元來貧賤に生れて、未だ嘗て君の酒肉を口にしたことはなく、又欲しいとも思ひません。たゞ君を勞はうと思つて參つたのです。」

武「いかなれば寡人を勞はうとせられるか。」

徐「君の精神と形體とを勞はうと思ひます。」

武「そは如何なる謂か。」

徐「天地が一切の物を養ふは一であつて、貴賤高下を以て長短の區別を立てるものではありません。然るに今君獨り萬乘の主となり、國民の膏血を搾つて、己が耳目鼻口を養ひ、以て眼前の快樂を逐うて見えるやうですが、本然の良心は決してそんなに利己的のものではありません。本然の良心はもと／＼和同を好んで姦私を惡むもので、姦私は良心に對する一種の病であります。君は此病あつて而も自覺されぬやうですから、私はそれを慰め參らせたいと思ふのですが、君がそれ程お病ひなされる所以は何でせうか。」

武「寡人が先生に面會したいと思ふのは久しい間の希望であつた。寡人は今から大に民を愛し、義を行ひ、兵戰を偃めて了はうと思ふが可いのであらうか。」

徐「不可です。抑々有意的に民を愛するのは、結局民を害する始であり、又有意的に義を行ひ、兵戰を偃めるのは、畢竟秩序を亂し、兵戰を起す本であります。若しさういふ考でせられるならば何事も殆んど成功は出来ません。凡て其美を成さんとするものは皆凶器であります。仁義は美名であるが中心より爲なければ大抵虚偽に流れて了ふでせう。所謂仁義の形式を以て天下の事物を律せんとすれば必ず僞形が起り、既に成る所あれば必ず自ら本來の眞性を伐ひ、従つて心外境の爲に變亂せられて鬪争を生じ、民を害し、國を擾すに至るのであります。されば君も必ずや兵陣を宮樓の間に盛にし、歩騎を祭壇の宮に集めるやうに、心を鬪争に用ひ給ふことなかれ。逆心を包藏して苟くも得んとし給ふことなかれ。機巧、智謀、争奪を以て人に勝ち給ふことなかれ。それ他の士民を殺し、土地を併せて私欲私神を養ふは、他に勝つたやうではあるが、實は胸中亂れ傷つて、その戰勝果して何れに在るか分らないでせう。君若し兵戰を偃めんとならば唯々胸中の誠を修め、宇宙の眞に應じて中心を擾し給ふこと勿

れ。さすれば争はずして勝ち、民の死も従つて免るゝ譯であります。されば天下に敵なく、兵戦は自然に偃むので、何も殊更之を偃めるにも及びますまい。」

黄帝將に大隗を具茨の山に見んとして、方明は御者となり、昌寓は副乗となり、張若と諧朋とは前驅となり、昆闍と滑稽とは後従となつて襄城の野に至るや、七人の聖者は皆路に迷うたが、問ふべき所もなく、甚だ當惑した。適々馬を牧する童子に出遇つたので、之に尋ねた。

黄「汝は具茨の山を知つて居るか。」

童「知つて居る。」

黄「汝は大隗の在る所を知つて居るか。」

童「知つて居る。」

是に於いて黄帝は歎じて言つた。

黄「さて不思議な小供だ。具茨の山を知るばかりでなく、大隗の在る所までも知つて居るからには如何にも道を體得したものであらう。就いては何うか天下を治める道を知りたいものである。」

童「天下を治めるのも、要するに自己の一身を治めると同じく、無爲を以てするのみで、その他何等事とする所はない。自分は少年にして自ら世間に遊んだが、適々眩暈めまひの疾を起した。

その時、長者が自分に向つて、日出で働き、日入りて息ひ、日の車に乗つて襄城の野に遊べと教へて呉れたので、自分は今その教を奉じて、疾も少しく癒えたから、又重ねて世間を離れて自然の懷に遊ぼうと思ふ。天下を治めるのも、恐らく此の如きのみで、何も別の法を用ふることはあるまい。」

黄「天下を治めることは勿論汝の務むべきことではない。けれども何とかして其要旨が聞きたるものだ。」

童子は辭して答へなかつたが、黄帝が推して再び問うたので、やつと應じた。

童「天下を治める道も馬を牧する術と何等異ふ所はあるまい。馬の天性に任せて、之を害ふやうな銜くつばや鞭を加へないやうにさへすればよい。」

黄帝は此言葉を聞いて再拜稽首し、之を尊んで天師と稱して立ち去つた。

(譯者註—黄帝以下の七聖は皆寓言で、要するに、人知な事とし、氣勢を張り、是非を論じて、その

闇愚を飾らんとするもの、比喩であつて、その心を外境に馳せて、虚静無爲を知らぬものは、往々此の如く博聞多識にして、而も己の眞性を失ひ、道を求めて反つて徒に迷惑するに過ぎぬ。大隗は大道、襄城の野は空曠虚廓にして知の及ばざる所、童子は人性の純朴を表象したものである。

知謀の士は思慮の變化がないと樂しまず、辯舌の士は論談して條理を成さねば樂しまず、他の缺點を衝いて論難することを好む者は、事理を分析して人と争ふことがないと樂しまない。是れ皆物欲の爲に籠絡されて了つたものである。名譽を好む人は朝廷に興起し、務めて民望を得んとするの士は官爵を得るを以て榮とし、筋力の逞しい者は人の勝へ難き所に勝へることを矜り、勇敢の士は自ら憂患の中に奮ひ、兵革の武者は征戰を樂しみ、身を苦しむる隱士は意を聲名に留め、法律の士は多く事を治むることを求め、禮樂を重んずる人は動作の容儀を飾り、仁義を貴ぶ人は交際を以て重しとしてゐる。又農夫は耕種の事がないと和樂せず、商人は商賣の事がないと和樂しない。尙ほ百姓は朝夕財を積むことあれば勉め勵み、工藝に従事する者は器械の功あれば、自ら壯として其能を誇るのである。錢財を多く積まなければ貪慾の人は憂へ、

權勢が第一とならねば驕傲の人は悲しみ、富貴に依附する徒は變詐を以て樂しみとする。凡そ此等の人々は時勢の用ふるところに遭へば皆無爲なる能はずして活動するけれども、それは譬へば一年の間に百物の生成するは、四時の變化に隨つて移り、物の自由に爲し得る所でないやうに、決して自在の天地に逍遙してゐるものでない。然るに人は之を覺らずして、己が身體を勞し、心性を馳せて、外境の事物を逐ひ、その中に潛溺して終身無爲の本原に反ることを知らないのは悲しむべき極みである。

莊子は恵子に對つて次のやうな問答をした。

莊「弓を射る者が豫期せず偶然的中した場合に之を弓矢の上手と稱することが出来るならば、天下は皆羿の如き達人のみであるが、斯ういうて可いか。」

恵「可也。」

莊「世の中には公是といふもの、言ひ換ふれば普遍的に認められる標準はないのに、各々自らの是とする所を是としたならば、萬人皆堯の如き賢人である筈だが、斯ういふ議論は可能か。」
恵「可能だ。」

莊「然らば儒者、墨家、楊朱、公孫龍の學派に君を加へて五派となるが果して何れが是であるか。それともかの魯遽のやうな者ではなからうか。魯遽の弟子が「私は先生の秘道を得ましたので、冬は火を用ひずして鼎で粥を炊ぎ、夏でも水で以て氷を造ることが出来ます」と言つた時、魯遽は「冬至の日には陽氣が已に發し、夏至の日には陰氣が已に生じて居る。されば汝はたゞ陽を以て陽を召し、陰を以て陰を召すので、冬も寒からず、夏も暑からずといふも別に不思議はない。然しそは未だ吾道とするに足らぬ。今汝に吾道を語らう」と答へて、やがて大琴を調べて、一は堂に置き、一は室に置き、一方を鼓して宮音、角音を出せば他の一方の宮音角音も之に應じて振動し、共鳴した。こは唯々彼此音律の相同じきが故に、その聲相應じたのみで別に珍らしくはない。又任意に一弦を改調し、五音に於いて何等主音を定むることなくして、その一弦を鼓すれば、他の二十五弦は皆之に隨つて動くのである。そは同じく聲なるも、初めの二音が音の主となるから他が之に應ずる譯である。君と他の四派との辯も之と同じく、君が彼れ此れ言ふから彼等もそれに對應するのだ。若し君がそれを止めりや彼等も自然止めるであらう。君自らはとし、彼等を非とするはをかした話でないか。」

惠「かの四派の學者達は目下盛に俺と辯論し、言辭を以て對抗し、名聲を以て相壓して、未だ一度も俺の所論を非認し得たことはない。彼等は俺には及ぶまい。」

莊「齊人にその子を宋に棄て、門番にした者があつた。昔は門番は必ず足を斬られた者を使つたものであるから、門番にしようとするには、無慘にも其子を不具にしなければならぬが、之をも敢てするといふのは、子を愛せざるも亦甚しいと謂はねばならぬ。然るにこんな人は鐘器でも手に入れた時には、丁寧に束ね縛つて破損しないやうにするのであるが、こは實に物を愛すること子に過ぎたるもので誠に間違つた話である。君が徒に人と論争して私見を主張せんとするも亦此類に過ぎぬ。又迷ひ兒を搜索する者は廣く境外に互つて探すべきであるのに、たゞ近郷境内のみにて止めるならば、遂に見附からずに終るであらう。君が大道を求めずして諸學者の間に立つて自ら勝を制せんとするのものと異ならない。更に又楚人の異域に棄てられ、他人の家に寄寓して門番になつた者が、その孤獨寂寞に堪へず、夜半人無き時に逃げ歸らうとして渡し場まで行つて、舟人と喧嘩をするならば、舟がまだ岸を離れない中に、はや舟人と怨を結んで途中でひどい目に遭ふであらう。その身の境遇の舟人に頼るを

知らずして、之と争ふは愚の至りではないか。君が儒墨等を相手に是非茫昧の中に争ふのも亦同舟共済の地に在るを悟らない者と謂ふべきである。」

莊子が或る送葬の途中、恵子の墓を過ぎて懷舊の情禁じ難く、顧みてその従者に向つて斯う語つた。

「楚の都の郢えいの人が嘗て白泥を以て其鼻端に塗つたが、それは薄くて蠅の翼のやうであつた。今、斤でもつて之を斲うるは至難の業である。然るに匠石といふ工人に命じて之を斲らせた。匠石は斤を振つて今しも之を下す勢を示したが、郢人は泰然として之を斲らせ、やがて白泥を全く落しても鼻には少しの傷もつかず、郢人は立つたまゝ容をくづさなかつた。匠石は其妙技を恣にすることが出来た。宋の元君が之を聞いて匠石を召して「試に寡人の爲に鼻を斲つて見よ」と命じたが、匠石は之を辭して「私は以前は能く致しましたが、最うその對手は疾くの昔に亡くなりましたので、今は技巧を施すべき所が御座いません」と言つたといふことである。恵子が居てこそ俺も辯舌を用ひたが、今や彼れ死して議論の對手を失つたので、俺の辯舌も用がなくなつたのは遺憾である。」

管仲の病中、桓公が見舞に來て、その後任者に就いて問うた。

桓「お前の病氣は重態のやうであるが、若し萬一の事があつた時は、寡人はお前の後任として何人に一國の政治を托したら宜からうか。」

管「君の御内意は誰の御見込ですか。」

桓「鮑叔牙は何うかと思つてゐる。」

管「それは不可ないでせう。一體彼の性格は清廉潔白で、己より劣つた者は一切仲間にならず、又一たび人の過失を聞けば、終身忘れないといふ人です。されば若し彼に政治を執らせたならば、上は君の怒りを招き、下は民の意に逆ひ、間もなく罪を君に得ることでありませう。」

桓「然らば何人が適任か。」

管「是非にとならばまづ隰朋が適任でせう。彼の人と爲りは、上、その勢榮を忘れ、下、人をして己を忘れ、自ら黃帝に若かさることを愧ぢて、己に若かさる者を憫れむといふ人です。獨り其徳を有せずして之を人に分つを聖といひ、獨り財を有せずして之を人に分つを賢と申しますが、己が賢を鼻にかけて人に臨めば、到底人心は得られず、その反對に賢なるも

妄に之を現はさずして人に卑下すれば、人望は期せずして得られるのであります。其の社會に於けるも家庭に於けるも察々の明を用ひて聞見する所なく、虚心無爲の態度であることが貴いので、此點に於いて、まづ――隙朋が宜しいと存じます。」

吳王が舟を浮べて狙の多い山に登つた時、群狙は之を見て駭いて逃げ、深い藁の中に隠れたが、たゞ一疋の狙が飛び廻つて、樹枝を攀ち、様々の巧みを王の目前に現はして平氣で居たので、王は之を射たが狙は敏捷なもので、その最も速い矢を手づかみにして了つた。そこで王は左右の臣に命じて、交々進んで急に之を射させた爲に狙は遂にその矢を執つたまゝ斃れた。王は友の顔不疑を顧みて言つた。

「此狙は己が輕巧を矜り、敏捷を恃んで予に傲り、遂に斯かる果敢なき最後に至つた。戒むべきである。あゝ汝の態度に現はして人に驕つてはならぬぞ。」

顔不疑は歸つて董梧を師として、その傲岸の態度を除き、利樂を去り、顯名を辭したので、三年の後、修養の功が成つて國人は之を稱賛するに至つた。

南伯子綦は机に倚つて坐し、天を仰いで深く呼吸をした。門人の顔成子は偶々その室に入つ

て之に向つて問うた。

顔「先生は人物中の最も優れた方ですが、人間の體といふものは、本來その様に枯骸の如くならしめ、心も亦その様に死灰の如くならしむべきものでせうか。」

南「予が嘗て山穴の中に居た時、齊王の田禾が一たび會ひに来てから、齊の人民は其君に向つて、人を得たことを三度まで賀した。これは畢竟予自ら見はして世に先んずるが故に、彼も予を知り、又予自ら賣るが故に、彼は予を驚ぐのであらう。若し予にして名を有せずんば彼も予を知る筈なく、又若し予にして自ら賣らずんば彼も予を驚ぐことは決して出來ないであらう。名の著はれるのは即ち實の喪びる所以で、これは實に悲しむべきだ。あゝ予は人の自ら實を喪つた者を悲しむ。大抵、人は他を責むること明かにして己を責むることは暗い。故に予は又人の事を悲しむ者を悲しく思うた。而して人の悲みを悲しむことを知つて己が悲みを悲しまなければ、自ら治むる道に於いて甚だ疎略に失するが故に、予は又此者を悲しんだのである。斯くて後、日々派累に遠ざかつて、遂に今のやうな枯骸死灰の如き状態に爲り得るに至つたのである。」

孔子が楚へ往つた時、楚王は宴會を開いて之を饗應した。孫叔敖は盃を執つて立ち、市南宜僚は酒を受けて祝しつゝ孔子に對つていつた。

市「古人は宴會の際には言を以て相戒めたといふ事であるから、何うか一言承りたい。」

孔「私は聖人の不言の教といふことを聞き及んで居る。未だ嘗て人に語つたことはないが、今此機會に於いて語らう。市南宜僚は楚宋交戦の際、獨り軍前に出で、丸鈴を弄して、敵を見とれしめ、遂に勝つて兩國の戦難は治まり、孫叔敖は知略を藏し、枕を高くして安臥し、羽扇を乗つて敵を千里の外に折き、楚の國民をして無事ならしめた。この二人は皆無爲を以て國難を解いたのである。言は眞實に何の役にも立たぬから、私も何とかして三尺の喙くちばしを具へて發言不能のものになりたうものである。」

市南宜僚と孫叔敖とは不道の道にして、孔子は不言の辯と謂ふべきである。徳は道の一にして分れざる所に統括せられ、言は知の知り及ばざる所に休止して、至極の境となるものである。徳の歸入する所、言の默息する所は、至妙の一道にある。萬善の徳は渾然たる一道より降つたものであつて、到底此と同一なることは出來ぬ。又知に依つて知る能はざる所のものは、如何

なる雄辯を以てしても、到底之を言説することは出來ぬ。然るに今の儒墨を以て名とする者は強ひて之を爲さんとして、道を裂き知に畔き、その學術を以て徒に天下に禍するに過ぎぬのである。思ふに大海が東流の百川を辭せずして皆之を容れるのは廣大の至りであり、聖人は天地を併包して恩澤世界に及ぶも、人その何人の力なるかを知らぬ。従つて生きては爵位なく、死しては謚號なく、實利も身に聚まらず、名聲も世に顯はれない。これでこそ大人と謂はれるのである。狗は善く吠えるからとて良犬ではなく、人は善く言へばとて賢人ではない。況して大と謂ふことは勿論出來ぬ。大も有爲の念を以てしたものでは眞の大とするには足らぬ。況して徳とすることは出來ぬ。それ大に備はつてゐることは天地に越すものはないが、然し何も自ら求めて始めて備はる譯ではなく、すべて自然である。大備を知る者は、本來具有するが故に別に求めることもなく、又失ふことも棄てることもない。而して外境事物の爲に己を失ふことなく、己が身に反求して、各々自足して窮りなく、性來のまゝに循ひ、心知を以て之を摩拭しないのが、大人の眞相である。

子綦に八人の子があつたが、或る時、之を前に列ばせて、九方歎けんといふ卜者を召して、その